福性寺の歴史

父母の一生と父母の時代の福性寺

田久保雅子の思いで（第四版）

英文紹介　英文写真説明付き

編集

真言宗豊山派福性寺住職

田久保海誉

福性寺年間行事予定と行事の次第

元旦読経会

元旦午前十時から
住職の開会の挨拶、読経会の次第の解説
僧侶一同　奠供（てんぐ、供物進献、お供物を差し上げる意味です）声明（しょうみょう、お経に節をつけた音楽）四智梵語（仏の智慧をたたえる讃）
住職　元旦読経会表白（法要の趣旨や願いをご本尊様に表明します）
お檀家、出席者一同　般若心経二回　光明真言七回
檀信徒総代様ご挨拶
出席者一同　仏讃歌（仏をたたえる西洋音楽）
お誓い斉唱
住職の閉会の挨拶
お焼香後お供物の配布

春分彼岸会読経会

春のお彼岸のお中日（春分の日）午後十一時から
元旦読経会と同様な次第です

花祭り（釈尊降誕会）

四月の第一日曜日　午前九時から午後三時まで
お供物配布
花御堂（はなみどう）の中の灌仏桶（かんぶつおけ）の誕生仏に甘茶を注いで祝います

大施餓鬼会（だいせがきえ）

四月二十三日　午前十時から
健康講演　午前十時から
法要　午前十一時から（説解師による解説付き法要）

説解師　法要開会の言葉
住職導師　十八道法（最高のお客様、大日如来をおもてなしする法）
僧侶一同　奠供（てんぐ、ご本尊様に供物進献）
四智梵語（仏をたたえる讃）般若理趣経　水施
餓鬼供養
お檀家　お焼香　般若心経　光明真言
説解師　法要閉会の言葉
住職挨拶
総代様ご挨拶
仏讃歌（仏をたたえる西洋音楽）お誓い斉唱
解散

新盆供養法要（にいぼんくようほうよう）

七月の第一日曜日二時から
一年間にご家族を亡くされたご家族などの法要
精霊棚の見学と解説
元旦読経会と同様な次第です

盂蘭盆会（うらぼんえ）

七月十三日から十五日　午前九時から午後四時

秋分彼岸会読経会

秋のお彼岸のお中日（秋分の日）午後十一時から
元旦読経会と同様な次第です

健康講演会

毎年の秋に一度　土曜日もしくは日曜日午後二時から

堀船の郷土史を語る会

毎年の秋に一度　土曜日もしくは日曜日午後二時から

福性寺の歴史

父母の一生と父母の時代の福性寺

田久保雅子の思いで（第四版）

英文紹介　英文写真説明付き

編集
真言宗豊山派福性寺住職
田久保海誉

第四版　序文

「福性寺の歴史 父母の一生と父母の時代の福性寺 田久保雅子の思いで（第四版）英文紹介 英文写真説明付き」を発刊しました。平成二十七年発行の第三版に、写真は二十一枚を追加しました。前回の第三版から英文による福性寺の短い紹介文（Invitation to Fukushōji Temple）と、英文による写真の説明が追加されています。最近、外国人の来訪者や、お檀家の皆様の中で外国人とご結婚された方が少なくないため、英文の説明を求められていたためです。写真の英文の説明を読むことで、言い伝えではない福性寺の来歴を説明できるようにしました。しかし、この本の記事には私の実母に関するものが多いことから、福性寺だけにご興味をお持ちの皆様には、主に写真とその説明をご覧頂きたいと考えます。

また、第三版は「田久保海誉退職記念国際シンポジウム東京食道研究デー2015」（平成二十七年五月九日都市センターホテル）の外国人研究者や日本人の参加者への配布物になり好評でした。

裏表紙から始まる福性寺の英文の紹介文は千四百単語余りです。もちろん、この長さでは福性寺、弘法大師また仏教を説明できていません。この点は今後の追加と改訂により、よりよいものを作りたいと思います。

英語の写真説明は日本語の説明を直訳したものではありません。外国人の皆様にとって、重要と思われる点を詳しく書きました。

日本語の校正に関しては、すでに平成二十八年十二月に福性寺を退職した福性寺院代の林賢乗師と寺族の田久保曜子、田久保有華が担当しました。

第三版では、編者による英文は外国人による英文校正なしで発刊しました。しかし、今回の第四版の英文は、英文法を中心に米国シアトル高野山住職の今中太定師と太定師の奥様であるシアトル大学准教授ジェシカ ルドシャー 今中様（Jessica Ludescher Imanaka, Ph.D.）にお願いしました。大日如来の説明に関しては、今中師に文章を追加して頂きました。

また、画像は福性寺のお檀家の高橋昌子様の友人であるフォトグラファーの藤田喜弘様が電子データ化すると同時に素晴らしいものにして頂きました。記して感謝申し上げます。

平成二十九年二月十三日

福性寺住職　田久保海誉

第三版　序文

「福性寺の歴史　父母の一生と父母の時代の福性寺　田久保雅子の思いで（第三版）英文紹介　英文写真説明付き」を発刊しました。第二版に写真など図を八枚追加し、日本語文章を二千七百字余り追加や変更しました。また、英文による福性寺の短い紹介文（Invitation to Fukushōji Temple）と英文による写真の説明を追加しました。最近、外国人の来訪者や、お檀家の皆様の中で外国人とご結婚された方が少なくないため、英文の説明を求められていたためです。また、「田久保海誉退職記念国際シンポジウム東京食道研究デー2015」（平成二十七年五月九日都市センターホテル）の参加者への配布物になります。

しかし、裏表紙から始まる福性寺の英文の紹介文は五千単語余りです。もちろん、この長さでは福性寺、弘法大師様また仏教を説明できていません。この点は今後の追加と改訂により、よりよいものを作りたいと思います。

また、写真の英文の説明は日本語の説明をそのまま直訳したものではありません。外国人の皆様にとって、重要と思われる点を詳しく書きました。

真言宗豊山派宗務所教化センターの小島恵純師から宗派の仏教英単語に関してご教示頂きました。心から感謝致します。

校正に関しては、福性寺の林賢乗師と田久保曜子、田久保有華が担当しました。

平成二十七年四月八日

福性寺住職　田久保海誉

第二版　序文

「福性寺の歴史　父母の一生と父母の時代の福性寺　田久保雅子の思いで」をまとめて、母の三回忌のすこし前、平成二十五年八月に発刊しました。お檀家、町会の皆様、真言宗豊山派東京2号支所所属のご寺院の皆様には郵送させて頂きました。

真言宗豊山派東京2号支所のご住職様方からは、お誉めのお言葉を多数頂戴しました。意外なことに、福性寺に限らず現在のご住職様方が、ご自分の住職寺の歴史についてよくわからないことが多いとのお手紙やお話しをいくつか頂戴しました。また、大東亜戦争（太平洋戦争）の時の米軍による空襲により、全てが焼失して残っているものがないとのお話しもお聞きしました。

さらに、意外なことにお檀家やお檀家のご親戚の皆様からばかりでなく、町会の皆様からも入手のご希望が多く寄せられて、印刷した千部がなくなってしまいました。このため、掲載漏れの写真を二十五枚追加し、皆様から新たにご教示頂きました事柄を追加し、誤りを訂正しました。寒心の的でございました誤植を正して、第二版として発刊致しました。

なお、この本はいわゆる寺の中における伝承や伝説の記述ではなくて、石や紙に書いてある文章をもとに書きました。

第一版に続いて、ご笑覧頂けましたら誠に有難いです。

平成二十六年十月
母、雅子の祥月命日

福性寺住職　田久保海誉

序文

「福性寺の歴史　父母の一生と父母の時代の福性寺　田久保雅子の思いで」は、福性寺の歴史、特に福性寺のこの七十年間の詳しい歴史である一面と私の父母の思い出文集である一面とがあります。加えて、私の知っている福性寺に関する知識を網羅しました。写真集は特に福性寺に関する文物を多く掲載しました。

母の年表、写真、母自身による文章、母とご縁のありました皆様や家族の思い出の文章を集めました。母とご縁のありました皆様からは、ご依頼と同時にすぐに原稿が集まりました。大変感激しました。皆様に心から感謝致します。

私の母は寺生れのためか寺での生活が大好きでした。旅行に行っても、もちろん入院しても、帰宅すると「お寺の生活はいいねー」と話していました。これは全てお檀家の皆様のお陰です。心から感謝申し上げます。

改めてこの本を読んでみました。着るものも着物から洋服へ、学制も変わりました。戦後の政治的な左右の対立も今はやや緩くなったように思います。この本の中には、大正、昭和、平成の時代自体が母とともに綴られていると思いました。

今後とも母に頂きましたご厚情を私どもにも頂けましたら有難い次第です。

なお、原稿は母の一周忌前に頂きました。しかし、写真集が完成せずに、三回忌に発刊となりました。写真集はこの本に収録されたもの以外に、家族親族用の電子版があります。

皆様にお読み頂けましたら誠に有難い次第です。

平成二十五年八月

母、雅子の三回忌の前に

田久保海誉

福性寺の歴史　父母の一生と父母の時代の福性寺
田久保雅子の思いで（第四版）
英文紹介　英文写真説明付き

目　次

福性寺の歴史　父母の一生と父母の時代の福性寺
田久保雅子の思いで　福性寺住職　田久保海誉……1
田久保雅子　遺影……43
田久保雅子　年表……47
田久保雅子の文章
勤務評定問題（昭和三十四年頃）……53
堀中会員名簿あいさつ（昭和四十四年）……55
麦の会ごあいさつ（昭和五十九年四月）……56
中国寺院参拝旅行記（平成二年十一月）……58
奥尻島地震平成五年七月十二日発生　義捐金（平成五年七月）……63
雅子　生年月日　大正七年四月二十八日（平成二十一年頃）……64

田久保雅子の思いで
「追懐」
伯母さんの思い出　真言宗豊山派正福寺住職　星俊光……69
大奥様との思い出に寄せて　真言宗豊山派延命院住職　石井秀誉……71
仁者は寿し　真言宗豊山派福寿院住職　矢田正幸……74
雅子様との思い出　真言宗豊山派光永寺住職　榎本博司……75
大奥さまとの思い出　真言宗豊山派福寿院住職　宮本宥慶……78
田久保の母　真言宗豊山派松音寺副住職　林賢乗……80
祖母の思いで　田久保曜子……81
私と「うんばあば」の思い出　田久保圭誉……83
質問と答えと作文　田久保有華……85
食にまつわる祖母の思い出　田久保光……87
雅子さんの思いで　田久保周……88
質問と答え　田久保栄利子……90
祖母と私　田久保小萩……92
雅子おばあさま　田久保良……93
田久保和紀……95
写真集……97
あとがき……169
あとがき附図……170
Invitation to Fukushōji Temple　Kaiyo Takubo……180

福性寺の歴史　父母の一生と父母の時代の福性寺
田久保雅子の思いで

福性寺住職　田久保海誉

はじめに

私が福性寺の住職を管長猊下から拝命してから長い年月がたちました。平成二十三年に、母雅子が亡くなりました。また、父、周誉和尚の三十三回忌をお檀家の皆様とその年に行いました。この法事の後のお檀家の皆様との懇親会は本当に楽しかったです。ご法類の長老の皆様のお許しを頂き、父の十七回忌、二十三回忌、二十七回忌はペギー葉山さんにおいで頂きました。また、三十三回忌は芹洋子さんのディナーショーを行いました。

しかし、この間を振り返ってみますと、またそれ以前に関しても寺に記録が少ないことがわかりました。父の一周忌には「田久保周誉大僧正業績集」を作りました。この本により父のサンスクリット（梵語、仏教などの礼拝用言語）学者としての業績がわかり、また少しですが福性寺の歴史もわかります。

昭和二十七年に発刊された「堀船郷土史」を平成二十四年に復刻版として出版し、お檀家の皆様や堀船の皆様に無料で配布しました。この本により堀船の町の歴史がわかります。また、福性寺の縁起も少しわかります。しかし、私も福性寺について本当に知らないことが多いです。関東大震災前の本堂すら、いつ落慶したかも不明です。また、その写真もないのです。そこで、福性寺と父母について、私の知っていることを記録しようと思いました。いわば、この文章に書かれていることは、福性寺の歴史、私の父母について、また父母を通じての福性寺の最近（昭和十五年頃から現在まで）の歴史です。

以下、思いつくまま順不同で書きました。

福性寺のご本尊様

福性寺は正式には白王山中台院福性寺と申します。福性寺のご本尊様は千六百二十五年（寛永二年）に開眼供養をしています。寛永は徳川家光の征夷大将軍就任後に始まり、毛利輝元（寛永二年）や伊達正宗（寛永十三年）がこの頃に亡くなっています。福性寺のご本尊様は、明治維新後の神仏分離令による廃仏毀釈、関東大震災、大東亜戦争（太平洋戦争）でも一度も焼けることがなく江戸時代からのお姿を保っています。

ご本尊様は真言宗、密教で説く二つの世界の一つを代表する胎蔵界の大日如来様です。金剛界に対して、大日如来の理性の面を表現しています。仏の菩提心が一切を包みこみ育成することを、母胎にたとえたものです。蓮華（れんげ）によって表象されています。お像の形は、宝冠をはじめ瓔珞（垂れ下った飾りのことで首飾りや胸飾り）などの豪華な装身具を身に着けた菩薩のような姿の坐像が多いです。これは古代インドの王族や貴族の姿を現しています。如来は装身具を一切身に着けない薄衣の姿で表現されることが普通です。しかし、大日如来は宇宙そのものの存在を装身具のごとく身にまとった頂点に立つ者として、特に王者の姿で表されています。

福性寺のご本尊様の印相は、法界定印を結んでいます。ちなみに金剛界大日如来は智拳印を結んでいます。また、蓮台に座っています。お姿は違いますが、皆様がよくご存じの奈良東大寺にあります大仏、大毘盧舎那仏と同じ仏様です。歴史のあるご本尊様で、福性寺のお檀家の皆様のご先祖様を全てご存知です。素晴らしいことに、ご本尊様の建立の寄付に参加したことを口伝で今に伝えているお檀家がおいでです。

福性寺の縁起と過去帳

「堀船郷土史」の中には福性寺の縁起が書かれています。江戸時代の記録でも、福性寺の創建は不明です。しかし、すでに暦應二年（西暦千三百三十九年）には存在していました。暦應は南北朝時代の北朝方の年号であり、後醍醐天皇の亡くなった年（後村上天皇の時代）です。まだ足利尊氏は存命中で、楠木正成も存命中でした。この事実は

武蔵型板碑（秩父長瀞産の緑泥片岩を加工して作った供養塔）が福性寺内から発掘され、その表面にこの年代が書かれていたことによりわかっています。武蔵型板碑は鎌倉時代から足利時代に流行したお墓の形式です（写真）。墓所内に板碑を持った石井家の墓所がありました。石井家は江戸時代よりも以前から梶原に住み着いていた可能性が大きいです。

過去帳としては明暦元年からのものがあります（写真）。明暦は千六百五十五年に始まり、徳川家綱の時代です。村民のお戒名、名前（俗名）、没年齢、親子関係が福性寺の過去帳（霊監簿）に記録されています。時代を反映して子供の仏様が多いです。

父がこの寺に来た時は百軒余のお檀家であり、この昭和二十七年頃が二百軒余でした。

江戸時代の古地図の中の福性寺

古地図にも福性寺は記載されています。延宝時代（千六百七十三～八十一年、徳川家綱、綱吉の時代）の梶原堀之内村や船方村の古地図中にあります（写真）。これは北区史近世1の百五十七から百六十ページに、梶原堀之内村、船方村、上尾久村、上中里村などに関する延宝時代の地図と説明があります。現在の隅田川（荒川）は戸田川と記載されています。当時の用水と水路の多くは、現在は路地となっています。梶原銀座商店街（ショッピングロード梶原）は鎌倉往還の一部であることがわかります。福性寺近くの神明社も白山権現も福性寺持ちでした。

国立国会図書館所蔵の安政二年（千八百五十五年）に幕府普請方役所（神吉兵左衛門など）に提出された武州豊島郡梶原堀之内村絵地図（写真）にも福性寺は記載されています。この地図を幕府に提出したのは、梶原堀之内村惣代 名主 忠三郎と組頭（名主の補佐役）の常七であると地図の別ページに記載されています。この二人の名前は福性寺の過去帳の中にあり、石井家のご先祖様である石井忠三郎様（明治十七年十二月二十八日亡、九十歳）と石井常七様（明治十九年年三月七日亡、七十六歳）であり、没年齢とお戒名もわかります。お二人とも当時としては大変な長命でした。

また、この地図には梶原塚が記載されています。神明社も延宝時代の地図と同様にこの安政の地図

にも記述されていますが、しかし、私の子供の頃（千九百四十九年生まれ）には、神明社はすでに存在していませんでした。また、この地図を見るまで福性寺の左わきに神明社があったことを知りませんでした。

上知令関係文章

旧帝国図書館（国立国会図書館支部上野図書館などを経て現在、国立国会図書館子ども図書館）において、明治の初めの福性寺に関する古文書を周誉師が調べた文章が寺に残っています。帝国図書館蔵の除地古跡社寺台帳北方によると、寺内三十間四方でした。明治十年の文章によると、明治三年から、明治八年まで鈴木深誉師が住職を務めていたと記録されています。しかし、深誉師については、法類の中では議論されたことはありません。明治八年からは西福寺住職清水明誉師が明治十年以降まで兼務していました。

明治五年（千八百七十二年）と十年の福性寺に関する上知（地）令（明治四年と八年に寺社領の墓地以外の土地が明治政府により没収されました）に関連した古い資料によると、両年ともにお檀家数は五十軒と書かれています。上知令により、寺の地蔵門から山門までの参道や駐車場と墓地の間の道などは公道（現在、区道）になりました。また、本堂（二十八坪）と庫裡（十二坪）も建立時期は不明であり、全てのお檀家の寄付によりできたと記録されています。明治十年の文章は、明誉師、不動院住職（恵明寺兼務）長谷川栄誉師、お檀家の堀江傳三郎様、石井与三郎様、堀江仁右エ門様などの連名で提出されています。

また、寺内にはご本尊大日如来、両大師様と不動明王があったことが記録されています。しかし、この不動明王は、現在はありません。また、不動明王が寺に安置されていたことを私（昭和二十四年生まれ）は聞いたことがありません。江戸時代は住職の不在期間が長く、兼務寺である時間が長く、明治時代は短期間を除いて無住寺で、大正六年になってから住職が常住する寺となりました。このため、不明なことが多いです。

江戸時代からの本堂、仮本堂と現在の本堂

以前の本堂は関東大震災（大正十二年九月一日）のために倒壊した本堂の仮本堂ということになっ

ていました。震災により倒壊後、仮本堂は大郷家のご先祖様で大郷組の初代大郷彌太郎様がほぼお一人の力で建立されました。米国産のヒノキ材が使われていました（写真）。震災前の本堂は、萱葺きでした。その後、瓦葺にしました。父の話によると、瓦屋根の重みで震災の時に倒壊したそうです。

関東大震災前の本堂の絵は明治三十六年（千九百三年）のものが福性寺にあります（写真）。この絵からは間口は五間半に見えます。しかし、古い墓地図では正面は六間で、奥行きは五間（別の文章では四間半）と書かれています。この本堂の絵から、当時は茅葺きであったことがわかります。明治五年（千八百七十二年）の上知令に関する資料の中でも、すでにこの本堂の建設時期は不明と書かれています。また、簡単な見取り図が添付され、本堂と庫裏（住職住まい）があり、客殿はありませんでした。さらに古い本堂の写真や絵などをお持ちの方は複写を作らせて下さい。

本堂の右側には庫裡がありました。門は木製の簡易なもので冠木門と棟門の中間のような形です。墓地は生け垣により道と隔てられ、背の高い木が何本も見えます。また、小さなお墓も多数見えます。庫裡の右前には芭蕉の樹と、その前に井戸があります。これは天秤（てんびん）仕掛けで、桶を引上げる跳上げ式の釣瓶井戸（つるべいど）です。明治三十六年の絵のために、明治三十七年に移設した梶原塚の背の高い宝篋印塔は見えません。父は大正九年に福性寺に来ました。このため、震災前の建物を知っているはずですが、大正十年には真性寺様におりましたので、本堂の倒壊自体は知らなかったと思います。仮本堂はコンクリートの床を土足で歩いていました。このため、ご法事のために掃除をすると、土ぼこりが大変でした。水をまいてから母と掃除をしました。

ご法類の故門屋大寿大僧正のご礼室様（鳥居敬誉猊下ご長女）からお聞きしました。日本の三大台風に数えられている室戸台風の時に旧仮本堂の天井の半分が落下してしまったことがあるそうです。平成二十六年四月二十七日に鳥居慎誉猊下をはじめご兄弟皆様や門屋信誉僧正がおいでの時にお聞きしました。室戸台風は千九百三十四年（昭和九年）九月二十一日に高知県室戸岬に上陸しました。

ところで、鳥居敬誉猊下のご家族の皆様は福性寺に十五年間おいでになったそうです。鳥居敬誉猊下とは法類旅行などで何度もおあいしました。私が住職になる前からです。特に、周誉師の死後、つまり住職就任後は新任の住職として何度も励まして頂きました。また、寺の住職のあり方をお話し頂きました。最晩年のご入院中にも、何回かおうかがいしたことがあります。しかし、非常に残念なことに、鳥居敬誉猊下が福性寺の住職をお務めの時代の出来事については、何もお聞きしていません。

現在の本堂は昭和三十九年十一月三日に落慶法要をしました(写真)。この鉄筋の本堂はお金のない時代の建物で、雨漏りがあり、この先どれほど持つのか心配しています。この本堂は王子駅南口近くの日辰建設株式会社が作りました。本当にお金のない時代にお檀家の皆様のご寄付により作られました。ご寄付の分割払いのお檀家のために、王子信用金庫が寺に代わって集金していたこともあります。

本堂の内陣にある仏具はお檀家のご寄付によるものが多いです。寺の規模からみると大型の仏具が多いことが特徴です(写真)。

また、福性寺に来てから百年程度の古いものが多いです。灯篭、常夜灯は明治や大正時代に作られました。これは、古いものを大事に使うと言う先代周誉住職が実践してきたことを、私も継承して来ました。数年に一度、大型の仏具を修理に出しています。仏具の修理は経費がかかりますが頑張っています。また、お檀家からのお預かりものですから、住職自身で毎朝、清掃を怠らない様にしています。このため福性寺の内陣(福性寺ではご本尊様の前の床が板の部分)の仏具は非常に清潔だと思います。

本堂の扁額など

本堂の扁額(写真)は権田雷斧猊下(真言宗豊山派二代目管長、千八百四十七年、弘化三年から千九百三十四年、昭和九年)の筆です。本山の能化や大正大学学長を務めました。大正十三年(千九百二十四年)真言宗を中国大陸で再興しようとして、潮州などにおいて、真言宗の奥義である伝法灌頂(でんぽうかんじょう)を中国人に授けました。伝法灌頂を授けられた人々の子孫は、現在、香

港、ベトナム、カナダ、米国などで香港居士林、明月居士林を開いて真言宗を熱心に信仰しています。

しかし、だれがいつこの扁額の揮毫を権田猊下に依頼し福性寺に将来したか不明です。この山号額は権田猊下のご立派な業績により、福性寺の寺宝の一つと言えるものです。

本堂玄関のお賽銭箱は大正十二年（千九百二十三年）三月に寄付されました。関東大震災の半年前に寄付されていました。震災により福性寺の本堂は倒壊しましたが、お賽銭箱は今に伝わっています。お賽銭箱には、堀の内本郷次郎、神田朝倉萬次郎、西ヶ原宮崎榮次郎のお名前があり、最後に堀江傳三郎（堀船一丁目）謹録と書かれています。

現在の客殿と庫裏

現在の鉄筋コンクリートの客殿（書院、写真）の前の木造の書院は、関東大震災でゆがんで倒れかけてしまったものを引き直して柱を垂直にしたものでした。現在の書院（客殿）はお檀家のご寄付と寺の所有の宅地を売って作られました。昭和四十九年（千九百七十四年）六月に完成しました。施工は福井工務店でした。

私の子供のころの庫裏（くり、住職の住まい）は木造平屋建てでした。六畳間が二室、これに台所、風呂、お手洗いのあるだけの簡素なものでした。お風呂は五右衛門風呂でした。鋳鉄製の風呂桶に直火で暖めた湯に入浴する形式です。風呂桶の底部はお鍋の底と同じで高温になっていました。直接触れると火傷するため、木製の底板の踏み板を湯桶に沈めて湯浴みするものです。その後は、五右衛門風呂はそのままで、木製のガス式の湯桶（木桶風呂、いわゆる鉄砲風呂）となりました。

風呂の屋根はトタン葺で雨漏りがひどく、屋根に上ってコールタールを私が塗っていました。

昭和二十七年頃までは、お手洗いは庫裏の外にあり、別の建物でした。外のお手洗いのあとには、物置ができていました。昭和四十年頃に現在の庫裏ができました。お檀家の石井工務店の石井英四郎様が作りました。

山門は大僧正昇任のお祝い品

昭和五十四年十月六日、福性寺の山門（写真）が完成し「受け渡し式」の日に父は亡くなりました（七十三歳）。山門は井上工業株式会社が普請し

ました。この山門の設計施工の担当者の依頼により私が担当者に戒名を授けました。

この山門は父の大僧正昇任を記念して、総代様方とお檀家の皆様からの記念品として、お檀家のご寄付により作られました。山号の扁額の梵語を母は山門をくぐるたびに発音していました。父から聞いたのであろうと思います。「シリーダラーニムカ」、「聖なる真言宗の寺」の意味！と私に意味を教えるようによく言っていました。私は「周誉大僧正記念　聖なる真言宗の寺」ではないかと心から思っています。

私が父の四十歳代半ばの子供であったことから、本堂、書院（客殿）、山門を父と母の元気なうちに作るために、父は苦労したようです。私が苦労しない様にとの思いであったと聞いています。

また、若干のお金が余りましたので、手桶を置くための小屋を客殿まえに作りました。

梶原政景と梶原塚

千五百年代もしくは千六百年代に建立された梶原塚（写真）が本堂右前にあります。明治三十七年に福性寺に移設されました（堀船郷土史）。戦国時代末期の豪族の供養塔です。足利時代末に、太田道灌の子孫で太田資正（三楽斎道誉）の次男である梶原源太政景が今のポンプ場（堀船三丁目の下水道局王子ポンプ場）あたりに屋敷を構えていたと言われています。この梶原氏ゆかりの供養塔です。鎌倉時代の梶原氏とは関係がありません。享保時代（千七百十六から千七百三十六年）の頃までは石碑や石段があり、しかし洪水で川に崩れ込み、今は一株の松だけがあると、「江戸名所図会」（天保時代、写真）に記されています。この「江戸名所図会」は神田の町名主、斎藤家の三代にわたる編纂事業でした。長谷川雪旦の挿絵があります。この事業は寛政（千七百八十九から千八百一年、十一代将軍徳川家斉の時代）に始まり、天保五年（千八百三十四年）と天保七年（千八百三十六年）の二回に分けられた発刊により終わっています。江戸名所図会は七巻二十冊からなります。この中で梶原塚は、一本の松の木が残るだけであると記されています。現在の宝篋印塔に書かれている天保二年（千八百二十五年）の再興は書かれていません。つまり、江戸名所図会の作者の梶原塚訪問は、再興が完了した天保二年より前だったことがわか

ります。

安政二年（千八百五十五年）の古地図（写真）を見ると、現在の王子自動車学校脇の通り、自動車学校から豊島方向を見て鎌倉往還が左に曲がる交差点の右側の小道の先の左側、隅田川（旧荒川）との間に梶原塚があります。田に囲まれた数十坪ほどの面積が梶原塚と記録されています。曲線状の川に面してやや高台となり現在の宝篋印塔などがあり、風景のよい場所であったようです。

福性寺内に移設された梶原塚は、四基の石仏、光明真言塔と宝篋印塔からなります。光明真言塔は通常見るものより格段に大きく、なかなか立派です。この光明真言塔の梵字の配置を参考に周誉師は現在の本堂の天井に光明真言の梵字を配置しました。また仏教梵語学の専門家としての知識を活かして、古代インドの正統な梵字を書きました（写真）。

石造宝篋印塔は中国において作られ始め、日本では鎌倉時代初期頃から制作され、中期以後に造立が盛んになったようです。福性寺内の宝篋印塔の建立時期は不明です。しかし、すでに述べましたが天保二年（千八百三十一年）に再興されたと塔に書かれています。再興時の開眼導師は深川不動院の木食賢明師、発願主は尼屋利兵衛（鉄砲洲の酒問屋であったらしい）、世話人は徳嶋屋半助と書かれています。この木食賢明師のお弟子明範師がこの寺の住職であった時代（文政の頃）もあるようです。

しかし、確かに石造宝篋印塔には深川不動院木食賢明と書かれていますが、現在は深川不動院について詳細はわかりません。成田山の東京別院の深川不動堂と関係があるのでしょうか。深川不動堂は明治維新の後、神仏分離令後に新しくできたお寺と聞いています。ご存じの方はお教え下さい。

都電荒川線の梶原電停はこの梶原塚にちなんで命名されました。

水野家の聖観音像

本堂前の左脇の聖観音像は、延宝八年（千六百八十年）に建立され、領主水野家の聖観音像で水野信定の墓です（写真）。この方は水野家の長男であり、剣の名手であったと言われています。しかし、私闘で敗れ殺害されたと言われています。私闘は徳川幕府のご法度に触れるので、菩提寺の駒

込吉祥寺に埋葬せずに、知行地の福性寺に埋葬したと聞きました。何がしかの時代小説に出てくるとの話を聞きましたが見つかりませんでした。

大東亜戦争殉難慰霊碑開眼供養と堀船地区遺族会

昭和三十二年、千九百五十七年三月には大東亜戦争殉難慰霊碑開眼供養（福性寺本堂前）が行われました。周誉師が表白文を読んでいる写真が残されています。最初、碑文は太平洋戦争とする予定でしたが、日本での先の戦争の正式名称である大東亜戦争に変更されました。写真には添田様、堀口様、問矢様など懐かしい皆様が写っています（写真）。

慰霊碑には堀船地区で戦死した皆様のお名前が彫られています。お名前は百七柱におよび、親子や兄弟の戦没者も並んでいます。また、堀船地区遺族会からは、本堂内に堀船地区戦病没の皆様のお位牌をお預かりして、毎日供養しています（写真）。このため、福性寺は堀船地区で亡くなった戦没者の菩提寺になっています。

毎年、春秋のお彼岸にはこのお位牌もお檀家の仏様のお位牌などと一緒に読経会に参加の皆様にお焼香をして頂いています。また、十年ごとにお檀家の皆様にもお知らせして法要を行っています。

平成八年、千九百九十六年の秋のお彼岸には、ご遺族の出席を得て、終戦五十周年の記念法要を行いました。最近ではご遺族の減少や、この供養塔に関する記憶も薄れたのかお参りは少なくなってきています。

七十一周年記念としては、秋のお彼岸読経会・追悼法要の前に、一時間の昭和歌謡のコンサートを開きその後、その後に法要を行いました（平成二十八年九月二十四日）。浅草の大道芸人出身の「東京大衆歌謡楽団」の皆様に戦前・戦後の歌謡曲を歌って頂きました（写真）。

生垣とブロック塀

昭和三十三年ごろまでは寺は珊瑚樹の生垣で囲まれていました。これを当時流行し出していたブロックの塀にしました。ブロック塀は昭和三十四年のお正月には完成しています（写真）。珊瑚樹の生垣には大きな穴が空いていました。このため、子供であれば簡単に門以外からでも墓地に出入りできました。

施餓鬼会

施餓鬼会は福性寺最大の行事です。仏様やご先祖様にお供物を真心から奉げる法要です。通常、百人以上のお檀家と二十人の僧侶の出席があります。十時から医師（健康講演）か僧侶（法話）のお話しの後に、大法要（写真）が行われます。

式次第は本書冒頭の福性寺年間行事と行事の次第（青ページ）をご覧ください。住職はご本尊様の前の大壇で十八道法を行います。これは仏様をお迎えする十八の作法、手指による印（印契、印相）と真言（マントラ）からなります。その後、大壇を降り施餓鬼壇で水施餓鬼供養（あらゆる仏様に供物を施す）を行います。式衆の僧侶は四智梵語と般若理趣経を読みます。参加者全員はお焼香をして、般若心経を読み、西洋音楽の「お誓い」を歌います。亡きご両親やご先祖様を誠実にご供養しています。どうかお檀家の皆様におかれましては、ぜひともご出席下さい。

父の死後の施餓鬼会は、父の時代から引き続き清水淳誉大僧正（写真）に法話をお願いしました。銘記したいことですが、福性寺では四十年以上にわたり清水師に法話をお願いしてきたことになります。本当に有難かったです。

父の死の翌年（昭和五十五年）から著名な医師の健康に関するお話しを追加しました。平成二十二年に施餓鬼会を七月二十三日から四月二十三日に変更しました。施餓鬼供養は必ずしもお盆の季節に行う必要がないためと、お檀家の皆様がご高齢になり熱中症を心配したためです。

読経会、花祭り

元旦読経会は檀徒総代の故石井與五郎様の発案で昭和六十年頃から始めました。元旦にはにぎやかな短時間の参拝、初詣という形ではなくて、古来からの年籠りの意味を含めて、厳粛な読経会を開いています。ご家庭の安泰や新年の吉祥のご祈願やご家庭の慶事などをご本尊様やご先祖様にご報告頂いております。また、両彼岸会には昭和六十四年から彼岸会読経会を始めました。平成元年から新盆供養法要（七月第一日曜日、写真）を始めました。

平成十五年から花祭り（写真）を四月八日から四月の第一日曜日に行うようにしました。どうか、四月の第一日曜日には、お子様、お孫様の健勝と

人生での発展と成功の祈願にご来寺下さい。
　また、平成二十五年から歴史講演会や健康長寿講演（写真）会を数回開くことにしました。読経会、講演会や花まつりはお檀家以外でも、どなたでも歓迎します。実際、講演会には町会の皆様が多数おいでになります。お供物やお茶菓子の配布もあります。同僚、お友達やご親戚をお誘い頂きましてご参加ください。

先代住職の年回法要と涅槃仏

　母は父の年回法要を大変楽しみにしていました。父の十三回忌の時には福性寺から大正大学に通った僧侶方の皆様と総代様などのご寄付により涅槃仏が建立されました。福島県郡山市の小田弘毅大僧正から記念事業をするようにと莫大なご寄付を頂きました。小田様が発起人となり皆様からお金を頂きました。かねてから仏陀の教えによれば、臨終に臨んでも心静かであることを表す涅槃仏が境内にほしいと考えておりましたので、皆様の賛成をえて涅槃仏を建立しました。愛知県の岡崎市に彫刻家にあいに行きました。涅槃物の顔だけが完成した段階でした。素晴らしいお顔で、現在皆様が見ている通りの涅槃仏です。

寺の整備

　福性寺は本堂への中央参道近くまでお墓がせまり、背の高い杉の木が多くありました。つまり、なかなか植木などを植えることができない手狭な寺でした。仏教行事に必要な庭での儀式もできないあり様です。しかし、父の時代から、現在までに二十軒近くのお檀家が墓地を改修する時に、通路を広げ、庭を作るために墓地を狭くして頂きました。墓地を数分の一まで小さくして頂いたお檀家もあります。母がこのような件でもお檀家との折衝に活躍しました。現在は山門を入ると、参道の周りに小さいながらも庭ができて、私の子供時代とは別世界のような佇まいです。新旧の比較には、本書のあとがきの附図をご覧ください。
　この五十年間に墓所の改修時などに、通路や庭に墓所の一部を提供頂きました皆様のお名前を以下に列記致します。井口和子様、故小宮清作様、故堀江節子様、堀江正敏様、堀江良子様、石井信夫様、堀江一男様、永井昭武様、故新野輝雄様、故飯田裕世様、小泉好正様、故石井則子様、関根幸

子様、故玉岡隆雄様、石井益枝様、小松原正秀様、松本幸夫様、矢島敦郎様、石井幸一郎様、堀江弘好様の皆様の墓所の改修時に、墓所の通路側などの一部を通路や庭にして頂きました。実にたくさんの方々です。さらに、改修前ですが通路側を通路にするお約束がお檀家の二軒とできています。

心から参道などを広くするためにご協力いただいた皆様に感謝しています。

今後も、日陰となる屋根つきの休息所と、木々に囲まれた陽のあたるテーブルと椅子のあるオープンスペースを作りたいと思っています。墓地を狭くすることは、なかなか賛成頂けません。しかし、墓地を切り分けて再分譲する時はさて置き、お檀家の皆様の憩いや追憶の場や庭園を造るための時には、どうか宜しくご協力をお願い申し上げます。

なお、福性寺には外にお手洗いがありません。計画がありましたが、強い反対がありました。

休息、待ち合わせスペース

前項の寺の整備（本書三版）でも書きましたが、福性寺には屋根つきや屋根なしの休息スペースや外にお手洗いがありません。ご存知のように、参道付近などに空き地がないことが福性寺の特徴です。それでも、人と待ち合わせのためや、タクシーを待つためにも山門付近に椅子を置きたいと考えていました。このため、ご本尊様に向かって参道左のお墓を移動して頂き、庭を壊して狭いながらも休息スペースを作りました。平成二十七年十二月に完成しました。しかし、庭を壊し樹木を捨てなくてはならなかったのは本当に悲しかったです。

工事費はお檀家の故安原義明様、宝勤明道居士霊位と故伊藤リヨ様、永慈妙清信女霊位のご寄付を主に当てました。休息スペースは、どのような形がよいか議論がありましたが、現在のような綺麗な緑色系統の石を敷き詰めた床を作りました。小杉石材店が施工しました。あまりに綺麗で、ある意味、福性寺らしくないかなと見るたびに思っています。

安原義明様も伊藤リヨ様も、お若い頃からご高齢になるまで、本当によく働きました。心から感謝申し上げます。

さらに、平成二十八年に完成した本堂西側の五坪の広さのオープンスペース（写真）は、川間堀

江家からスペースをご寄付頂き、工事費は主に福田きよ子様のご寄付を当てました。

今後、さらにオープンスペースを一カ所、屋根付きの東屋風の休息スペースを一カ所作りたいと考えております。このため、墓地の移動など交渉しています。しかし、なかなか難しいです。

門前の駐車場

駐車場は、参道はさんで白山神社の西側、参道の左側にあります。安政二年（千八百五十五年）にも、現在の形で明確に存在しています。江戸時代は何に使われていた土地か不明です。隣接地は小泉家の水田でした。駐車場と公道の間の現在の御影石製の花壇は、平成二十七年（二千五年）に完成し、工事費は前述の伊藤リヨ様のご寄付を当てました。

仏教徒海外奨学基金

奨学基金を募り始めた正確な日時は、寿徳寺住職の新井慧誉理事長の急逝で資料がなくなりわからなくなりました。しかし平成三年に第一回目の配布が行われました。現在は私が理事長兼全ての事務を担当しています。すでに二十年以上の歴史があります。八寺院と有志により運営されています。現在までに総額千五百万円近くの奨学金を千数百人以上の奨学生に配布しています。チベット（在インド）、スリランカ、インドの奨学生から礼状や絵画が送られてきます（写真）。特に中国政府により殺人を含めた人権侵害の激しいチベット人奨学生に配布額を増やす予定です。この奨学金はそもそも西福寺住職の小松原俊誉師と私が考えインドなどにお金を届けるルートを持つ新井慧誉師に理事長就任を依頼しました。毎年、奨学金の授与式への出席の依頼が来ています。この件に関しては、母を含めて私の家族からは即座に賛成の声を聞くことができました。

母と埼玉県三郷市の延命院

母は大正七年四月二十八日に産まれました。寺の長女でした。両親は石井秀雅師（三郷市延命院住職、写真）とつねです。しかし、母の弟、私の叔父（二弟）の産まれた時に、母の母親（私の祖母）つね（お戒名は蓮法院観是妙荘信女）は産褥熱により三十三歳で亡くなりました（大正十一年

九月十三日）。つまり、母は母親のいない家庭で育ちました。母には母親の記憶がありません。

私の祖母つねの告別式の最後のお別れの時に、母が祖母の柩に入りたいと泣いて、告別式の会場であった延命院の本堂（現在の本堂と同じ建物です）が大騒ぎになり、会葬者全員が泣いてしまったと聞いています。母の両親のお墓は延命院の虚空蔵堂の裏にあり、土葬でした。母は延命院への墓参をいつも楽しみにしていました。毎年数回は墓参に出かけました。晩年には私の長男の圭誉が墓参に連れて行ったこともあります。延命院のいそがしい時期でも母はよく出かけました。お正月などいそがしい時にも、本当に石井秀誉住職はいつも歓迎してくれて有難かったです。

延命院には虚空蔵堂があり虚空蔵菩薩が祀られている名刹です。虚空蔵様は鰻とご縁のある仏様です。このため、延命院の隣家の皆様と同様に母は鰻を食べないようにしていました。

母の兄弟

母の兄弟は母を含めて三人です。母のすぐ下の弟、石井弘章師は埼玉県三郷市の延命院の住職に就任しましたが早く亡くなりました。弘章師は盂蘭盆会のお棚経の季節には、亡くなるまで福性寺の手伝いに来ていました。弘章師の長男、私の従弟の秀誉師が私の寺から高校と大学に通いました。秀誉師が現在の延命院の住職です。母の二弟の浅水稔様（写真）は、お元気で毎回父と母の法事においで頂いています。

母と吉岡家

祖母は吉岡家の出身です。祖母の兄（母の伯父）の吉岡経蔵さんは、私の子供時代まで千葉県の京成幕張駅の近くのお住まいでした（写真）。お正月のたびに私か私の姉千穂子がお節料理などを届けました。この母の叔父（私にとっては大叔父）から、私はお小遣いを何回ももらいました。祖母の死の間際に、祖母から「雅子のことをよろしく」と頼まれたとのことです。このため、母の結婚の時には羽織など嫁入り道具を整えてくれました。この叔父は日露戦争の旅順攻囲戦の二百三高地における傷痍軍人でした。ロシア軍からの銃弾の貫通銃創により片方の膝関節が曲がりませんでした。吉岡家の菩提寺は松戸市松戸の大正寺です。この

叔父の死後、ご遺族は吉岡家の墓地を千葉市近郊の平和霊園に改葬（移転）したそうです。ある時、母と大正寺にお参りに行った時には、すでに移転後でした。母の晩年に大正寺のご住職様からお手紙で詳細をお聞きしました。しかし、現在でも吉岡家のご本家様は大正寺様にお世話になっています。

祖母の実家は水戸街道沿いの料亭でした。水戸徳川家が参勤交代のおりに休息したことがありました。祖父の実家は途絶えています。石井家の先祖代々のお墓は、延命院からほど近い場所（茂田井）にあり、現在、秀誉師が管理しています。

母の地元の小学校

母は地元の小学校に入学しました。母が時々懐かしそうに話したのですが、同級生の男子と喧嘩となり最後は馬乗りになって勝ってしまい、意外に男子は弱いと思ったようです。ちなみに、その男子は延命院の総代様になりました。後年、母が「よく小学校でいじめられた」とその総代様に話したところ、「どうだか？！」と言われたと言っていました。総代様はこの事件をご記憶だったようです。小学校では全学年を通じて、「学術操行一等賞」と「精勤一等賞」をもらっています。当時のことを知っている村の人から、家族のよいところを母は全て持っていると私は聞いたことがあります。

越谷高等女学校

越谷高等女学校に進学しました。本当は東京の女学校に行きたかったらしいです。毎日、延命院から自転車で通いました。道の悪い時代で、よくタイヤがパンクして困ったとのことです。たくさんの友人がいたようです。八十歳ごろまでは女学校の同窓会がありました。当時、高等女学校に子供を送り出す家庭は裕福なところが多かったとのことです。これらのご家庭と比較して、母はなんとお寺は貧しいのかと思ったと話していました。

私と家内の曜子が鎌倉のアジサイ寺として名高い明月院に出かけたことがありました。そこの住職夫人も母の友人でした。

結婚

女学校を卒業（昭和十年三月）後、比較的すぐに

父と結婚しました(昭和十二年四月)。仲人は鳥居敬誉猊下と染谷勇快師です。染谷師は越谷市の寺の住職で祖父秀雅師の友人であったとのことです。

福性寺住職、上東野照良師

私の父(周誉師)は津田沼(習志野市)の比較的大きな農家の生まれでした(明治三十九年三月九日)。次男でした。父の叔父(実父の弟、でんぷん工場を経営)の家庭の養子となっていました。しかし、その叔父に実子(田久保友吉様)が産まれたことから実家に帰っていました。その後(大正九年三月二十五日)、血のつながらない叔父(上東野照良師、姓は「かとうの」と読みます。父の叔父夫人の兄弟、大正十年七月八日死亡、写真)が福性寺の住職であったために、また、上東野師は病気(結核)と子供がいないことから、父は後継者になるように頼まれたようです。父は自分を評して、「もらいっ子癖」がついていたと笑って私に話したことがあります。これは、叔父の養子になり、上東野師の後継者となり、次に真性寺の清水教誉猊下の弟子になったからです。一年三カ月ほど父は上東野師と福性寺で生活したことになります。

上東野師は結核に伴う喀血で夜間に死亡しました。夫人は喀血の始末をした後、また上東野師が息を引き取った後に睡眠中の父を起こしました。なかなか昔の夫人は強い人がいたようです。

上東野師の死後、夫人は新潟県の柏崎に帰り、寺の住職の後妻になりました。上東野師は病身であったためか、料理よりも、自分ではできない庭のお掃除を宜しくと夫人に言っていたそうです(後述の長谷川様から聞きました)。また、野菜は小松菜を食べることを指示していたそうです。小松菜は当時もっとも安価な野菜であったとのことです。

上東野師の生家は千葉街道と成田街道の丁度分岐点にありました(船橋市前原西)。上東野師は成田山詣でをする人を見ていたのでしょう。このためか、上東野師は成田山系統の僧侶名です。上東野師は福性寺から見て墨田川の向うの足立区江北(沼田)の恵命寺と巣鴨の真性寺の住職であった藤本饒誉師(大正六年四月一日死亡)の弟子です。このため、福性寺には藤本師の常用経典(お経本、写真)が遺品として、上東野師から父そして私に伝わっています。上東野師の赴任前は福性寺は無住(住職のいない)の寺でした。歴代住職のお墓を見

ても、明治時代にこの寺で亡くなった住職はいません。

記述が重複しますが真言宗豊山派宗務所から上東野照良師の僧籍簿が入手できました（平成二十七年三月十一日）ので、記述を追加します。上東野師は千八百九十二年（明治二十五年）五月五日に生れました。千葉県二宮町（現在、船橋市東部で前原を含む）が本籍地で、佐倉市の豊山派実蔵院内にあった私立明倫中学校に二年間在籍しました。明治四十年に八街市にある真言宗智山派成田山不動院（成田山新勝寺八街分院）に入寺しています。得度（明治四十三年）、灌頂（大正三年）など、成田山新勝寺をはじめ全て智山派の寺で行われています。大正五年二月に智山派から豊山派に転入し、恵命寺と真性寺の住職であった藤本饒誉師を師僧としています。福性寺の住職は大正六年四月十日に拝命しました。藤本師の死亡の九日後の拝命で、豊山派への転派から一年余り後に住職のいなかった福性寺の住職になりました。つまり四年余りを福性寺で過ごしたことになります。死亡後に僧階は律師から権少僧都となっています。

上東野師のお名前は、お檀家からは、子供の頃に故堀江定都様から一度、また成人してからは故長谷川志げ（げは変体仮名）様から二度だけ、直接、私は聞いたことがあります。もちろん父からは何度も聞きました。長谷川様は父のことを「文ちゃん」と父の子供時代の名前（文吉）で呼んでいました。長谷川様は福性寺の留守番役でした。また、上東野師の死後、福性寺の留守番をしていました。このため境内掃除もしていました。現在の福性寺の銀杏の木を手でゆすって葉を落として掃除をしていたと私に話していました。現在の大木が手でゆすることのできる細い木であったわけです。

往時の堀船

堀船は江戸時代には、堀ノ内村と船方村からなっていました。堀船郷土史によると、幕末寛延年間（千七百四十八年から五十年まで）では、堀ノ内村（郷戸と梶原）全体で戸数四十六戸、船方村は二十四戸であったらしいです。明治初年の梶原は二十二戸の農村でした。明治四年に王子製紙会社、八年に抄紙局（後の印刷局抄紙部）が設置され、工員が集まるようになりました。しかし、明

治十年頃は郷戸（堀船一丁目）二十五戸、梶原二十五戸、船方は十二戸でありました。明治二十年頃には工場で働く人のために、郷戸に貸長屋が作られ始めました。

さらに明治三十九年には、東洋紡績の前身である下野紡績が工場を建設して（現在の読売新聞東京工場）、梶原や船方にも繁栄が波及し貸長屋が建設されてきました。大正二年の王子電気軌道（株）による三ノ輪―飛鳥山下間の王電の三ノ輪線（現在の都電荒川線）の開通が、この土地の変化を一層推し進めることになりました。この頃から徐々に商店が開業し、次第に商店街を形作るようになりました（梶原銀座商店街）。大正十二年には東洋紡績には男女工は、あわせて二千三百人にまで達し、梶原の戸数も約四百戸に達しました。この頃には、おおむね従来からの住人も農業を廃していたらしいです。上東野師はこの人口急増の時代に福性寺にいたことになります。

関東大震災により堀船の大半の家屋は倒壊し、現在の梶原銀座商店街の商店は軒並み倒壊しました。震災後、鳥居敬誉師が福性寺の住職となりました。この後、東京の中心部から移住する人が多く、明治通りが昭和五年に完成し、昭和十五年から周誉師が福性寺の住職を務めました。昭和十七年頃の戸数は、郷戸八百二十戸、梶原千七百戸余り、船方二百二十戸余りでありました。

巣鴨真性寺

父が住職資格をとる前に、上東野師が亡くなりました（大正十年）。このために、巣鴨の真性寺の清水教誉猊下（上東野師の兄弟子）の弟子となり、以後二十年間近く福性寺に復帰はかないませんでした。この間、父は何ヵ所かの寺の住職になるようにご法類から依頼されました。しかし、福性寺の住職になることを待っていました。大正大学から遠い寺の住職になってしまっては、大正大学の聖語学（サンスクリット、パーリ語、チベット語などを研究）研究室に通えなくなるからです。つまり、恩師の荻原雲来教授（梵語学の世界的権威者）や久野芳隆教授（台北帝国大学教授、飛行機事故で死亡）の教えを受けるためでした。また、上東野師のお墓を守るためでした。

荻原先生と周誉師の関係を示す文章は、戦没者を祀る霧ヶ峰の世界霊廟中観山同願院昭和寺にも

あります。この寺は千九百七十年（昭和四十五年年）に行われた大阪万国博覧会のラオス館を移築したものです。戦没者の慰霊と世界平和を祈願する無宗派の寺院です。初代の住職は荻原先生の弟子である山崎良順師でした。山崎師はチベット語の仏典の研究者でした。

私が千九百九十一年（平成三年）七月にこの寺で行われていた国際学生ゼミナールの最後の会の講師を務めたおりに撮影した写真があります（写真）。この山崎良順師筆梵文般若心経には、周誉師が校訂し、荻原先生が指導したと書かれています。

父母は結婚後は巣鴨の長屋住まいでした。それでも、母は東京の寺の住職予定者（父は昭和七年に福性寺住職後任候補者、八年には住職に就任していましたが着任していませんでした）と結婚したので、出世したと周囲から言われたらしいです。昭和十五年三月の正式な福性寺への着任前は、父が巣鴨の真性寺の院代を務めていました。新婚旅行はお金がなく、すぐには行きませんでした。

荻原雲来教授

周誉師の恩師である荻原雲来教授について記録します。明治維新後の近代仏教学の黎明期には多数の僧侶が海を渡り、イギリスやドイツでこれらの国の言語を学習しながら梵語やパーリ語を習得し、仏教学の基礎を確立します。その代表が荻原教授です。

荻原教授（千八百六十九年、明治二年二月十日-千九百三十七年、昭和十二年十二月二十日）は、和歌山県に生まれました。浄土宗貞宗寺（鎌倉市）第十六世住職。千八百九十六年に浄土宗学本校（真言宗豊山・智山派、天台宗と合同して大正大学）を卒業し、千八百九十八年（明治三十一年）カイザーヴィルヘルム二世大学に留学し、梵語研究の泰斗エルンスト・ロイマン教授に師事します（七年間）。梵語、パーリ語の学修および仏教原典の研究を行いました。この七年間の留学に関しては、貞宗寺の檀信徒の絶大な支援がありました。ロイマン教授はヨーロッパの代表的東洋学者でありました。荻原教授は千九百四年（明治三十七年）にケンブリッジ大学図書館所蔵の貝葉本「瑜伽師地論菩薩地品」を校訂・研究し、学位（ストラスブール大学）を得ています。その公刊時、ロイマンが書評をとり、荻原教授の名声は一躍日本内外にと

どろきました。帰国後は宗教大学教授・東京大学講師・大正大学聖語学研究室主任・教授を歴任します。帰国後、漢訳対照梵和大辞典、実習梵語學、改訂梵文法華経ローマナイズ（第三刷）などを著し、それらは現在でも使用されています。日本の梵語研究、梵語仏典に基づいた仏教研究の大成者です。多くの研究者や学問上の弟子を育てました。もちろん周誉師もその一人です。現在でも、荻原教授は梵語学の泰斗として世界的に知られています。

久野芳隆教授

前述の久野芳隆教授に関して、知る人が少なくなりましたので、ここに記録しておくことにします。周誉師の恩師の一人であり、同門の先輩でもある久野教授は千八百九十八年（明治三十一年）十月十五日生れで、千九百四十四年（昭和十九年）一月五日に亡くなりました。搭乗の飛行機が台湾高雄市北西の山中に墜落したためです。公務殉職でした。真言宗豊山派の僧侶であり、真言宗龍光院（墨田区立川）の二十世住職でした。若くして亡くなりましたが、周誉師から聞いたところによると、度量が広く才能あふれる僧侶であったようです。外国語、特にフランス語が堪能でした。また、昭和十五年に周誉師が福性寺に復帰するにあたって、後押しして頂きました。

久野教授は豊山大学と東京帝国大学を卒業し（大正十五年三月）、同大学院に昭和三年三月まで在籍しました。その後、昭和四年から日仏会館におけるフランス語仏教語解説辞典「法宝義林」の編纂委員となり、昭和六年外務省文化事業部補助による荻原雲来教授（梵語学の大成者）編纂「漢訳対照梵和大辞典」の編纂刊行会の常務委員となっています。

昭和十年四月から十三年三月まで、豊山派教育財団より在外研究員として、インド、フランス、イギリスに留学しました。留学から帰国途中、華北を視察しています。

帰国後、すぐに大正大学の講師（昭和十三年四月から、パーリ語担当）となりました。その後、大正大学教授（昭和十六年三月から）と台北帝国大学南方文化研究所の嘱託（昭和十八年二月から）、同教授（昭和十八年六月から）も兼ねるようになりました。大正大学ではパーリ語と仏教学の講座

を担当していました。大正大学教授就任後、大日本仏教会代表使節として、仏印、タイ国に赴き、昭和十六年七月に帰国しています。

十八年七月から海軍省嘱託となり、海軍省南方政務部マッカサル研究所（インドネシア旧セレベス島、現スラウェシ島）勤務となりました。マッカサル研究所は南方占領地域内の海軍軍政地区の統治・開発に必要な基本的事項を調査研究することを目的とする機関として創設されました。研究所は昭和二十年五月に解散しました。

「弘法大師の宗教と生涯」、「南方民族と宗教文化」や「悉曇の解説」などの著書があります。

以上は、久野教授の履歴書と大澤広嗣様著の論文「戦前期フランス領インドシナにおける宗教工作―宇津木二秀と久野芳隆の現地調査」（学習院大学東洋文化研究所発行、東洋文化研究15:81-114 2013年3月）の記述によります。

周誉和尚が校訂し解読した敦煌から出土したウテン（于闐）語の経典集は、久野教授が大英博物館にあったものを写真撮影して日本に招来したものです。福性寺には久野教授が撮影したモノクロームのネガフィルムが残っています。学問上の師匠である久野教授からウテン語の経典を譲り受けたため、周誉師はこの経典を解読し校訂することでご恩返しをできたと考えていました。また、ウテン語の辞書を作っています。千九百五十年（昭和二十五年）頃から、千九百七十五年（昭和五十年）まで、周誉師はこの研究に没頭していました。この研究により周誉師は文学博士号を得ました。久野教授が台湾高雄市北西の万寿山中で飛行機事故により亡くならなければ、ご自身でこのウテン語の経典集を研究するつもりであったと思います。なお、台北から任地に向かう途上の出来事でした。

一方、南部仏印の調査旅行のお土産である仏頭が福性寺に伝わっています（写真）。私はこの優雅なお姿の仏様が大いに気に入っています。

奥様とお子様三人は東京大空襲で亡くなりました。久野教授の住職寺（龍光院）は、東京大空襲で最も被害のひどかった場所にあり、東京都慰霊堂の一キロメートルほど南です。龍光院内に歴代住職と久野家のお墓があります。ご家族の写真を久野教授の四女吉川佳子様から平成二十七年三月にお借りすることができました。掲載許可を頂きました（写真）。

周誉師は学問としての仏教学は、原典の研究をすることにより学ぶことができると考えていたと思います。このため、梵語、パーリ語、チベット語を研究する荻原雲来教授や久野芳隆教授を恩師として、心から尊敬をしていました。お二人は長いヨーロッパ留学経験があり、ドイツ語やフランス語も流暢に話すことができました。私にも留学することと語学の習得の重要性をよく話していました。特に、フランス帰りの久野教授は髪を蓄えられていたことから、私にも剃髪せずに髪を蓄え常に髪を清潔にするように話していました。多分、久野教授の人生を見習うようにとのことであったと思います。

清水教誉猊下

清水教誉猊下の生活は本当に質素であったらしいです。食事も一汁一菜が基本で、必ず父たちと一緒に同じ食事をしていました。飲酒することもなかったそうです。田舎出身の父が真性寺の食事のあまりの質素さに驚いたそうです。このため、時おり実父や叔父に浅草に連れ出してもらい、丼物をご馳走になることが楽しみだったと聞きました。

父は真性寺時代に高熱を出してから勉強が好きになったようです（鳥居敬誉猊下からお聞きしました）。大学ではサンスクリットを深く学ぶようになりました。当時からサンスクリットの書物（洋書）は非常に高価でした。しかし、父が購入希望の本を清水猊下にお願いすると、価格のいかんにかかわらず即座に代金を頂けたそうです。このため、父は旧制の大学院時代にも本代を考えることがなく勉強に打ち込めたと話していました。常に節約を心がけ、必要な時には十分にお金を使うことが清水猊下の哲学だったようです。

私が子供のころに周誉和尚に連れられて、三念寺様にお邪魔して、清水教誉猊下と三念寺の内陣のお写真を撮影したことがありました。撮影後写真をお贈りしたことがありました。

父の学問と留学の夢

実はサンスクリット（梵語学）の研究は日本ばかりでなく、イギリス、ドイツ、スェーデンなどヨーロッパ諸国で盛んです。また、現代でもインドでは公用語のひとつです。

父が福性寺に着任した頃は、大学や宗派による

奨学生として、父にヨーロッパ留学の順番が回って来ていました。しかし、先の大戦と戦後のどさくさのために、父は外国でエトランゼ生活をすることができませんでした。この点は、父は非常に残念に思っていたようです。

父は息子の私に留学の夢を託していました。父は私に留学を必ずするようにと言い残していました。しかし父の死後、すぐに私が住職になりましたので、私は留学を諦めていました。平成になりました頃、留学のお話が東京都老人医療センター病理部長の江崎行芳先生から私にありました。この時は父の遺志を知っている母は、強く私に留学を勧め、私の留学の間は自分が寺を守るからと言いました。実際この間、母、家内と矢田正幸師が寺を守りました（一九九四年）。

父の福性寺着任とその後の兵役

昭和十五年に父が福性寺に着任すると、お客間の玄関の戸にはガラスがなく風が吹き込み、また、家の庇（ひさし）は、板張りのひどく整備のされていない寺だったようです。本堂も関東大震災で全壊した後の仮本堂（お檀家の大郷組、大郷彌太郎様が単独で作り寄付しました）でした。お檀家の数も現在の約三分の一で、百十軒でした。結婚後も父は満州と北シへ「警備召集」（補充兵や予備役軍人を徴用して重要な場所の警備に当たらせていた）で出かけていました。この時代の軍歴はメモ帳に自筆の鉛筆書きで残っています。合計で三年十一月です。この時代（日中戦争から昭和二十一年）の母の自慢は、たった一人で娘二人を育てながら、寺を守ったことです。戦死者の増加で寺はいそがしく、しかし父は不在でした。このため、お檀家のご葬儀や法事のために、お経を読んで頂ける僧侶を探すことが大変だったらしいです。また、お布施による収入が母の手許や福性寺には残らないことから、経済的にもつらかったようです。

母と父の恩師の久野芳隆師夫人とで父への慰問袋を作ったこともあるようです。軍隊用の下着（越中褌、いわゆるサムライパンツ）を作って送ったこともあるそうです。結婚したばかりで様子がわからず幅を半分に作って送ったことがあるそうです。久野夫人もよくわからなかったようです。多分父は困ったと思います。

米軍の空襲時には、ご本尊様（写真）を防空壕

の最も深いところに大切に安置して、母や姉二人は防空壕の入り口側にいたそうです。このように江戸時代の初めに建立されたご大日如来様（福性寺ご本尊様）を守ったことも母の自慢でした。福性寺の防空壕は母が女手一人で作った粗末なものだったらしいです。また、米軍の焼夷弾が多数境内に落ちました。しかし、二百五十キロ爆弾も落ちましたが不発弾でした。

大正時代から昭和二十年にかけての福性寺の過去帳は、寺で最も重要な書類と言うことで、父の留守のためにご本寺の真性寺様がお持ちでした。このため、四月十三日の空襲による真性寺様の火災のために焼失しました。この時代の福性寺の過去帳は、父と母が墓地をめぐり、お戒名と俗名を集めた不完全な過去帳です。しかし、最古の過去帳は明暦年間の仏様を記録しています（写真）。

父の出版した著書は母の実家である三郷市の延命院にリアカーで母が運び疎開させました。一冊一冊を油紙で丁寧に包み運んだそうです。これらの著書を守ったことも母の自慢でした。

東京大空襲の責任者であり日本の焦土化をめざした米軍のカーチスルメイ将軍はベトナム戦争でも北爆や枯葉剤の使用を推進したことで知られています。多くの民間人を計画的に殺戮することを目的にしたことに加えて、貴重な文化財（米国の建国前からあった寺社・仏閣・城郭など）を灰燼に帰した点から、私たち日本人は忘れてはいけない名前であると思います。

終戦

戦前から戦後の混乱期まで、ご法類、特に寿徳寺（北区滝野川）の宮木宥弐師がよく寺に来て母を励ましたそうです。このためか、福性寺には宮木師が作った漆塗りの三方（お供え物を載せる台）があります（写真）。弘法大師のご遠忌のため、福性寺様大正二年、八百八十個のうちの壱番、昭和九年弘法大師千百年御遠忌供養修業と書かれています。寺の宝物の一つとなっています。寿徳寺様のお檀家からお聞きしたところでは、昔の寿徳寺の本堂の周りなど、漆の木を多数植えて時にはお檀家がかぶれてしまい困ったことがあるとのことです。宮木師は明治維新前後からの膨大な教科書を集め「宮木文庫」として東京高等師範学校などに寄付しています。教科書の収集は日本国内のも

のばかりでなくて、日本統治の朝鮮半島、中国や大戦中の占領地のものまであります。明治維新以来の教科書は総数では二万冊に及んでいます。このため偉大な社会貢献をした僧侶として高く評価されています。宮木師の素晴らしい業績により前述の三方は福性寺の寺宝となっています。

戦後、父は満州からシベリアに抑留されたとのうわさがあったようです。原隊から満州に出張したため、このような噂があったようです。しかし、終戦後昭和二十一年四月に父は復員しました。青島から米軍の上陸用舟艇で佐世保港にあがり、鉄道（当時は省線）で王子駅に帰ってきたとのことです。列車の中では、「兵隊さんご苦労様」と何度も言われて、負け戦ですから恥ずかしかったらしいです。空襲により民家が消失し、王子駅のホームから福性寺の旧本堂を直接見ることができて、本当に父はうれしかったようです。敗戦後、帰国し帰宅するまで寺や家族の消息を一切知らなかったからです。復員当日、寺に着いて一服したのち、早々に境内を見回ろうとすると、紀子姉が「おじさん帰るの」と父に尋ねたそうです。

父は敗戦後の日本社会になじめないところがあったと思います。特にＧＨＱ（連合国軍最高司令官総司令部）や米軍による敗戦前の大日本帝国の欠点ばかりを強調するプロパガンダや検閲された新聞報道に対して、誇張や嘘が多いとよく話していました。たびたび、過去の日本国と日本人について、長所も欠点も私に話していました。占領下のＧＨＱの検閲や、押し曲げられた新聞報道など、我々日本人が知るべきことは未だに多いと思います。

戦後の混乱期の事業、「堀船郷土史」

私が聞いた父や母の子供の時代の話を思い出すと、文庫本にある渡辺京二氏の「逝きし世の面影」や文藝春秋誌に連載となっていた磯田道史氏の「新代表的日本人」の中に出てくる日本人と同じ誠実な人々が、当時の日本にはたくさんいたことがわかります。

牧田平次郎様の次女、安川睦子様によると、父の帰国後は、寺で緑陰子供会、幻燈会、青年会、書道教室が開かれ母は大変いそがしかったようです。母の百人一首のカルタ会もあったようです。

昭和二十三年頃から、青年会の皆さんと一緒に、

梶原や堀船の歴史などの調査が行われました。これは堀船の町に住む多くの有力者の方の依頼により郷土史を作るためでした。特に牧田平次郎様や望月武様を中心として「堀船郷土史発行協賛会」が作られ、父が執筆を依頼されました。父の手により「堀船郷土史」（昭和二十七年六月）が発刊となりました（写真）。この本は今に至るも、日刊紙などに採り上げられ、堀船の歴史を知るための基礎的な資料となっています。それは、地区のお年寄りからの聞き書きがあるからです。

今回、平成二十四年九月に復刻版を出し無料でお檀家、町会に配布しました（写真）。まだ残部がありますので、ご希望の皆様に差し上げます。

父の著作と私の子供時代の父母

私の子供の頃の母の記憶は、同級生のお母さんより背の高いお母さんで、父の意見をなんでも受け入れる人でした。戦前、戦中より、父は梵語学の研究にいそしみ、その研究成果を著書の形で世に出していました。このため、本の出版のために、お金が必要でした。父の出版費に関しては、母はいつも率先して十分なお金を出していました。最初の出版物（批判悉曇学二巻）の和綴じの背表紙の一部は戦時中で物不足のため、母の金紗の羽織を使って作りました。最初の出版（昭和十九年一月）は、物資不足は深刻で出版は中止となりそうでしたが、お檀家の株式会社写真植字研究所（現、写研）の石井茂吉社長の斡旋により出版されました。出版費の不足を補うために母は堀船とは別の町の質屋にも何度か出かけたようです。この後も、父は著作を重ね、生涯で八冊の本を書いています。出版には真言宗豊山派の援助も受けています。

私の医学、病理学分野の著書の出版においても、同様に率先して母はお金を用意してくれました。現在でも、父の著書は売れ続けています。代金は母や私のお小遣いになっています。

父によると、この頃（昭和二十七年頃）、福性寺からもう少し裕福な寺に移るようにご本寺の鳥居敬誉猊下からお話がありました。しかし、父も母も福性寺を守ることが上東野照良師との約束であると考え福性寺に残ったそうです。

戦後は毎年福性寺旅行会による年二回の団体参拝などが行われ、いわば寺が旅行社の代わりを務めていました。多い時には約百人の団体旅行が行

われていました（写真）。

勤務評定事件と堀船小学校、堀船中学校

私が北区立堀船小学校時代には、いわゆる勤務評定事件（昭和三十四年頃）がありました。二人校長事件や勤務評定反対闘争としても知られています。この時、母はＰＴＡの会長をしていました。この事件が子供の教育に影響のないようにと努力しました。母を含めて保守的な土地柄のＰＴＡや町会の有志は、部下の教員の勤務評定の不提出であった校長ではなくて、後任の滝山俊夫校長を支持していたと思います。母の主張や立場が日刊紙でも報道され、私の知っている事実と大きく異なることが新聞記事になりました。このため、私は子供の頃からあまり新聞や活字を信用しなくなりました。母も日本の新聞は現在に至るまで党派性、政治性が強すぎて中立性に欠ける、真実を伝えないと考えていました。現在、インターネットで調べると、前任の校長は「昭和時代後期の労働運動家」と総括されています。当時、母の友人（当時のＰＴＡの書記を務めていました）から、この事件を総括する小冊子が出版されています（写真）。

私が堀船中学校に入学すると、母はすぐにＰＴＡの会長になりました。母はすぐに山下豊校長先生、伊藤充教頭先生と昵懇の間柄となりました。私の父母と小学校の滝山校長、山下校長やたくさんの先生方との宴席の写真が私の手許には何枚も残されています。福性寺の客間でも宴席が開かれていました。

母はこの時代のＰＴＡの会員の皆様とは、終生のお友達となり、ＰＴＡのＯＢ会として「堀船中学校卒業生父母の会」や「三十有志会（みとおしかい）」、「白バラ会」（写真）の名前で懇親会があり交際がありました（写真）。しかし、現在、ほぼ全ての会員の皆様をあちらの世界に見送ったと話していました。また昭和四十九年に始まった堀船三丁目の婦人会である「五十寿麦の会」の会長も長く務め（三十五年間）、会員は多い時には、百名近くの皆様と、慈善バザー、お昼ごはん会、日帰りや一泊旅行を楽しみました。この会では、必ず目やお身体の不自由な方々への募金が行われていて、素晴らしい会であったと思います（写真）。残念なことに平成二十年六月二十八日に会員が高齢になったことから解散しました。解散の会は、鬼

子母神の割烹大倉で行いました。
母と一緒にそれぞれの会に参加頂いた皆様に心からお礼を申し上げます。

父の文学博士と大僧正、父の学問

父が文学博士号を頂いた時（昭和四十七年三月十五日）には、母を通じて知り合った地域の皆様がお祝いの会を開いてくれました（昭和四十七年四月八日）。北区会議員の和田武志先生、藤田辰之助先生や多くの地域の皆様、小学校、中学校の先生も出席されました（王子みやち寿司）。

実は父は文学博士や大僧正（昭和五十三年五月）になる希望のない人でした。書斎で、梵語、チベット語、漢文、英語、フランス語、ドイツ語で書かれた仏典を読んでいれば楽しい人でした。しかし、研究に関しては渾身の努力をしていました。毎日、朝十時頃から昼食時間を除いて夕食まで書斎でこもりきりでした。私は父に訊いたことがあります。なぜ一生懸命本を読んだり勉強することができるかと。その返事は「それは面白いよ。現代では誰も読んだことのない仏典や文章を読むことができるのだから」、「何しろお大師様や慈雲尊者のお考えに触れることができるしね」でした。これはシルクロードのオアシス国家であるウテン（于闐、ホータン）国の言葉の仏典を解読していたためと思います。また、古い仏典を読むために東洋文庫や湯島の霊雲寺様に出かけていました。霊雲寺を建立した浄厳和尚を非常に尊敬し、私に浄厳和尚の名利にとらわれない素晴らしい生き方を話していました。霊雲寺様では歓迎され昼食をご馳走になって帰宅していました。また、同じ分野の研究者であるご法類の新井慧誉師は父の書斎を定期的に訪れ、母の手作り料理とお酒で楽しそうに父と議論していました。

母は父の勉強時間にお檀家の皆様に対応し家事をこなしていました。私は住職を継ぐまで、寺の住職の役割が、お葬式などでお経を読んでいることより、自由に学問や読書などをする少し変な人であると本当に思っていました。しかし、父とは異なり、母と私はもう少し積極的で功利的で、勉強や研究を形にしたらとか、ご推薦頂ける方がおいでになるのですから、大僧正を頂いたらと父にすすめました。今から思いますと、父にとっては余計でおせっかいなことをしてしまったと思うと

母から聞いたことがあります。なぜなら、学位を頂くことなど時間の浪費であると、母は父からだいぶ苦情を言われていました。母は自分の夫である私の父を、いわば文学博士にして、大僧正にして、宗派の最高位の学問の位である勧学（昭和五十年四月）にしたことになります。文学博士号を頂くときには、専門家のいないウテン語の解読であることから、学位の審査をすることができる学者がいませんでした。

父の死

父の死は突然でした。昭和五十四年十月五日の午後九時半に私は埼玉県立がんセンター研究所から帰宅しました。父はすでに布団の中でした。私が帰宅を告げると、私を慰労してくれました。その夜中に母に呼ばれて父を診察すると、すでに心肺停止でした。人工呼吸などをしましたが蘇生しませんでした。北医院の北吉郎先生に死亡診断書を書いてもらいました。元来、父は高血圧でいつも不眠と耳鳴りに悩まされていました。血圧は服薬して最高血圧が百四十、最低血圧は九十でした。しかし、何度もこの範囲を超えて心不全となりました。

本葬の導師は父の親友の築山定誉猊下にお願いしました。これは母の希望でした。この件を築山猊下にお願いにあがる時には、青梅市まで現在の鳥居慎誉猊下が自ら車を運転して私を連れて行って下さいました。

文学博士田久保周誉大僧正業績集

父の死後、一周忌に田久保周誉大僧正業績集（写真）を作り内外の仏教学者に贈呈しました。故江里口治彦様（京都造形芸術大学講師、交通事故で亡くなりました）、島野和明師、星俊光師に過去の父の文献（論文）を収集してもらいました。この本の中に父の梵語学者としての業績を集大成しました。普段、入手が困難な論文も全て載せました。非売品で配布しました。配布後、高野山大学、種智院大学、大正大学の教授や大学院生から非常にたくさんの本の入手の希望が来ました。無料で配布したのですが、現在、インターネットの古書コーナーで四千円から二万円近くの値が付けられて販売されています。このことから、社会で必要とされている本を作ったことに安心しています。

序文は父の親友の林良海台下にお願いしました。なお、福性寺本堂のスピーカーなどのオーディオの最初の設備は江利口治彦様や星俊光師が作りました。

献茶係

父の死後は、母はお檀家関係や寺所有の土地などの雑務を一手に引き受けていました。さらに、税務も引き受けていました。相当な仕事量であったと思います。それでも、毎朝早く父の墓前で高橋〆子様と「朝暮勤行法則」を読んでいました。三十年近く続けました。これは雨天の日でも同様でした。晩年になると本堂で、私とお経を読むようになりました。さらに、本堂にあがることができなくなると、私の本堂での毎朝の読経が終わるのを待って、庫裏（住職の住まい）の仏間のお仏壇の前で、「朝暮勤行法則」に従って、私と一緒に読経をしました。般若心経二回、光明真言七回を読むことを習慣としていました。非常によくお経を暗唱していました。読経後、母がボーッとしていることがよくありました。この時、母の亡き父母や私の父のことを思い出していると話していました。

父の死後、母は宗派から「光雅尼」と言う僧侶名を頂きました。このため、寺の中で私の僧侶としての仕事も分担していました。特に、ほとんどのお塔婆を書いていました（写真）。また、母は右腕を骨折するまで、父に代わってご本尊様、両大師様、お檀家のご先祖様二か所、お仏壇の合計六か所への献茶係を三十年以上つとめました。

盆栽

父の死後、何回も中学校を引退された山下校長先生が父の盆栽の手入れに来て下さいました。その植木（サツキ）も今は多くは地面に直植えとなっています。現在は松の盆栽が三鉢残っています。私は盆栽の趣味がありません。しかし、母が盆栽を大切にしていました。

母の旅行

父の死後、私は母に国内や海外の旅行に行くように何度も勧めました。悲しい気持ちを和らげるためです。それでも、仲のよいお年寄り夫婦などを見るたびに、羨ましさと悲しさで涙が出ると何

度も聞きました。国内旅行では、母はお檀家の福田寅雄様、きよ子様ご夫妻と四国遍路など国内の多くの霊場巡りを終わっています。お二人に大変お世話になりました。

父は飛行機に乗りませんでした。父の死後（昭和五十四年十月六日）、私の強い勧めもあって、母は初めて外国旅行を楽しむようになりました。ヨーロッパ、北米、台湾などの名所にはかなり出かけたと思います。福田きよ子さん、問矢しげ子さんなどお檀家や町会の皆様とも出かけました（写真）。また、海外旅行で知り合ったお友達も多く、そのお友達が高齢者向けの施設に入ったと聞き、上野や岩槻に一緒に訪ねたこともあります。

私とも中国に二回、韓国に一回行きました（写真）。中国と韓国ではお檀家の皆様と一緒にお寺巡りをしました。中国団体参拝旅行（平成十二年五月十二日）では、隣寺の故小松原俊誉師、故新井豊誉師も同行しました。玄奘三蔵法師のお骨のある西安市郊外の興教寺で中国人の法要に混ざり、興教寺の巨大な涅槃仏の前で私たちは般若心経を読みました。この涅槃仏は団参の一年前に私がこの寺を訪れた時に、住職の常明師に福性寺のお檀家からの寄付を届け（約四十万円）、建立費用の一部を寄付していました。常明師から歓迎されお菓子とお茶がふるまわれました。お菓子は硬くて食べられませんでした。

韓国（慶州）にも団参（平成十四年五月十日）しました。すでに歩くことがややご不自由であった石井与五郎総代様も同行し、ややお身体がご不自由であったために、当時福性寺におりました宮本宥慶師ご夫妻も石井與五郎総代様のサポートのために同行し、楽しい参拝旅行となりました。この当時すでに母は歩いて皆さんについて歩くことがやや難しかったようですが、何とか頑張っていました。

また、母と私と二人だけの中国旅行では、山東省などを歩きました（平成二年十月）。私の友人の王全紅先生（山西省腫瘤医院病理科）も一緒でした。青島、済南、開封、鄭州を回りました。これは母のセンチメンタルジャーニーで、父がかって大東亜戦争中にいた場所です。師団司令部（現在は大学）など出かけました。済南市や開封城は湖や池が多く、父から野生の鴨を兵隊が捕まえて、食べたとの話を思い出しました。済南市では千仏山

の頂上にロープウェーで昇り古刹興国寺で丁度釈尊誕生会(花祭り)に出あいました。多くの中国人と同様に、母はお経をよみながら行道していました(写真)。行道は中国でも右回りでした。黄河を見るための展望台(鄭州の近くの遊覧区、小さな山です)に登りましたが、母のお尻を押さなくては登れませんでした。最古の長城である殷(商)の時代の長城も見ました。青島は屋根瓦がドイツ風の茶色の屋根が多くここでは、湛山寺(千九百三十年代に建てられた新しい寺)にお参りしました。

寺の参道では障害のある子供を抱える母親が何人も施しを待っていました。王先生は施しを与えることをとても嫌がりました。しかし、母が私に小銭を施すように言いつけ、王先生と議論となりとても困りました。鄭州では少林寺や、弘法大師様も訪れたことのある大相国寺(千手千眼観音様があります)に参拝しました。臨淄市では殉馬坑などを観光し、私は昼食時不用意に飲んだこの地方の生ビールにあたり苦しい旅行となりました。

私と私の友人

私は子供時代から僧侶になることを前提として、併せて医師の資格を得たいと小学生の頃から考えていました。両親も賛成でした。しかし、都立北園高校時代は私の成績はあまりよくありませんでしたので、母は心配していました。母は担任に呼び出されたこともあります。担任も母も、有難いことに私が医学部に入れないのではと心配したのです。大学時代も同様で心配をかけました。高校生時代や大学生時代には、私を含めて六人の親友グループが来寺して、母は何度も手作り料理などでもてなしてくれました。有難かったです。父はもちろん寺の後継者になるため東京に出てきました。しかし「医師を兼ねると面白いかなと思ったことがある」と私に話していたことがあります。

両親に勧められてソビエト連邦へ

私が大学に入った時(昭和四十三年)に新左翼の人達が指導する長い学生ストライキがありました。授業がないのです。この時、父母に勧められて共産主義の本場?であるソビエト連邦(千九百九十一年十二月までありました。現在のロシアなど)を主に鉄道(シベリア鉄道)で二度旅行しました。ナホトカ、ハバロフスク、イルクーツク、バ

イカル湖、ブラーツク、モスクワ、東ヨーロッパ諸国（ハンガリー、チェコスロバキア、ブルガリアなど）、ウイーンなどを訪問しました。

まず、これらの都市や国では、あらゆる場所の設備が貧弱で古く、当時の日本よりも、ひどく貧しいことに驚きました。さらに、同じツアーグループの小学校の先生たちが、この貧しさ、ロシア型貧困を批判的に視ないことに、驚きました。一ルーブルが四百円の時代です。バスやホテルが古く、古いことは構わないのですが、掃除が行きとどかないままで、不潔なことはひどいものでした。水道水は濁って茶色でした。お尻を拭く紙は薄い画用紙の硬さでした。共産主義の悪弊がどこにも見られました。ホテルの従業員はいつも座ったままで、サービス精神は皆無でした。

バイカル湖のほとりでは、我々観光客に近づく物乞いの老婆を暴力で排除する警察官（当時は民警と呼んでいました）すらいました。貧富の差も甚だしいことがわかりました。帰国後、両親はこの話を聞き、旅行の効用?、一目瞭然を改めて知ったようです。あの時代のソビエト連邦、人権無視の国家を母国として夢見ていた日本人がいたことが、今でも不思議です。この経験から学生時代には、私はとても新左翼や共産主義の思想を受け入れることはできませんでした。

あの時代は、情報は企業（新聞やテレビ）が独占していました。しかし、現代ではインターネットのお陰で、独占が崩れてよい時代になったと思います。ネット上のニュースの真贋を判断し、ニュースを選択することは難しいと思います。しかし、独占をよいことに恣意的な報道や嘘の報道が新聞やテレビに少なくなってきたと思います。

外科学、病理学、老化学

私は大学卒業後（昭和五十年）、代田明郎教授の主宰される腹部外科の教室に入局しました。しかし、その後、基礎医学である病理学に興味が移り転向しました。この転向に関しては、母は反対でした。また、埼玉県立がんセンター研究所から東京都老人総合研究所への異動にも反対でした。しかし、母が老齢となり研究所の姉妹施設である東京都老人医療センター（現在の東京都健康長寿医療センター）に外来通院したり入院するようになると、老人への配慮が行きとどき親切でよい施設

に私が異動したと喜んでいました。私は当初外科学を学び、次に病理学を専攻し今は老化学を専門としています。

読書、時代劇、懐メロ

母は読書好きで、父の死後睡眠前に読書とラジオで懐メロを聴いていました。お檀家の皆様にも本をお貸ししたりしていました。死後部屋からたくさんの小説などが出てきました。汚れのない本は平成二十四年の盂蘭盆会や彼岸会にお檀家にお持ち帰り頂きました。

母は以前からテレビの時代劇のファンでした。特に大川橋蔵、杉良太郎、松平健の大ファンでした。目が悪くなり読書がつらくなり、高齢となり歩くことがつらくなると、居間で「時代劇専門チャンネル」を視ることが多くなりました。勧めても散歩はあまりしませんでした。朝から鬼平犯科帳などを楽しみに視ていました。耳が少し遠くなり、音声ボリュームを大きくして聴いていました。お檀家の皆様がおいでになった時に、お聴きになった大きなテレビの音はこのためです。私も時代劇を一緒に視ていましたので、私も鬼平犯科帳は大好きです。歌謡曲は戦前の歌が好きでした。また、晩年はテレビで相撲とマラソンは必ず観戦していました。相撲は魁皇関の大ファンでした。

デイケア

亡くなる前にデイケアに行くようになりました。あまり出かけたくなかったようですが、母は家族の負担の軽減を考えて、出かけていました。あちらでは、物知りであったためか、なかなか人気があったようです。デイケアで知り合った新たなお友達から年賀状が来たりしていました。寺の駐車場までデイケアのお迎えの車が来て、母は車椅子で出かけていました。本当にデイケアの皆様にはお世話になりました。

母と子供、晩年の旅行

父が亡くなり私の子供が大きくなってから、子供の躾も兼ねて、毎月一、二回家族そろって外食しました。子供が小さい時には、母の苦手な焼き肉屋さんにも付き合ってくれました。晩年も時々外食に連れ出しました。なんでも好き嫌いなく、よく食べる母でした。もともとお寿司が好物で晩年

には私の研究所の近くの大栄寿司さんに行くことを待っていました。しかし、最晩年の右腕骨折後はお寿司を食べに行くと、時にはお箸が使えず左手で食べていました。

晩年は一人で旅行ができなくなり、姉夫婦達や、こだま観光社の松崎様（私の同級生です）に旅行に連れて行ってもらっていました。千穂子姉と浅草演芸場にも、よく出かけていました。

さらに晩年には、毎年一、二回奥日光に私と家内が連れて歩きました(写真)。旅行中は同道した姉が母の面倒をみていました。毎回の旅行で決まって行く所は、湯滝、竜頭の滝、湯ノ湖、中禅寺湖などで、湯ノ湖の湖畔などでベンチに座り時間を過ごしました。雪の菅沼にも時に行きました。平成二十二年にはコネクティングルームが必要でした。家内と母をお風呂に入れましたが、ホテルのお風呂はなかなか狭くて大変でした。それでも、母は朝起きてホテルにいることをよく認識していました。高速道路のお手洗いは家内が母の手を引いて使用していました。しかし、亡くなった年(平成二十三年）は連れていくことができませんでした。

東日本大震災と被害、修理

二千十一年（平成二十三年）三月十一日、金曜日の東日本大震災では、本堂、客殿の建物自体は全く被害がありませんでした。本堂では、ご本尊様の左側のお位牌堂の位牌が倒れました。お檀家からお預かりしているお位牌です。客間は全く無事でした。庫裡ではモルタルの外壁にひびが入りました。また、食器棚からお皿が床に落ちかけていました。

山門右脇の寺号を書いた細長い石が倒れました(写真)。このため、山門右の塀の青色の瓦が二枚割れ、寺内に保存してある瓦と交換しました。

本堂玄関の右脇にあった花崗岩製の十三重の塔(写真）が台石からずれてしまいましたが、倒壊はしませんでした。塔は本堂玄関の屋根の高さまでありました。今後のお檀家の安全を考えて、廃棄しました。福性寺遍路会の皆様のご寄付による十三重の塔でした。安全を考え再建しなかったことを、どうかお許し下さい。

お墓では、各墓地の中央にあるような大きなお墓は全て無事でした。昔建立された台座から動いてしまう小さなお墓十基、墓碑（誌）は二基、墓

地内の灯篭五基が倒れました。五基の灯篭のうち、三基は住職の意向を採りいれて廃棄して頂きました。二基はお檀家が再建しました。

墓地に被害のあったお檀家には、二日以内にお手紙を差し上げ、寺で一括して修理する旨をお話しし、請求書をお送りする手はずを整えました。

大地震の時には、最初に福性寺の被害を修理するように茨城県の石材店とすでに書面で契約していました。このため地震から七日以内に全ての修理を終わらせ、請求書をお送りしました。茨城県でも、もちろん多くのお墓が倒壊しましたが、契約に従って、石材店（三和キャストン）は優先して福性寺の被害に対応してくれました。総額は三十万円程度で、お檀家一軒当たり、最高額で三万円を超えない金額で終了しました。

この大震災の時は、母は帝京大学病院に入院中でした。

父の三十三回忌

父の三十三回忌法要とその後の清宴を兼ねたお檀家との懇親会（椿山荘、平成二十三年十月二十二日）を本当に母は楽しみに待っていました。しかし、十月九日に亡くなりましたので、参加できませんでした。先代住職の三十三回忌法要は寺の公式行事であることから、法要と懇親会は迷わずそのまま行いました。母から清宴は、フランス料理で行い必ずお料理を吟味すること、また、ご寺院方とお檀家の皆様が楽しめるようにすることを言われていました。このため、芹洋子さんのディナーショウ形式の清宴も計画のまま行いました（写真）。

母に三十三回忌法要と清宴を見てもらおうと一生懸命行いました。しかし、母の死亡により私としては今回の法要は大いに残念でした。

母の病気と死因

母は生来健康な人でした。九十二歳まで病気で長く寝込んだことは、娘時代の虫垂炎と併発した腹膜炎と、子宮筋腫の切除（昭和四十二年頃）の時以外はありません。しかし、平成二十二年の春に右腕を骨折して入院し、夏には軽い黄疸がでました。

母の病気は以下です。

1．右上腕骨折、平成二十二年一月に骨折しま

した。偽関節化して治癒しませんでした。母の最晩年のＱＯＬ（生活の質）のレベルを下げました。

この後、転倒して骨盤骨折をおこし救急車で入院したこともあります。救急病院では、胆道癌、高血圧、糖尿病の合併で面倒がみきれないと言われました。二泊したのち帝京病院で治療に専念しました。この後、リハビリのために東京都老人医療センターに入院し、何とか手を引くことで歩けるようになり、自宅に戻りました。

２．胆道癌、平成二十二年八月に黄疸で見つかりました。発見時２㎝の大きさでした。帝京大学病院でステント療法（癌で狭くなっている総胆管に管を挿入）を六回行いました。癌のために総胆管が閉塞すると、高熱とショックをおこし、救急車でも入院したことがあります。胆道にステント（チューブ）を入れ、胆汁が流れるようになるとすぐに元気になり、何度も退院したいと繰り返し、七から十日程度で帰宅することができました。この繰り返しでした。本当に救急隊員の皆様にはお世話になり親切にして頂きました。また、帝京大学病院外科の佐野教授、豊田先生など多くの先生のお陰で長生きできました。

３．高血圧、父の死後七十歳代からです。東京都健康長寿医療センター内科（山の内副院長、桑島副院長）の外来治療により、薬でよくコントロールされていました。

４．糖尿病、胆道癌と同じ頃見つかりました。骨折などで運動量が下がったことから発症しました。食事量を減らしました。経口糖尿病薬でコントロールして、入院中はインスリンを用いました。なかなか血糖は下がりませんでした。限られた命なので、食べたいものを食べさせた方がよいとの意見もありましたが、私はこの意見を採用しませんでした。

５．大動脈瘤、非常に大きな胸部大動脈瘤があり麻酔科医が麻酔をすることを断る原因となりました。胆道癌と右上腕骨折の手術治療ができない原因となりました。

６．緑内障、朝と晩に別々の点眼薬を使用していました。緑内障のために読書ができなくなり、老後の楽しみを失いました。

７．物忘れは年齢相応で、長谷川式の検査では認知症はありませんでした。曾孫の光と麗子の二人をよく認識して、よくハイタッチをしていました。

平成二十三年十月九日（日曜日）に胆道癌の多発性肝転移と死因となった脳梗塞により帝京大学病院で亡くなりました。私と家内の曜子と長男圭誉の三人が最後をみとり、寺に連れて帰りました。

母の葬儀

晩年には、母からは諸事（病気の治療、死後のこと）全て私に任せると何度も聞きました。このため、全て私の考えた通りの葬儀を行いました。

医療者、町会向けの母の通夜と葬儀（十月十三日）では、福性寺から大正大学に通学したり、私の仕事を手伝って頂いた、また母とゆかりのある石井秀誉師、星俊光師、矢田正幸師、榎本博司師、宮本宥慶師、林賢乗師に読経をお願いしました。私を通じて母が知り合った多くの外国人学者のうち、ドイツバイロイトのMichael Vieth博士が来日中で焼香しました。母の火葬の当日、医学分野の研究会でVieth博士の司会を予定通りしました。ご高齢にもかかわらず、長年の母の友人に多数ご参列いただきました。本当に有難うございました。

お檀家の皆様向けの葬儀（四十九日忌を兼ねて、十一月二十六日）では、ご本山長谷寺の住職でもあったご本寺様の鳥居慎誉猊下にお導師様をお願いしました。また、施餓鬼会においで頂いているご住職様方に式衆をお願いしました。総代様の堀江恒太郎、石井與一、大郷道敏、堀江裕子様をはじめお檀家の皆様や町会の方々には本当に何度もお通夜、葬儀にご列席頂き有難かったです（写真）。

本堂は道場でありお葬儀場ではありません。しかし、二度の葬儀では畏れ多いことですがご本堂を使用させて頂きました。ご本尊様にできるだけ失礼にならない様に、またご本尊様の視線を遮らない様に、祭壇を極力低く作りました。遺影やお骨も正面に安置することを避けました。お内陣の仏具も移動を最小限にしました。花祭壇を作ったお花屋さんから祭壇を極力低くという希望は聞いたことがないと言われました。

また、お通夜と二回の葬儀では六百名を超す皆様からお焼香とお香典を頂きました。町会とお檀家の皆様に心から感謝しております。できるだけお香典返しをしっかりしました。

受け付けなどは、たくさんの堀船三丁目町会の皆様と私の研究所の皆様にお世話になりました。誠に有難うございました。葬儀社は稲葉葬儀社に

お願いしました。

母のお戒名

母のお戒名は鳥居慎誉管長猊下の特別のお許しを得て私が考えました。祖母つねの戒名から一字「蓮」をもらい想蓮院としました。記憶にない母親の姿を想うの意味です。梵音は声明（の曲名）にありますが、ここでは簡単に、読経の声に身近に接していたの意味です。梵韻と考えましたが、同様な意味で容易な字を選びました。光雅はすでに宗派から頂いていました。「想蓮院梵音光雅大姉」です。

母の墓所と納骨式

母のお墓は住職墓所の隣になりました（写真）。少し変わった形ですが、小杉石材店の提案通りの形のお墓に作りました。もっともっと小さく作りたかったのですが、石材店の勧めに従いました。お墓が大き過ぎて、母は恥ずかしがっていると思います。正面の字は家内の曜子が書きました。

平成二十四年五月二十日十二時に納骨式をしました。母の兄弟（浅水稔様）、私の兄弟従弟、子供、孫など二十人が集まりました。その後、庫裏（住職の住まい）で簡素な清宴を行いました。今は母の長男であったことを誇りに思っています。

お檀家のお位牌

お位牌の起源は明らかではありませんが、約二千年前に中国でできたようです。霊の依代という古来の習俗と仏教的な教えが習合してできたようです。平安時代末期から卒塔婆が使用されてきますが、お位牌とお塔婆、卒塔婆は密接な関係があるようです。お位牌は日本では、鎌倉時代頃から始まりました。江戸時代には普通の習慣となっていました。四十九日忌までは白木のお位牌を用います。これを内位牌と呼ぶ人もいます。それ以降は、漆塗りや唐木のお位牌を用います。これを本位牌と呼ぶ人もいます。真言宗のお檀家のお位牌にはお戒名の上に古代インドの文字（梵語、悉曇文字）で「 」ア字を書きます。大日如来を表します。また、お子様のお戒名の上には古代インドの文字で「 」カ字を書きます。これはお地蔵様を表します。

福性寺では一周忌までお檀家の仏様のお戒名の

書かれた白木のお位牌を保存し、ご本尊様の左側の位牌堂（シンセサイザーのある部屋）に安置します。毎朝、献茶の後に住職の読むお経を聴いて頂いています。また、住職が故人を思い出す手掛かりとなっています。一周忌を過ぎるとお焚き上げします。つまり、読経後に燃やします。

宗教法人福性寺の総代世話人会と法人会計報告

宗教法人福性寺の会計年度は、一月から十二月までです。このため、決算書を総代世話人様にご承認頂くための福性寺の総代世話人会は二月に開かれます（写真）。ご出席は通常、総代様四人と寺からは代表役員（住職）、責任役員（副住職など）などで、合計七人から十人です。この会では、前年度の法人の決算書案が配布されます。また、次年度の予算は毎回、ほぼ前年度並みで、詳しいご説明は省略しています。この会で代表役員(住職)による法人へのお檀家からのお布施などの収入と支出の説明があります。最近では葬儀のお布施の一覧表もお示ししています。もちろん、お檀家名やお施主様は匿名です。説明の後、ご質問を頂きご承認頂いております。

会社などの営利法人と異なり、宗教法人自体はお布施などの宗教的収入は無税です。代表役員(住職）や職員の給与は、宗教法人の収入の中から頂きます。職員の給与は、もちろん国税である所得税を支払った後に、給与として頂きます。これらの法的根拠は、昭和二十六年に公布された宗教法人法によります。いろいろな事件のために、平成八年にこの法律が改正されました。宗教法人に対して、収支計算書、役員名簿、財産目録や境内建物に関する書類などの書類提出が義務付けられました。福性寺も毎年これらの書類を都庁に提出しています。違反した場合には、代表役員などに対し過料が科せられるようになっています。

田久保雅子　遺影

遺影1980年（昭和55年）
田久保雅子
福性寺檀徒故北島勝安様（玉岡家ご先祖様）画
Masako Takubo in 1980. This picture was drawn by a member of Fukushōji temple, Mr. Katsuyasu Kitajima, an ancestor of the Tamaoka and Kitajima families.

遺影2008年（平成20年）頃
田久保雅子
Masako Takubo in 2008. She prepared this photo for her own funeral ceremony.

田久保雅子　年表

田久保雅子　年表

住所　〒114－0004　東京都北区堀船3丁目10－16

大正7年4月28日　埼玉県北葛飾郡彦成村彦倉
真言宗豊山派延命院住職石井秀雅、つね夫妻の長子長女として出生
大正11年9月13日　母つね死亡（33歳）
大正14年4月1日　埼玉県北葛飾郡彦成小学校入学
昭和6年3月26日　埼玉県北葛飾郡彦成小学校尋常科卒業
学術操行優良賞など受賞
昭和6年4月1日　埼玉県立越谷高等女学校入学
昭和10年3月26日　埼玉県立越谷高等女学校卒業
昭和10年12月10日　小学校専科正教員免状取得
昭和12年8月14日　田久保周誉（福性寺住職）と結婚、婚姻により改姓（仲人　鳥居敬誉師、染谷勇快師）
昭和15年3月　周誉師福性寺着任
昭和16年6月　周誉師旧満州出発
昭和16年9月20日　長女紀子出生
昭和18年7月1日　次女千穂子出生
昭和19年4月―21年4月　周誉師中国大陸　空襲の時に、ご本尊様をだいて防空壕に退避を繰り返す
昭和20年1月20日　父秀雅師遷化（58歳）

昭和21年4月　周誉師帰国（佐世保上陸）
昭和24年4月14日　長男経雄（海誉）出生
昭和30年2月19日　幼稚園助教諭資格
昭和34年4月―35年3月とその前後のどちらかの1年間（2年間）　堀船小学校ＰＴＡ会長（2年間）
昭和37年4月―38年3月　堀船中学校ＰＴＡ副会長（海誉中学1年生）
昭和38年4月―40年3月　堀船中学校ＰＴＡ会長（2年間）
昭和39年11月3日　福性寺本堂落慶
昭和48年6月25日　福性寺客殿完成
昭和50年3月17日―平成20年6月28日　35年間　堀船3町目地区婦人会「五十寿麦の会」会長
昭和54年10月6日　福性寺山門完成
昭和54年10月6日　周誉師遷化（73歳）
平成8年5月　中国参拝旅行　青島、鄭州、開封など
平成12年5月　お檀家の皆様と中国参拝旅行　12日慈恩寺、13日興教寺、香積寺、草堂寺、14日青龍寺、15日大興善寺など
平成14年月10日　お檀家の皆様と韓国参拝旅行　ソウル、慶州など
曹渓寺、海印寺、石窟庵、仏国寺、通度寺など
平成23年10月9日　帝京大学医学部付属病院において死亡（93歳）
平成23年10月13日　告別式（家族、地域、医療者向け葬儀）
戒名　想蓮院梵音光雅大姉霊位
平成23年11月26日　お檀家向け葬儀（導師　鳥居慎誉師）

田久保雅子の文章

◆勤務評定問題（昭和三十四年頃）

伊藤校長問題に関する釈明書

九月十三日堀小伊藤校長の勤評提出拒否の声明があってから堀小の父母の間には深刻な動揺が起こっています。それ以来一部の父母は、九月廿二日伊藤校長激励の会に堀小ＰＴＡといって列席し、更に九月廿九日には文部大臣にＰＴＡ代表と称して校長の処罰反対を陳情したと言う新聞記事が掲載されたため、あたかも大衆には堀小ＰＴＡ全体が勤評反対のような感をあたえ、当地の大方の父母を深い疑惑におとし入れ、その結果事情説明を求めてくる方、或いは私共の傾向を指摘されるような向きもございましたが、右新聞記事中のＰＴＡ、或いはその代表というのは誤記であります。

ＰＴＡとして又は同代表としてこうした会合に出席したことはないのでございます。これは一部の父母の個人的な行動が誤り伝えられたのでございます。元来ＰＴＡはいろいろな思想を持った大衆が、愛児の教育という精神的な共通の広場に、各自の主張をすてて協力する機関でありますから、この会の名において政治的偏向を表明することは許されないと思われます。

今回の問題は、伊藤校長と政府および都行政機関の争いであってＰＴＡが深く介入することはつつしまなければなりません。

勤評に賛成する人があれば一部に反対する人があってもこれは各自の自由な政治的見解でありますが、教育の場において各自のちがった人生観に立って、思い思いの行動をすることは厳につつしまなければなりません。従ってＰＴＡ中の父母側役員といたしましては常に中立的立場に立って教育の神聖を守っているのでございます。

かくて（1）一部の父兄の自由行動があり（2）新聞の誤記があり、（3）将来の校内における争議行為の発生を未然に防ぐため、九月三十日堀小でＰＴＡ役員会を開き、中立的立場を改めて再確認しようとしましたが、ＰＴＡ組織中のＴ側はすでに職員会議で校長支持を決議したのでＰＴＡの中立決議には参加出来ないと、中立的立場に賛成してくれません。ＰＴＡ中の父母側役員有志は特に

教育の中立性を再確認して自重を申合わせましたので皆さんの誤解をとくために釈明いたす次第でございます。

私共父母側役員の大部分が別個に声明を出すに至りましたことは、先生側の中立拒否がありましたとはいえ甚だ遺憾であります。

私共は手をたずさえて励まし合い、純真な童心を傷つけないように、勉学に支障が起こらないように、全力をあげて努力する覚悟でございますから将来教育の中立が侵されないように御支援下さいますようにお願い申し上げます。

十月　　日

堀小ＰＴＡ中父母側役員有志
会　長　田久保雅子
副会長　望月武
　　前田光子
書　記　高木正之
広報委員長　海老原博美
副委員長　井口舜陽
会員委員長　滝村富慈子
副委員長　平井やす子
保健委員長　杉山静子
副委員長　海谷佳子
給食副委員長　白井きみ
校外補導委員長　大島豊子
副委員長　堀江節子

◆ 堀中会員名簿あいさつ（昭和四十四年）

昭和四十四年六月
会員名簿
堀船中学校卒業生父母の会
あいさつ

会長　田久保雅子

堀船中学校も、地域の皆様方の期待にこたえて、鉄筋四階建の堂々たる校舎が出来上りました。内容から申しましても、区内では十指の中にはいる立派な中学校にまで発展して参りました。父母の会といたしましても、母校の発展は大変気強く、精神的なよりどころとして心から誇りに思う次第でございます。

この度、父母の会の役員一同が相寄りまして、長い間懸案でありました会員名簿作製についていろいろと協議をいたしておりましたが、皆様方の御協力により目出度く発刊されましたことは、この上ないよろこびでございます。役員自身が、名簿の不備のために不自由だったばかりではなく、先生方や会員の皆様方にもいつも不便をおかけして申し訳なく思っておりました。これからは、只今御手許にお届けいたしました名簿をたよりにいたしまして、会員相互の連絡を親密にして、一層親睦を計って参り度く思います。そしてこの相互のつながりを踏まえて、地域社会の中で少しでも知性をたくわえて、社会のよき一員として貢献してゆきたいと願っております。

どうぞ堀中父母の会の皆様、今後ともよろしくお願いいたします。

おわりに、名簿発刊に当りまして多数有志の方々から御厚意ある広告の申込をいただきましたことは、私共一同心から感謝の念で一杯でございます。紙面をお借りして厚くお礼を申し上げますとともに、皆様方の御多幸をお祈りいたしまして御あいさつに代える次第でございます。

◆麦の会ごあいさつ（昭和五十九年四月）

麦の会
創立十周年記念誌
昭和五十九年四月
堀船三丁目五十寿　麦の会
ごあいさつ

会長　田久保雅子

麦の会は五十年代の女性の集りの場を持ちましょうという有志の方々の熱意によりまして発足いたしました。今日ここに創立十周年祝賀会を開催するにあたりまして、ささやかではございますが名簿をふくめました「麦の会記念誌」を発刊することが出来ましたのは、会員一同にとりまして此の上ない喜びでございます。女性ばかりの会で一歩二歩と小さな前進ではございますが、会員数も約百名になり、年間四回実施する行事にも常に内容を充実させるために、親睦の中に少しでも会員の教養にプラスになるように、そして社会福祉にも一人一人が関心を持つようにと心がけて来たつもりでございます。私共では大した事も出来ないかも知れませんが、そうした周囲の事に目を開いてゆく事が大切なことだと思います。どうにか地域での信頼をいただき大過なく歩んで来られましたのも、周囲の方々の温かい御支援を戴いたお蔭と会員相互の「信じ合う心」が大きな源であったと思うのでございます。

私共の年代では若い頃から良人や子供のために家の中で過す事が多かったと思います。そういう奥様方がこのようにして自分のおもったことを文字で表わして多くの方に意見を聞いて戴くということは立派なことであると同時に大きな努力をされたことだと思われます。此の貴重な人生の体験を基にして、名簿を十分に活用され、会員相互の連絡を密にして親睦を計り、知性をたくわえて地域社会の良き一員として貢献して行って戴き度いと思います。

古い歴史のある梶原の町も近代科学によって生れ変ったように繁栄してまいりました。この素晴らしい人情に厚い堀船に麦の会が続いて行く事を願って今後共宜しくお力添えの程をお願い申し上

げます。終りに麦の会記念誌の発刊にあたりまして多数の方々よりお寄せいただいた御厚情に対し深く感謝申し上げると共に皆様方の御多幸をお祈り致しましてごあいさつに代える次第でございます。

◆中国寺院参拝旅行記（平成二年十一月）

田久保雅子

弘法大師さまの足跡が中国河南省　開封の相国寺にあるということを住職から聞いた。この地は主人が世界第二次戦争中の昭和十七年頃より三年余り軍人として駐屯していて私にとってもなつかしいところである。

昨年、西安の興教寺参拝を経験している私の心は　相国寺の参拝と主人が軍隊生活を過した開封を訪ねたいという希望が湧いた。住職が、では時間をつくって親孝行をするかという一言で　急に一週間の予定で旅行を計画して呉れた。二人なので仕度は早い。平成二年十月二十二日午後中国東方航空で成田より三時間余りで上海市虹橋空港へ到着した。上海は気候はあたたかく、そよ風を身にうけて心地よい。空港の広さには驚かされる。通訳さんの迎えをうけてタクシーでホテルへ入る。

さあ今日から朝晩油の多い中国料理を食べることになるが愚痴はいうまい。

翌早朝、予約したタクシーで通訳さんがむかえにきた

市内の玉佛寺へとゆく。一年振りに薄グリーン色の玉佛様にお目にかかり、しばし見入って深々と参拝する。

このお寺は文化大革命の時も紅衛兵の立ち入りは禁止されていたという。通訳さんは解放前の智識人なので中々説明はよろしい。少々献金をする。

中国料理の昼食をすませ、午後一時二十分発の予定を二時間もおくれて国内ローカル線のプロペラ機で出発する。合肥で給油のため三十分休けいの上、河南省の鄭州市に夕方六時ごろつく。

この飛行機は足元から隙間風が入ってくるのに驚いていると、棚のはめ板が「ガタン」と落ちてきた。家族のために保険に入っていて良かったと話し合う。

この鄭州空港で友人の中国人医師が出迎えてくれた。七時間待ったという。この先生と同行して息子も大変うれしさうだ。二人が旧交をあたためているのに邪魔はすまい。ホテル迄タクシーをひろうが中々乗せて呉れない。チップを増やして

やっとのる。真暗い道を無燈火の自転車の間を右に左によけて走しる。まるで神業だ。これではもう少しチップをはずめばよかったのに。

鄭州国際飯店の朝食は稗のおかゆだ。日本から持参した梅ぼしでたべた。熱い中なので美味しかった。

八時半ホテルを出発、人数が増えたのでワゴン車にする。

今日は片道二時間の予定で鄭州市郊外にある道教寺院（中岳廟）と小林寺へ行く。小林寺は日本でも名前の知られている小林寺拳法のお寺だ。国宝級の大きな寺院だけれど住職が居なくて公園風になっているので大変荒廃している。

ご本尊のダルマ大師を参拝し境内を見てまわる。拳法の極意をあらわした人形が何百体とも知れず飾られているのを見ておどろく。

門前にある露店で通訳さんに焼芋をふるまって貰う。

そしてまた遠々と二時間をかけてホテルに帰える。夕食の席で同年輩の日本人十名位と会う。旧軍人で自動車隊として開封に駐屯していたので、なつかしく尋ねて来たという。私を従軍看護婦だったか聞かれた。

翌二十五日は今回の旅行の目的地の河南省開封へと出発する。車で一時間の行程だ。道路はきれいに製備されているが、車から身体につたわる振動は身にこたえる。きっと何かの技術が劣っているのだろう。

車から眺める農村風景は見事だ。大根、さつまいも、麦等は青々として耕作されている。綿は今が収穫期のようだ。

日本の農村とは反対に、中国では農家へ嫁の希望者が多いさうだ。土地は国家のものだが作物は供上したあとは自由市場で売れるから、農村にお金が余分に入いるという。しかしあの広大な農地をロバと人で耕やすのは辛いだろう。

説明を聞いているうちに開封市内だ。農村の中の都市という感じだが、歴史は古いという。

市内見物の最初は河南大学の中にある旧日本軍師団指令部の建物だ。今は河南大学歴史学部となっている。赤さびた窓わくや破れた日よけが目につく。きっとこの建物に多くの日本軍人が出入りしていたであろうと偲ぶ。記念写真をとり黙々として車まで歩く。

このあと弘法大師さまが立寄ったといわれる相国寺へ車をはしらせる。千眼千手観音様を参拝して、はて千眼はどこにあるのかと見れば千本の手のひら全部に眼があった。驚いた。やはり住職はおられず荒廃が目立つ。夜、若い気になって夜市に出かける。人の多いのにあきれ乍ら、人をかき分けて歩くのもまた楽しいものだ。この夜市では青年男女ばかりでなく各年齢層の人々がおいしそうに立食いをしていた。これが中国流の〆ごはんだ。私も少々真似をしてたべたが意外においしい。市場ではベットが３５０元（一万円）、額が20元（六百円）という価だ。値切ればもっと安くなるらしい。しかし大陸の夜は寒い。

開封のホテルは東京大飯店だ。ここに埼玉県戸田市の訪中団十数名が泊っていた。戸田市と開封市とは友好都市になっているという。何かなつかしく声をかけ合う。

二十六日、今日も午前中市内観光をする。市の南門の城壁の前で車をおりる。五十年前と余りかわっていないという。このあたりの城外に旧日本軍が駐屯していたという。城壁には銃弾のあとが多く残っている。周囲を眺めれば煉瓦の民家が木立ちの間に見えるが、あのような家の土間で、長い年月軍務についていたであろう旧日本軍人や主人の苦労を想像すると胸が詰まる。一木一草にも想像がわいて市内見物にも飽きがこない。開封に名残りはつきないが、鄭州に戻る。

昼食をすませて、さあいよいよ大黄河を見にゆく。黄河は揚子江につぐ中国第二の大河だ。あばれ黄河とか母なる大黄河とかいわれているけれど、きっとその水は農村には恵を与えているだろう。鄭州より四十五分位で黄河の展望台の下についた。やっと休みながら展望台上へ登る。

黄河の荘大な眺めのすばらしさ、そして鉄橋の上をＳＬがゆっくり渡ってゆき、もやの中へ消えてゆく様子等、絵のようだ。双眼鏡をのぞいたり写真をうつしたり、しばらくあそばせて貰う。下りも休み休みで体力的自信を失う。

夕方の時間を利用して河南省博物館を見学するが古代の中国の歴史は名前を覚えるだけでもむずかしい。ホテルへ帰り早く休む。

翌二十七日早朝八時半、ホテル出発。時間通りにプロペラ機で鄭州空港を出発する。ここで中国人の先生とお別れする。淋しいけれど再会を期待

しよう。
上海のホテル華亭賓館ではボーイが覚えていてくれる。サービスが良くて気持がよい。少し部屋で一やすみの上、上海の龍華寺へゆく。やっとこのお寺で中国の法要を見る事が出来た。黒い僧衣に赤いお袈裟の大ぜいの僧侶のお経をきく。修行を重ねてこられたようなご老僧や青年僧もおられる。私も共におつとめをすませたような清々しい気分だ。
境内のあちらこちらを歩き乍ら通訳さんの説明を聞く。
文化大革命の時、破かいされた建物を修理されて現在のような寺院になり人々の信仰の中心になっているという。紅衛兵によって打ちこわされた中国の歴史文化は実に数限りないと思われるが、中国のために真におしまれる。龍華寺に日本国田久保海誉で志納金を奉納する。
日も暮れてきたので、夕食の場所へ車を走らせる。最後の夜なので上海ガニを期待したが、やはりはづれた。
七時半より上海名物のパンダのサーカス見物が予定されている。一人８元なので安いなと思ったら、段の上の大衆席だ。通訳さんのおごりださうだ。ありがとう。九時半頃まで見学する。面白かった。
翌二十八日帰国の日だ。華亭賓館の朝食はパンとコーヒーだ。
十四時二十分発日航７９２便に乗車するには自由時間が大分ある。あの唄にあるガーデンブリッチを見に連れていってもらう。ここはその昔、日本兵四人が銃をもって警備していたという。中国人の立ち入り禁止の日本租界の境か知ら。
今、ここには多数の中国人の中に日本人は二人だけだ。色々な事を思って飛行場へ。どうも過去を想像する癖がついたようだ。
人間が溢れている空港で通訳さんと別れる。中国は広大なので今回もその地方によって通訳がちがう。計四人の通訳に世話になった。この方達は中国では最高の教育をうけていると思うけれど、給料も少いらしく服装も質素だ。現在も大へんしめつけが強いようで政治的な事は一切話したがらない。暗い感じだ。
しかし通訳さん一人一人が誠意を以って親切に世話して呉れた。

旅さきで人との触れ合いがうまくいってこそ、旅の楽しさは倍加される。色々とお世話になりました。好意をもってさようならという。

いよいよ帰国だ。整備の行き届いた日本航空で時間通りに上海を出発する。機内食のおそばとワインをいただいている中に瀬戸大橋を通過する。追風なので、二時間で成田へ到着したのにはさすがにうれしい。

無理をいって連れていって貰った。中国開封の旅行だったが、私にとって住職夫婦からの何よりのプレゼントだった。

よみ返してみますと恥かしい作文ですが、ほんの少しでも今の中国の様子を見てまいりましたので書いてみました。

およみいただいてありがとうございます。

平成二年十一月

福性寺内　　田久保雅子

◆奥尻島地震平成五年七月十二日発生　義捐金（平成五年七月）

奥尻島地震義捐金

暑中お伺い申し上げます。

会員の皆様、気候不順の毎日でございますがお元気でいらっしゃいますか。

ご承知のように北海道の奥尻島のあの悲惨な大災害にはお気の毒で目をおおう想でございます。

わたくし共麦の会でも義援金をお贈りしてお見舞いを致し度いとおもいます。

つきましては会員お一人五百円程をお出しいただきたいとおもいます。

勿論ご無理ではございませんが、よろしくお力添え下さいますようお願い致します。

これから暑さも一段と酷しくなりますのでご自愛下さいますようお祈り申します。

麦の会　各位

田久保雅子　外　役員一同

地区役員の方にお願い致します。ご多忙とは存じますが、なるべく早く皆さまからお金をいただいて会計さん迄おとどけ下さいませ。

◆雅子　生年月日　大正七年四月二十八日（平成二十一年頃）

周誉さんとの結婚は昭和十二年四月十二日。新婚旅行なし。巣鴨の長屋が新居です。真性寺のお棚経でお金をためて、九月に老神温泉に二泊で行く。

帰って来た日に、東京の空を守るため警備召集され、空襲があると赤羽へかけつけてあまり寺にはいない。

十六年、召集令状がきて千葉の習志野へ入隊。来いと電話があり、子供二人を連れて面会に行った。出征先、一回目満州、二回目中支。はっきりわからない。

終戦近く、周誉さん戦死という噂が流れましたが、終戦の時は部隊からの任務で、外の隊に出張していたと言っていました。

出張中に眼が見えなくて、とり目とか、夜の行軍の時、塹壕に転落したことも時々あったと話していました。

その後はご承知のように梵文学一筋。

久野先生は恩師以上です。奥様には特にお世話になり戦地へ送る周誉さんの下ばきまで縫うのを手伝ってもらいました。

今日　九月十九日

海誉さんから私（雅子）の人生について書いておいたらというアドバイスがありました。

すぐに思い出すのは、雅子の母（つね子）が亡くなったのは、雅子が五歳の時で、病気は産じょく熱で、亡母のお棺に一緒に入ると言って皆さんをなかせたと、幕張の母の兄、吉岡経蔵さんから聞かされました。

母の実家は松戸の古い料亭で、水戸様、昔の殿様方が参勤の時のお宿であったそうです。母は結婚前はお屋敷勤めをしていたと聞いていますが、父となんで知り合ったかは聞いていません。

母の兄、傷痍軍人の吉岡経蔵さんが話してくれました。この伯父は、母の亡くなる時にたのまれたと言って、結婚の時はお召の着物二枚を買ってくれた人です。

この伯父さんの墓地は、松戸の大正寺というお

寺様でしたが、先年、平成十九年にお詣りに行きたいとお電話したら、墓石を外へ移転してしまったとのことです。

すっかり母の実家とは不明になってしまってさみしい限りです。

しかし、私は現在九十歳ですが、三人の子供に恵まれ、周誉大僧正のおかげで、福性寺で何不自由なく暮らさせていただいております。

ただ今の家族、海誉さん一家に、親切に厚く感謝いたしております。

つづきはあとで

田久保雅子の思いで

「追懐」

真言宗豊山派正福寺住職　星　俊光

回顧すれば、私が初めて北区堀船の福性寺様にお世話になったのは、今より三十五年前の事です。隨身者（小僧に相当）として大学に通わせていただきました。

それ以来、代替わりとなっても途切れることなく、家族の一員のごとく面倒を見ていただいております。

初めてお世話になった当時の住職は、田久保周誉博士で、今さら事あたらしく私が申すまでもなくサンスクリット学者として広く学会にその名を知らしめ尊崇を一身に受けられた方です。

失礼な申し上げとは存じますが、「内助の功」も多分にあった事と思います。

奥様の雅子様は学者としての周誉博士を大変尊敬されておりました。前述のごとく田久保家においては、私共小僧であっても家族の一員として接して下さり、食事もご一緒で奥様の手料理を毎日いただくわけですが、食事中の会話はとても楽しく、また勉強の場でもありました。ご夫婦で諸事にわたり、お話し下さるのです。旦那さん（住職のことを当時はこのようにお呼びしていた。梵語で布施の意）からは学問のおもしろさ等、奥様からは女学校時代の勉強について等を、たくさん伺いました。

ある夕食事、今となっては原因は不明ですが、めずらしくお二人が意見衝突し、声高に口論となり、それが延々と続いた事がありました。

しかし、陰湿さとか不安とかはまったくなく、むしろ変な表現ですが知識人同士のキャッチボールのように感じておりました。このような時、私は不安には思わないといっても内心は穏やかでなく、オロオロするばかりで、このまま食事をしていては悪いと思ってしまう。そんな時には決まって奥様が気遣って下さり、キャッチボールを一時中断して「気にしないでたくさん食べなさい。」とおっしゃる。旦那もやはり中断して、「そうだよ星、遠慮は無用」などとお二人でニコニコして話しかけ、私の「ハイ」の返事を待って、又もとの表情に戻って納得がゆくまで話される。なんと知的で心が奥

深いご夫婦と、今でも忘れ得ぬ光景のひとつです。
昭和五十四年十月六日、師の忽然たる遷化、奥様は長い間悲しみに打ちひしがれておいでしたが、旦那が居なくてもあなたはここに居てもいいと言って下さいました。その後も長くお世話になり、現住職の海誉先生に師事し現在に至っております。

また、奥様は学者夫人らしく大変学殖の深い方で読書家でもあり、文芸書をこよなく愛されていました。ご自身が感銘を受けた作品のうち何冊かを私に下さり、読むようにおすすめ下さったのです。それらは、黒岩重吾、丹羽文雄、中山義秀、谷崎潤一郎の作品でしたが、それらのうち谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」中山義秀の「テニヤンの末日」はくり返し読みました。中山義秀については、その生家が私の住む町のすぐ隣りの出身であるにもかかわらず、それまで一度も読んだ事がなく、恥入った記憶があります。

そして谷崎の「少将滋幹の母」も何度か読み、今でも座右に置いて時々無常観について考えたりもします。この無常観と同席するのが不浄観であると思うのですが、無常観を谷崎の「少将滋幹の母」、不浄観を中山義秀の「テニヤンの末日」、より体得したように思います。

奥様には物心両面において大変お世話になり感謝の念はつきません。それも私ひとりに限らず、粋に収まりきれない元気な私の友達にも及び、大変可愛がって下さり、時には飲食費まで下さいました。その友人達も、それらを忘れず覚えていて感謝しております。

大恩ある奥様が入院されたのを聞き、ご無沙汰のまま、お見舞いにも参上せず申し訳ない思いでいっぱいです。慈愛あふれる温顔に再び接する事ができないことを思うと、私自身の来し方を振りかえって感慨無量です。

合掌

伯母さんの思い出

真言宗豊山派延命院住職　石井　秀誉

私は福性寺前住職田久保周誉大僧正の弟子として昭和四十二年四月より同四十九年三月までの七年間（十五歳～二十二歳）福性寺にて生活させて戴きました。

田久保雅子さまは私の父の姉でありましたので、私とは伯母、甥の関係でございました。

私がお世話になった頃、伯母さんは五十歳くらいでありましたが非常に優雅で上品で頭の良い方でありました。

そして、町会の婦人会の会長等をやられていた事や人望が厚い方でしたので檀家さんだけではなく、色々な方がお寺に来ておりましたので、私も色々な方と知り合いになり、皆様に可愛がって戴いたことを思い出します。

私が福性寺にお世話になったのは中学校を卒業した十五歳のときであり、当然仏事は出来ず、お経を唱える事など全く出来ませんでした。何日かして周誉大僧正より「お経の練習をするから毎日朝五時に起きるように」と言われ、朝が苦手な私にとってこのお経の練習は非常につらく落ち込んでしまいました。

そして、お経が少し唱えられるようになると御通夜のお伴や法事の助法等の仏事を手伝うようになってからは益々落ち込んでしまってホームシックになり、お世話をしてくれる人や教えてくれる人の立場を考えずに家に帰りたいと思うようになってしまいました。

この様な中で、伯母さんに「今帰ってどうするの、何の為に福性寺に来たのか」等々、時には強い口調で諭されたり、時にはデパートに連れて行って戴き、洋服を買って戴いたり、田舎では食べたことがない物を食べさせて戴いたりとか大変気を使って戴きました。

今、振り返ってみますとこの時期に周りの方のフォローが無く家に帰ってしまっていたら今日の私は無かった訳で本当に有難く思っております。

だんだんと福性寺での生活に慣れ、高校・大学と進ませて戴き、周誉大僧正及び伯母さんには仏事はもちろん、人との接し方等、いろいろな事を

生活の中で教えて戴きました。
家庭内での伯母さんの存在は、学者でありました周誉大僧正をしっかりと支え、今日の福性寺の隆盛の大きな一因であり、また、地域社会に対しても多大な貢献をしたことであります。
お世話になっている身でありながら食事は家族と一緒で同じものを食べ、テレビも見させて戴きましたが伯母さんは時代劇が好きで、特に銭形平次が大好きでありました。いつの間にか私も時代劇のファンになり自宅に帰ってからも時代劇をよく見ていました。今でも昔の時代劇の再放送をみて懐かしく思うことがあります。
また、以前は七月に行われておりました施餓鬼会で欠席されました檀家様の塔婆を七～八人でお墓に建立する作業があり、数にして二百枚位の塔婆ですが伯母さんは、その墓地がどの場所にあるのかを把握しており、的確に指示を出し、七月の一番熱い時間帯の作業を短時間で終了させ、ある意味では福性寺の夏の風物詩であるこの作業に参加した人達から毎年「さすがだな」と言われていた事も懐かしい思い出でございます。
そして、私が福性寺から自宅に帰ってから年に何度かは福性寺にお邪魔をしておりますが、すると「秀ちゃん」「秀ちゃん」と私の俗名を呼んで戴き、私の好きな熱くて濃いお茶を必ず入れてくれ、私の家族の事やお寺のことを熱心に聞き、私の自坊の寺での大きな事業の時などには必ず御祝いを頂戴したり、お目出度いことなどがあると我が事のように喜んでくれました。
また、伯母さんの両親及び私の父の墓参に度々私の寺に来寺して戴きました。一人で来ることもありましたが現住職の海誉師と一緒に来て戴くことが多く、孫の圭誉師と曾孫の光ちゃんと来てくれたこともありました。
心配をかけまいと、いつも連絡無しに来ますので当方は大慌てをしてしまう時があり、次回は連絡を下さいと言いますと、両親と私の父の墓参をして、お茶を一杯戴ければそれだけで良いのだから気を使わないでと反対に言って戴きました。
このように伯母さんは生家の私のお寺のことを常に気にかけてくれていました。本当に有難いことでした。
伯母さんが九十歳を過ぎた頃よりケガ等により体調に変化が現れたかと思いますが、私がお邪魔

をしたときには以前と同様熱くて濃いお茶を伯母さんが曜子さんにお願いして入れて戴き、そして、私の家族やお寺のことをいつも以上に何回も聞いてくるのがすごく印象的でした。

最後にお会いしましたのはお亡くなりになる十日位前でしたが、家内と一緒に帝京大学付属病院にお見舞いに行きました時は意識がなく話をすることができませんでした。その後まもなく訃報を聞き駆けつけましたが、とても九十三歳とは思えないような若々しく非常に優雅で上品な御顔をしておりました。

中学を卒業したばかりの田舎の少年を七年間も面倒を見て戴き、周誉大僧正と伯母さんにどれだけ沢山の迷惑をかけたか分かりません。それでも面倒を見て戴き色々なことを勉強させて戴き、今日の自分があるのは等々考えながらお線香をあげさせて戴きましたが思わず涙がこぼれてしまいました。

そして平成二十三年十月十二日の通夜、十三日の告別式を福性寺にて特にお世話になった僧侶六名にて行うという現住職の考えは私にとっても他の僧侶にとっても非常に名誉な光栄なことでありましたし、少しは恩返しができたかなと思います。

「光陰矢の如し」と申しますが、時の流れは速く、伯母さんがお亡くなりになりまして一年が過ぎようとし、私も還暦を迎えました。

伯母さんからは沢山の恩を戴きましたが、生前はほんの一部しか恩返しが出来ませんでした。これからは特に伯母さんが気にかけてくれた故郷の生家をしっかりと守っていくことを常に意識し生活していくことが一つの恩返しになるであろうと思います。

最後にこのような思い出集の企画をしていただきました事に対し心より感謝申し上げます。

伯母さんいろいろとありがとうございました。本当にお世話になりました。

大奥様との思い出に寄せて

真言宗豊山派福寿院住職　矢田　正幸

私が大奥様に初めてお目にかかったのは、昭和四十九年の春。今から四十年近くも前のことになります。高校を卒業した私は、大学へ入学するため栃木から東京へ移り、福性寺でお世話になることとなりました。福性寺へは両親と祖母に連れられて行きましたが、当時の私は他所のお寺で生活することへの不安でいっぱい。寺の長男として育ったものの、「何も知らない田舎者の私が、福性寺のお手伝いをしながら大学に通うなんて無理だ」という思いを強く抱いておりました。寺に着き、田久保家の皆さまと両親らが会話をする中、私一人だけは場に溶け込めず、ずっと下を向いたまま。そんな私に「矢田さん、好きな食べ物はありますか？」と優しい笑顔で声を掛けてくださいました。私が返答をためらっていると、母が「カツ丼が好きです」と答えたため、笑いが出て場が和んだことを思い出します。こんな優柔不断な私を四年間一度も叱ることなく、温かく受け入れ見守ってくださいました。

大学卒業後、長谷寺へ約四年間入山致しました。このとき、福性寺のお檀家さんと参拝に来られ、一緒に写真を撮ったり、学生の頃の懐かしい話をしたりして胸がいっぱいになったのを思い出します。その後も折に触れて写真や励ましのお手紙を頂戴し、そのたびに温かく、穏やかな気持ちになることができました。

自坊に帰ってからも、福性寺で約十五年間お世話になりました。私の結婚、子供の誕生、そして僧階昇進、伝法大会と、人生の節目には親同様にご配慮を賜り、ご指導いただきました。ずっと私を見守ってくださっていた大奥様のご厚恩を一生忘れることはありません。また、父の亡き後、住職として生活が出来ますことは、周誉大僧正、大奥様をはじめ田久保家の皆さまのお蔭と深く感謝いたしております。

大奥様の在りし日のお姿を偲びつつ、あらためて心よりご冥福をお祈りいたします。

仁者は寿し（じんしゃ　いのちなが）

真言宗豊山派光永寺住職　榎本　博司

私が福性寺様にお世話になったのは、昭和五十七年四月から六十三年三月にかけてでした。六年間の長きにわたって、想蓮院様をはじめ田久保家の皆様には、家族同様に遇して頂き、その御恩の大きさは計り知れません。

想蓮院様は、大変お優しく明朗快活なお人柄でいらっしゃいました。お世話になっていた間、福性寺様のお仕事をお手伝いさせて頂きましたが、何分、田舎育ちの上に、寺院の常識もまるで知らない木偶の如き若僧でございましたので、かえって御迷惑をおかけすることが多く、今から思うと汗顔の至りです。想蓮院様も、私の余りの気の利かなさに驚き呆れたことが、一再ならずあったと思われますが、いつも変わらぬお優しい笑顔で、檀信徒の方の応接、法要の準備等、様々なことを御指導して下さいました。

思い返しますに、想蓮院様が怒色を浮かべられたり、不機嫌な面持ちをされていたりしたことは、殆ど記憶にございません。お幾つになっても若々しい溌剌とした御様子と、朗らかな微笑みのみ、懐かしく想い起されます。はっきりと意見を述べられる時も、常に上品瀟洒な趣があり、誰もが自然に襟を正される思いであったろうと存じます。

毎夕、欠かすことなく御夫君でいらっしゃった周譽大僧正のお墓にお参りなさっていたことも、強く印象に残っております。盆と彼岸の他は、先代住職の命日にしか墓参をしていなかった我が家と比べ、径庭のあること甚だしく、寺庭夫人のあるべき姿を教えられる思いが致しました。

御住職の海譽先生も、医学の御研究で、殆どお休みのない御様子でいらっしゃったにも関わらず、檀信徒の教化にも大きな熱意を注いでおられました。寺院行事の御運営や御法話等、先生が考案された様々な御創意は誠に画期的で、私も早速、その幾つかを真似させて頂き、現在に至るまで、自坊での法要に活用させて頂いております。

若奥様の曜子様も良妻にして賢母、御夫君と御子息に献身的に尽くされながら、想蓮院様とも実の親子の如く仲睦まじく、境内はいつも、想蓮院

様と若奥様、お二人の明るい御笑声で満たされていたかのような印象があります。

想蓮院様が何より鍾愛なさったお孫さん、圭譽様、周様、良様も、御家族皆様の御薫陶をお受けになって、抜群に優秀に御成長され、現在、それぞれの分野の第一線にて御活躍をされておられます。まさしく理想の御家庭と言うべきで、唯お世話になっていただけの私でさえ、誇らしい気持ちになる程でした。

福性寺様のお蔭にて、無事に僧階をとることができた私ですが、自坊に戻ってからも、ただ馬齢を重ねるばかりで、福性寺様のお役に立つようなことは殆どできずに今日に至っております。想蓮院様に対しましても、御恩に報いることが余りに薄かったと言わざるをえません。

又、常にお達者な御様子でいらっしゃいましたので、私なども、いつまでもお元気でいて下さるものと安心しており、結果、御病状重篤になられてから、御入院なさっていたことを初めて知る有様で、お見舞いにも行けずじまいでした。思い返せば、非礼なことばかりしてしまったようで、甚だ忸怩たる思いが致します。

論語に「知者は水をこのみ、仁者は山をこのむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は楽しみ、仁者は寿し」という言葉があります。「知恵すぐれた者は流れる水を好み、活動的で、変化する諸相を楽しみつつ生きる。慈愛あふれる者は不動の山を好み、何事にも心を乱されることなく、つつがなく天寿を全うする」という意味です。

御生前、その御謦咳に接することはかないませんでしたが、御先代の周譽大僧正は悉曇学の泰斗として、宗門を代表する知者でいらっしゃいました。そして、その御伴侶たる想蓮院様も、渾身の仁者でいらっしゃいました。想蓮院様は御家族や御親族のみならず、檀信徒や地域の人々、宗門関係者の全てから、広く愛され、慕われておられました。「仁者は寿し」という孔子の言葉の通りに、九十三年の天寿を全うされましたが、これも、天が想蓮院様の御仁徳を尊んだ証のように思えてなりません。

周譽大僧正と想蓮院様、知仁そなわる御夫婦でいらっしゃったお二人は、これからも智慧と慈悲の双輪の如く、御手を携えられて、お浄土の光の中を歩んでゆかれることと存じます。

最後に、我々に広く婦徳の範をお示し下さいました想蓮院様に、深甚なる敬意と感謝の念を込めて合掌し、擱筆させて頂きます。

合掌

雅子様との思い出

真言宗豊山派福寿院住職　宮本　宥慶

私は、平成十一年四月より、十九年の三月まで九年間、福性寺様にお世話になりました。始めの一年間は学生でしたが、御住職を始め御家族の皆様にとても快く迎え入れていただきました。そして、皆様から多くを学び、いつも笑顔で家族のように接していただき嬉しかったです。また、時には真剣に叱って頂いた事もありました。福性寺様と御縁をいただき勤めさせて頂いた事、とても感謝しています。

大奥様は、私が出勤すると、いつも『宮本さん、いらっしゃい』と笑顔で迎えてくれました。私が埼玉県・松伏町出身と云うこともあり、大奥様が育った三郷市の事や、現在のように整備されていない道を、越谷市の学校まで自転車で通われた思い出を話してくれました。

両彼岸や、お盆の時期には、お線香点場で仕事をしていると、大奥様が『宮本さん、赤い（赤い紙の巻かれた）お線香二把点けてくださる』と言われ、先代住職・周譽和上のお墓にあげられ、その後、寒くても暑くても線香点場に座り、『ここに居てお檀家の皆さんと顔を合わせたり、話をするのが好きなの』と楽しそうにお話をされ、二人で座っていた時間を思い出します。

春の桜の時期になると、毎年石神井川や飛鳥山に桜を見に行きました。私は、車で大奥様の帰りを待っていることが多くありました。時折大奥様の帰りが遅く心配になり探しに行った事もありましたが、大奥様は、満開に咲く桜を見ながら『宮本さん、綺麗ね』と微笑んでいた大奥様の笑顔が今でも忘れられません。時間が経つのを忘れるほど桜が好きなんだなと思いました。福性寺様を退職した後も桜の季節が来ると、大奥様の満開の桜を見て微笑んでいる姿を思い出します。

平成十四年の日韓ワールドカップの年に、福性寺様の御檀家の方々と、檀信徒研修会で韓国に行きました。私の妻も同行させていただき、大奥様と行動を共に過ごさせていただきました。皆様と幾つもの寺院をお参りし、夜には夜景の綺麗な高台に行き、その後ショッピングを楽しみました。こ

の旅行中、妻に大奥様が念誦をプレゼントして頂き、今でも大切に使わせていただいています。御住職を始め大奥様、檀信徒の皆様と共にした研修旅行、私も妻も初めての韓国で、見るもの全てが新鮮でした。とても想い出に残る研修旅行でした。

私は今、埼玉県八潮市・福寿院の住職をしています。福性寺様の田久保住職を始め、大奥様、御家族の皆様方のお陰で、今の私があると心より感謝いたしております。本当にありがとうございました。

大奥さまとの思い出

真言宗豊山派松音寺副住職　林　賢乗

私は平成十九年の四月から現在まで約五年間福性寺に勤めさせていただいております。福性寺にお世話になるようになり、大奥さまともたくさんの思い出ができました。

大奥さまの事を知っていく中で、私が何より驚いたのが記憶力でした。お盆や春・秋の彼岸の時などにお線香小屋で一緒にお線香を点けていると、お寺に来るお檀家の皆様の名前や住んでいる所、親戚の事までが大奥さまの頭の中に記憶されていました。そんなこともあって、お檀家の皆様も大奥さまとよくお話しをなさって楽しそうにされていましたし、なによりも大奥さま自身がとても楽しそうにお話しをされていたのを覚えています。

大奥さまには、いろいろな昔の話を聞かせていただく機会がたくさんありました。その中でも私が一番よく覚えている話が、戦争の時のお話です。東京に空襲がきた時に大奥さまはご実家の三郷のお寺にいらしたそうです。空襲がきたのを聞いて福性寺の事がとても心配でしかたがなくなり、福性寺に自転車でお子様二人を連れて戻られました。そして福性寺の境内に大きな焼夷弾が二つも落ちていてとても驚いたというお話でした。私も戦争の事は学校の教科書や色々な本を読んで少しは知っているつもりでしたが、実際にその時代の事を経験してきている大奥さまのお話は、リアルな内容で私にとってとても勉強になるお話でした。

他にも大奥さまと私はお昼ご飯を一緒に楽しくいただいたり、私が運転する車で何度もドライブに行ったりと、楽しい思い出がたくさんできました。

大奥さまにかけていただいた温かく優しい言葉。教えていただいた、たくさんのお話。一緒に過ごさせていただいたたくさんの思い出。どれを思い出しても感謝の気持ちでいっぱいです。

大奥さま、本当にありがとうございました。

田久保の母

田久保　曜子

田久保の家に嫁に来てから今年で三十六年になります。お蔭さまでなんとかお寺の生活にも慣れ、すっかり福性寺に根を生やしてしまいました。

結婚したばかりのことは、無我夢中であまり覚えていません。三人の息子たちにも恵まれ、母に助けてもらいながらなんとか子育ての「怒涛の日々」を乗り切りました。

小さい頃は母によく三人をお風呂にいれてもらいました。その時は賑やかな声がお風呂場から聞こえていました。三人の元気一杯の男の子たちの身体を洗うのはたいへんだったと思います。

食事のお新香は母の係りで、いつもたくさんの胡瓜や茄子の漬け物が食卓に並びました。母は実母を三歳の時に亡くしているので、自分で工夫してつけていたようですが、私たち家族にとっておふくろの味はぬか漬けだったように思います。長いこと漬物は母の専科だったので、私はいまでも時々あのお漬け物が食べたくなります。

田久保の母は一人で海外旅行も国内旅行もしていました。同じ年代の人に比べても活発で進取の気性のある女性でした。父がなくなってからは進んで外に出かけていました。晩年は懐かしそうに当時の旅行の話しをしていましたが、やっぱり自分の家である福性寺にいるのが好きだと言っていました。

埼玉の延命院というお寺に生まれて、福性寺にお嫁にきて戦争中も住職の留守を守って、ご本尊の大日如来さまを空襲から避難させていた苦労もあるので、ここ福性寺に対する愛情は大きかったとおもいます。

読書もとても好きで、推理小説や時代小説をよく読んでいました。

明治座や新橋演舞場にいろいろなお芝居を見に一人で予約をしてでかけていましたが、一人でいけなくなってからは私がお供をしました。おかげさまで私も少しジャンルは違いますが、今では時代小説が大好きです。母は、晩年は目の調子があまり良くなく、小さい字が見えづらくなり、メガネをかけてもよく見えなくなり、ほとんど読書を

しなくなりましたが、それが少し残念です。
旅行も一人で行けなくなってからは私達夫婦と毎年日光へ出かけました。平成二十二年九月に行った日光の旅行が最後でした。母はその年の始めに右腕の骨折をして腕が不自由で歩くのもバランスが悪くなり椅子持参でいって来ました。いつも楽しみにしている湯ノ湖や湯滝を見ましたが、水量の多い滝を水飛沫がかかるのも気にせずにあきることなく眺めていました。湯の湖の畔でも椅子に座って、「気持ちがいい」と湖面をいつまでも見ていました。中禅寺湖では行くたびにボートに乗っていましたが、もう一度紅葉の中禅寺湖で一緒にボートに乗りたかったです。
こうして文章をうっているといろいろなことを思い出します。
今年は桜の咲くのが例年より遅いですが、桜の花も大好きでした。息子達やうちで働いていた宮本さんや林さんも桜見物のドライブによく連れて行ってくれました。
私も母と桜の季節に石神井川のほとりをゆっくり散歩しました。満開の桜の花びらが川面に散って、ピンク色に川を染めているのを眺めるのはとても風情がありました。毎回なかなかその場所を離れることができませんでした。
今年の桜は一緒に見ることはできませんが、福性寺の住職が早咲きの桜を沢山植えたので、今年は早咲きにはなりませんでしたが、母も元気でいたらきっと毎年楽しみにできたと思います。
お花が好きだった母の遺志を継いで、今福性寺は植木を、特に花の咲く木を住職が増やしました。東京のお寺としては面積の割にかなり樹木が多いと思います。季節毎に色とりどりの花が咲き楽しめます。お水をまく林さんには大変な仕事だと感謝しています。
こうして田久保の母のことを思い出していると、自分のこれまで歩いてきた日々もその思い出に重なることにきづきました。
私は福性寺にお嫁にきてすぐに、住職だった周誉和尚に「お母さんと同じようにやればいいんだよ」と言われました。田久保の母と同じようにできているか、この年になっても自分ではわかりませんが、田久保の父と母が守ってきた福性寺を大事に守り次に繋げることが、親孝行だと確信しています。

祖母の思いで

田久保　圭誉

私にとって祖母は全く優しい祖母で、物心両面で支えてもらった存在であった。孫の私の多々ある至らない部分に多少、いやまるで目をつぶっても温かく励ましてもらい、今に至るまで支えとなっている自信をつけてもらった。

そんな祖母が体調を崩してもうあまり散歩にも行けなくなってしまったひと頃、私と祖母と、それに息子の光で休日の午後にドライブに行くことができた時期があった。祖母の体調を心配した私の両親は運転する私にそんなに遠出はしないで一時間程度で帰ってくるようにと言っていたが、私はせっかくの機会と思い道中二時間を超えたドライブになることもしばしばだった。どうせなら車の中からでも色々みてもらおうと思い都内の観光名所のうち、車から見られるところに連れて行った。表参道のケヤキ並木をぐるりと回ってきたこともあれば、高速道路に乗って隅田川沿いを走り、レインボーブリッジを通ってきたこともあるし、新宿の私の大学の職場まで連れて行ったこともあった。なかでも、当時まだ建設中の東京スカイツリーのまわりをぐるりと一周して浅草を経由してくるルートは祖母と私のお気に入りであった。助手席の祖母に、私は運転しながら通り過ぎていく風景について説明し、祖母は熱心に耳を傾けていた。ちょっとした高層マンションが新しく建てられているのを見るだけでも祖母は感心していた。普段は助手席に設置されたチャイルドシートから、車窓から見えるもの、見えないものについて矢継ぎ早に色々質問してくる光であったが、祖母が私の車に乗るときはあえなく後部座席に移設されたチャイルドシートに座る羽目になっていた。もちろん話の主導権も取ることができず少し退屈そうだったがそれでも楽しそうに乗っていた。

このドライブの行き先は、祖母からどこでもいい、と言われて大概私が決めていたが、一度だけ祖母に行き先を聞いたことがあった。祖母の答えは三郷の延命院（祖母の実家）へ行きたい、というものであった。行ったときは、祖母はじっくりと自分の父のお墓参りをし、ゆっくり本堂を眺め

ていた。ほんの短い滞在であったが、祖母が自分から行きたいと言ったところに連れて行けて私も嬉しかった（このとき光は境内の目の届くところに停めた、クーラーの効いた車内でぐっすりと眠っていた）。

考えてみると祖母と旅行に行った試しはほとんどない。両親と兄弟で旅行に行くときは基本的にいつも祖母がきっちりとお寺を守っており、おかげで旅行に行くことができた。世界をその足で旅した祖母であったが、やがて祖母は車椅子に乗るようになった。外出時に車椅子に乗った祖母がどう家から出入りするかは、私の両親の知恵の絞りどころであった。結局車椅子に乗ったまま通過できるのは白山堀公園から出るルートということになった。土の地面ででこぼこしていたこともあり、人工芝のシートを家の周りをぐるりと通って公園との接続部まで敷き詰めた。見た目はやや不格好であったが、現実的な解であった。そこを通って祖母は家に出入りすることになった。その当時祖母の車椅子の二つの車輪が通った跡は、いまはだいぶ薄くなってしまったが、それでも残っている。今、その跡の上を駆け抜けるのは私の子供たちの光と麗子である。

「圭ちゃんは立派になったね。」とは体調を崩す少し前くらいからよく祖母にかけられた言葉である。だいぶひいき目に見て貰っていたのは私も自覚していて、こそばゆい思いであったが、今は祖母の目を通した自分に多少でも満足していてくれていたなら良かったなと思っているし、かけられたその言葉に恥じないよう誠実に物事に当たりたいと思っている。

（福性寺副住職）

私と「うんばあば」の思い出

田久保　有華

「うんばあば」とは、私の長男、光の雅子さんの呼称である。「おおきいばあば」が子供独特の発音により、「うんばあば」となった。光が生まれて五年が経つが、その間、うんばあばという呼称に私も馴染んでしまったので、ここでは、うんばあばと呼ばせていただこうと思う。

うんばあばの思い出をあらためて書くとなると、どう書いていいのやら、正直、困ってしまう。一緒に生活した約六年、うんばあばが外泊した以外は毎日、顔を合わせ、話をしていたからだ。朝の濃い日本茶、ゆったりと腰をかけていた椅子、テレビから聞こえる大きな時代劇の音楽、前を通る光に「たっっち（タッチ）」と手をかざす。まだ、赤ん坊だった麗子を「コレ、おい、ホイ」とおどけた声であやす。「今日のごはんは何ですか？」「それは楽しみダ」そんな日常が、私とうんばあばに流れていた。

うんばあばは、お洒落さんだった。髪型・ほんの少しのメイク・洋服・アクセサリー。外出時に至っては、バック・上着・靴、果てまたステッキまで気をつかっていた。お洒落をして外出をし、知らない人と他愛ない会話から始まり、ご自慢の家族話を楽しむ姿は何度も見た。とても社交的で華やかな人だった。

お寺の行事となれば、うんばあばは何時にも増して輝いた。お寺の大黒さん、いや、看板娘として、会う人会う人と会話をかわす。お線香小屋担当が大好きで、「あらー、奥さん、お元気だった？」とか。文字にしてしまうと簡単になってしまうが、これが行事にいらっしゃるお檀家さんほぼ全員に通じる。すごい。うんばあばが、休憩に入ってお線香小屋から消えてしまうと、その間にいらしたお檀家さんに「大奥様は？」と何度も聞かれた。本当に福性寺の看板娘だった。

うんばあばは外出が大好きだった。あまり歩けなくなった時も、私の夫、圭誉さんの運転する車に光と一緒に乗って、日曜日のお昼過ぎにドライブするのが楽しみだった。うんばあばの指定席は助手席。まだ、建設中のスカイツリーまで行き、車

の中から見上げていた。うんばあばが亡くなる前に完成したこのスカイツリーは、夫・光・私にとって、感慨深いものである。

　好きな事といえば、食べる事も大好きだった。外食はもちろん、家のごはんも、三食しっかりいただいていた。とりわけ、和食が好きだった。カロリー制限の生活になり、甘いものが口にできなかった時、食事の一部として、煮豆を私が作った。光と一緒に小皿にいれ、味見と称して食べていた時、楽しそうに美味しそうに食べて、光と茶目っ気たっぷりに、私におかわりをしてきた。前文で、食べる事が大好きだったと書いたが、口に入れて味わうというという事よりも、誰かと共に食するという事が好きだった。田久保両親がいつも、うんばあばを気遣い、必ず誰かと食卓を囲んでいた。家族というつながりを大事にする、愛情深い、優しい、大きいおばあちゃんだった。

　いつのことだったか、地元の商店街の奥さんに、お寺の話をされ、うんばあばのことについて、こう呼ばれた事があった。

「あの、おばあちゃんは、ゴッドマザーだからね」

　うんばあばを失くして今、その意味を深く感じる。

質問と答えと作文

田久保光

平成二十三年十月二十九日

質問

大きいおばあさんについて思い出せることを話して下さい。

答

車椅子に乗ってたね。

下の部屋に座ってこうちゃんとハイタッチした。

うんばあばの車椅子が動かないので、ばあばに言いに来た。

がんじゅうさんとあしびなさんに行くとき駐車場に送りにいったね。

質問

あとなにか思い出せる？

答

二歳ごろチョロQもらった。

帝京病院に長く入院していて死んで寝台車で帰ってきた。そのあと、お葬式をしたんだ。

電車を見に行って帰りポテトを食べた。

一緒に雷門に行った。

註　がんじゅうさんとあしびなさんは、老人介護センターです。

平成二十四年七月作文

いつもげんきでいてくれて、ありがとう

たくぼこう

こうちゃんが、ちいさいころ、だっこしてくれてありがとう。

しゃしんものこっているよ。とうきょうタワーは、みにいけなかったけれど、いっしょにスカイツリーをみにいってくれてありがとう。ポテトおいしかったね。

かぞくは、げんきにいきています。うんばあばのことは、ぜったいにわすれません。

（曾孫）

食にまつわる祖母の思い出

田久保　周

僕が小学生だった頃、父と母がたまにふたりだけで外食するときに、お鮨の出前を取ってくれて、そして普段は禁止されている食事中のテレビを許してくれたこと。もう今では何の番組を見ていたのか全然思い出せないけれど、テレビを見られることがとてもうれしかった。圭司くん、良くん、何の番組を見ていたか覚えていますか？そして、これもめったに食べさせてもらえなかったカップラーメンも食べさせてもらえたこと。そういえば、カップラーメンは二階の台所の流しの下に置いてあったこと。出前のお寿司とカップラーメンだから洗いものなんてほとんど出なかったけれど、それでも使った小皿とかを僕ら孫たちは洗っていたのだろうか。

ぬか漬けはずっと祖母の担当で、夕食にはいつもキュウリやカブのお新香が並んだこと。ぼくは祖母のぬか漬けが好きで、でも母は実はぬか漬けがすごく好きというわけではなく、僕はときどき母の分を分けてもらっていた。祖母はかなりしっかり漬かったぬか漬けが好きで、そして浅漬けの時は、「ちゃんと漬かってなくてごめんね」と少し申し訳なさそうにしていたこと。それに母が、「でもサラダみたいに食べられておいしいわよ」と、必ず、本当に必ず返していたこと。でもぼくは少し浅漬けくらいが好きで、そのやり取りを聞きながら静かにうれしかったこと。

うなぎを食べなかったこと。祖母がお芝居を見に行って、その帰りに夕食を外で食べてくるようなときは、僕たちはうなぎを食べることがよくあった。僕はうなぎが大好きでうれしかったけれど、なんだか少し申し訳ない気がして、うなぎを食べたと祖母に言わないようにしていた。祖母はうなぎが嫌いなだけだと最近まで僕は思っていたけれど、本当はそうじゃなくて、祖母が生まれた延命院では虚空蔵さまを祀っていて、うなぎは虚空蔵さまの使者や化身だということで、祖母はうなぎを食べなかったそうだ。そして、その本当のことを知ったのは、祖母が亡くなって妻に聞いたこと。

食べることが好きだったこと。晩酌にはバドワイザーをずっと欠かさなかったし、ご飯を残すこともなかった。王子のイタリアンレストランに行っても、パスタをしっかりと食べていた。そして、あれは確か僕が小学生の時だったと思うけれど、祖母が誰かと食事をして帰ってきて、非常に不満そうにしていたことがあった。いわく、「食事中に、田久保さんは健啖家だねって言われたのよ、失礼しちゃうわ」

当時は健啖家の意味がわからなくて、何が問題なのか腑に落ちなかったけれど、わかる今なら言えます。おばあちゃん、おばあちゃんはやっぱり健啖家でした。でも、それを言われて怒る気持ちも今ならよくわかります。

書き始めるまでは、一緒に暮らしていた時期はもう十年近く前で、思い出も薄れているような気がして、何か書けることはあるだろうかと思っていたけれど、少し時間を使うと、どんどん、ここに書ききれないくらい思い出がよみがえってきた。祖母のいた生活の思い出が、つまり、僕が結婚するまでの、大人になるまでの思い出と重なっていることに気付きました。お父さん、おばあちゃんのことを思い出す機会をくれて、ありがとうございました。

雅子さんの思いで

田久保　栄利子

雅子さんとの出会いは主人であり、雅子さんの大切なお孫さんの周君とお付き合いさせていただいていた、大学生の時です。初めてお寺に伺ったときから笑顔で迎えてくれて、緊張していた気持ちがとても和んだことを思い出します。周君と結婚してからも何度もお食事をご一緒させていただいたり、お寺に伺わせていただいたりして、色々なお話を聞かせていただきました。その中でも私の記憶に残っているお話が三つあります。

一つめは、戦争中、周誉さんが戦地に行かれている時、福性寺を守るのがどんなに大変だったかということ。ご住職が留守でもお葬式は待ってくれない。空襲の時、ご本尊様と周誉さんの（書かれた？勉強に使われていた？）本をリヤカーに積んで逃げたこと。戦争中という自分の命を守ることで精一杯な時代に生きながら、ご住職であられた周誉さん、そしてお檀家の方々ために責務を果たそうと努力されたことに尊敬しました。

次は、女学生時代、学校までの道のり（三里？）を毎日自転車で通ったこと。雪が降っても自転車で行って大変な目に遭った。パンクして途中から歩いたなど、パワフルでチャーミングな雅子さんらしいお話。

最後に、家族を大切にされているというお話。海誉さんは自慢の息子、曜子さんはとても出来たお嫁さん、一緒に住んでいた三人のお孫さんたちは、やっぱり自慢の優しいお孫さん。田久保家は皆さん家族をとても大切にしていて、素晴らしいと思います。雅子さんには「栄利子ちゃんは周ちゃんみたいに素敵な人と結婚できて幸せね」と何度も言われたのを覚えています（笑）。事実その通りですが（笑）、自分が思っていること、大好きということを相手にきちんと伝えることの大切さを教わりました。

この三つのエピソード以外にも雅子さんとのお話は尽きませんが、雅子さんには自分の大事な責務を全うすること、思いを言葉で伝えることの大切さを教えていただき、感謝しています。そして、至らない私のことを温かく田久保家に迎えてくだ

さり、本当にありがとうございました。
娘の小萩とまゆりの名前は周誉さんがお孫さんにつけたかった名前の候補です。名前を呼ぶたびに周誉さんと雅子さんを思い出せて、幸せです。雅子さんから教えていただいたことを小萩とまゆりにもしっかり伝えていこうと思います
大好きです、おばあちゃん。

質問と答え

田久保　小萩

平成二十三年十一月十三日

質問

大きいおばあさんを覚えていますか。

答

はい。

質問

何を覚えていますか。

答

・・・

平成二十四年五月二十七日来訪時突然に

大きいバーバーはねんねしてるの。

大きいバーバーは。

（曾孫）

祖母と私

田久保　良

私が生まれてから平成二十年十月に結婚し実家を出るまでの二十七年間、祖母と私は同じ屋根の下にいて当たり前の存在であった。私は「おばあちゃん子」であった。だからこそ、実家を離れてからも折に触れ帰省した際に、祖母の「お帰りなさい。良ちゃんよく来たね！」という言葉と笑顔を見ると心からほっとすることができた。

祖母が亡くなり一年近くなる。いまだに本当に寂しく残念な限りである。ただし、寂しい寂しいと連呼しても寂しさが募るだけで、祖母も喜ばないだろう。新盆を機に祖母との想い出を書くことで祖母への追悼文としたい。

小学生時代。テレビのチャンネルや新聞紙のスポーツ面の取り合いから始まる周との殴り合いのケンカの仲裁によく入ってくれた。二つ下の弟を容赦なく殴りにかかる（言い過ぎ？でもないか）兄を止めてくれてどうもありがとう。母が夕食の準備中でケンカに気付かなかった時に、二人の間に割って入り、体を張って助けてくれて、とても頼もしかったのを良く覚えている。

そして、早朝の荒川遊園地への30分程度の散歩に一緒に出かけたのも懐かしい思い出である。たわいもない会話をしながらであったが、一日を穏やかに気持ち良くスタートできた。祖母は、毎朝散歩とラジオ体操に参加していたのに、私が高校生になるくらいから週に数日の参加となり、最終的には散歩自体に行くことが無くなり、体力が流石に衰えてきたのかな、なんて思っていた。今思えば、祖母と二人でいる時間は滅多になく、とても貴重な時間であったように思う。

大学生時代。休日に、インプレッサの助手席に祖母を乗せて、一緒にドライブへ出かけた。最初は父の指示であった。しかし、桜の季節に花見に行ったり、父が卒業した医大を通ったりすると、祖母はとても喜んだ。そんな祖母の顔も見ているうちに、私は休日に時間があると、自ら祖母を誘い、毎回の行き先も工夫するようになった。特に印象深かったのは、家政婦の泰楽さんの一周忌に、国立府中インター近くの寺院へ二人でお墓参りをし

た時のことだ。誘った時の大変な喜びようや、お参りの時の長い黙祷に、泰楽さんへの深い愛情を感じた。今でも国立府中インターを通ると、あの時の祖母の横顔を思い出す。この頃から、祖母はドライブの帰りに必ず居眠りをするようになった。私は起こさないように慎重に運転しながら、祖母もいつの間にか歳をとったなあと寂しく感じていた。そして、今まで頼りにしてきた祖母に、今度は自分が頼りにされたいと思うようになった。実際はどこまでできたのかは分からない。しかし、それまでとは違った気持ちで祖母との時間を過ごすことができたように思う。

思い出せば、毎朝本堂にお茶をあげ読経する弛まない信心深さ、足腰が弱くなってからも庫裡周りだけは掃除しようとする几帳面さ、私が年末に祖父の墓所を掃除した時に見せる心からの感謝の言葉と笑顔、様々な祖母の思い出が溢れてくる。どの思い出にも祖母の懐の深さ、周りの人間への深い愛情、細やかな思いやりがそこにはある。よく周囲からも「おばあちゃん子」とからかい半分で言われていた私も、「おばあちゃん子」の名に恥じぬよう、祖母に受けた優しさ、思いやりを周りの人間に還していきたい。

ありがとうおばあちゃん。安らかにお眠りください。合掌。

雅子おばあさま

田久保　和紀

「いらっしゃい。よく来てくれたね。」

雅子おばあさまの家に行くと、いつもリビングの椅子に座り、優しい笑顔とこの言葉で迎えて下さいました。

初めてお会いしたのは、大学三年生の時。

その時も同じ笑顔と同じ言葉で私を迎えて下さいました。緊張していた私は、とても心が和らいだのを今でも覚えています。そしてしばらくすると、階段の下から「梨がむけたわよ」というおばあさまの声がしました。急いで下に降りていくと、「美味しい梨が届いたから」とお盆に載せて渡して下さいました。おばあさまにとっては、いつものように梨をむいただけの事かもしれませんが、私にはその心遣いがどんなおもてなしより嬉しく感じました。

思い起こせば、どんな時でも優しい笑顔のおばあさまがそこにはいます。結婚後初めて伺った時も娘が生まれて伺った時も、暖かい心で迎えて下さいました。そして、その笑顔は私の心を安心させ、明るくして下さいました。今でも戸を開け、リビングの椅子を見ると、おばあさまが「いらっしゃい。よく来てくれたね」と言って下さる気がしてなりません。今はまだとても寂しいですが、おばあさまが安心して微笑んで下さるような家族でいられるよう、頑張って参ります。

写真集

1600年頃梶原塚　最も古い部分
1904年（明治37年）に福性寺に移設されました
（堀船郷土史より）
Stone made Buddhist statues in Kajiwarazuka (old monuments of the Kajiwara family and Masakage Kajiwara (1548-1615), the ruler of the area around Fukushōji temple in those days) erected around 1600 AD. They currently comprise four statues, the Kōmyō Shingon (Light Mantra) pagoda, and the Hōkyōin pagoda. These were transferred to Fukushōji temple in 1904 from their original location close to Sumidagawa (Sumida River) about 5 minute walk away.

1339年（暦應２年）
南北朝時代の板碑（福性寺最古の墓石）梵字が書かれています
秩父緑泥片岩製
The oldest tombstone in Fukushōji temple. This was erected in 1339 AD during the Nanbokuchō period. The stone is chlorite schist from Nagatoro in Chichibu district of Saitama prefecture. Three Sanskrit characters are written on the surface of the stone.

1600年頃梶原塚　光明真言塔
光明真言が書かれています
1904年（明治37年）に福性寺に移設
（堀船郷土史より）
Kōmyō Shingon (Light Mantra) pagoda erected around 1600 AD.

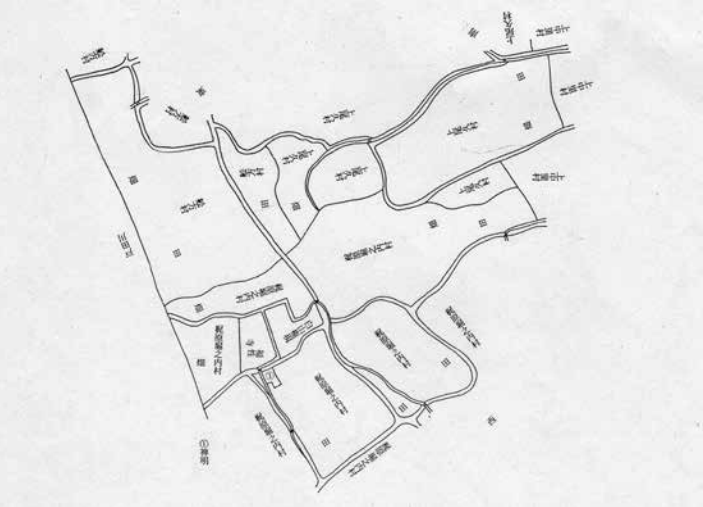
1625年（寛永２年）開眼の
福性寺ご本尊様 大日如来
Dainichinyorai (Mahavairocana in Sanskrit), the main statue of Fukushōji temple. The eye opening ceremony was performed in 1625 AD, when Fukushōji had 20-40 supporting families.

1600年頃梶原塚　宝篋印塔
1831年（天保２年）に再興
1904年（明治37年）に福性寺に移設
（堀船郷土史より）
Hōkyōin pagoda, a style of pagoda containing the Hōkyōin sutra in Sanskrit. It was erected around 1600 AD and rebuilt in 1831, before it was transferred to Fukushōji temple in 1904.

1600年頃梶原塚
蓮の花と梶原塚
（撮影2010年７月30日）
Lotus flowers and the Hōkyōin pagoda, photographed in July, 2010. Lotus flowers bloom at the temple from June to August.

1800年代（江戸時代後期）
右弘法大師尊像（昭和39年に修理）左興教大師尊像
Statues of Kōbō Daishi (right), the founder of Shingon Buddhism, Vajrayana in Japan, and Kōgyō Daishi (left), the founder of Shingi-Shingon Buddhism (New Shingon sect). These statues were made about 150 years ago.

1655年（明暦元年）からの過去帳（右）
江戸時代初期からのお戒名を収録
Records maintaining the family register of deaths (Kakochō or Reikanbo), dating back from 1655.

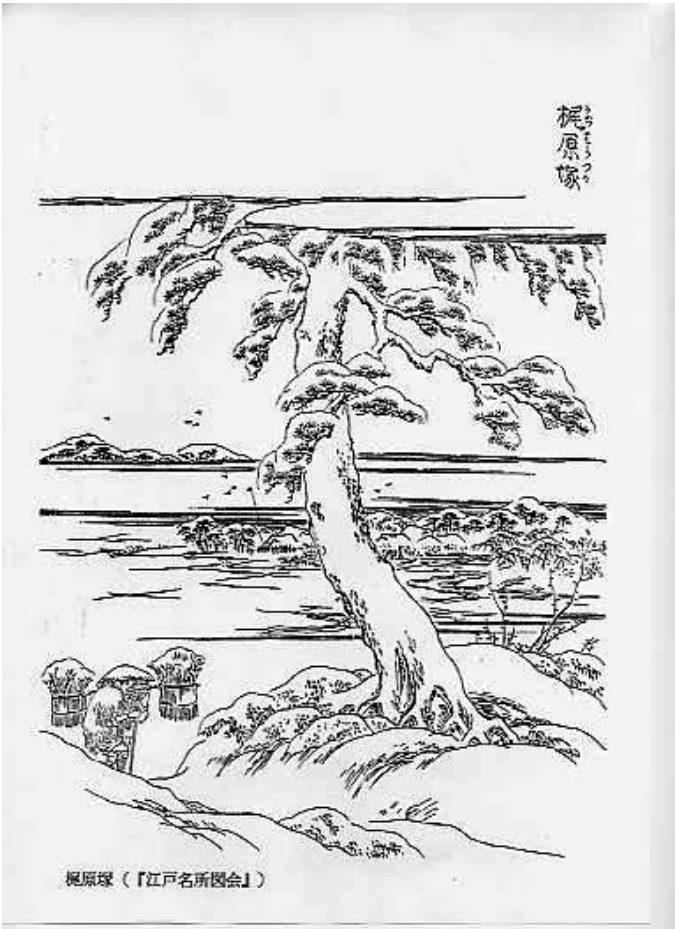


1673から1681年 延宝時代（徳川家綱 綱吉の時代）の梶原堀之内村や船方村の古地図
現在の隅田川（荒川）は戸田川と記載されています
Old map of Kajiwara-Horinouchi village, Funakata village, and neighboring villages during the Enpō era (1673-81) of the Edo period.

1680年（延宝８年）８月18日
領主水野家の聖観音像　水野信定の墓
剣の名手であったと言われています　何がしかの時代小説に出てくるとの話を聞きました
Shō Kan-non zo, Sacred Aryavalokiteśvara. This is the tombstone of Shinjō Mizuno, a vassal (feudal lord) of the Tokugawa Shōgunate, who ruled the area around Fukushōji temple in the Edo period. He died in 1680.

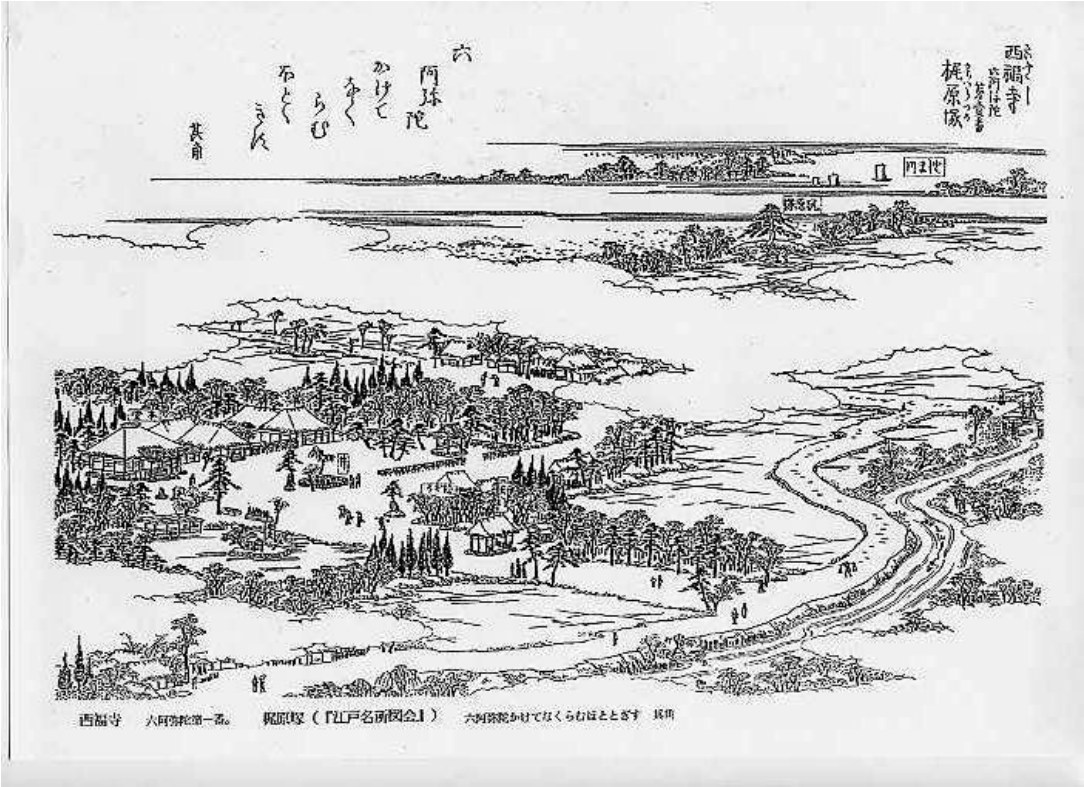
1688年（元禄元年）庚申塔（中央）
庚申待ちの行事が行われていました
Hōkyōin pagoda (right) and Kōshin pagoda (left). The Kōshin-machi ritual (staying awake throughout the night during Kōshin days) was established in the Edo and Meiji periods.

1682年（天和２年）　福性寺の門前 延命地蔵尊　1982年（昭和57年）11月撮影
Statue of Jizōbosatsu, Ksitigarbha Bodhisattva, who looks over children, travelers, and the underworld, at the first gate of Fukushōji temple. The statues were installed in 1682 and photographed in 1982.



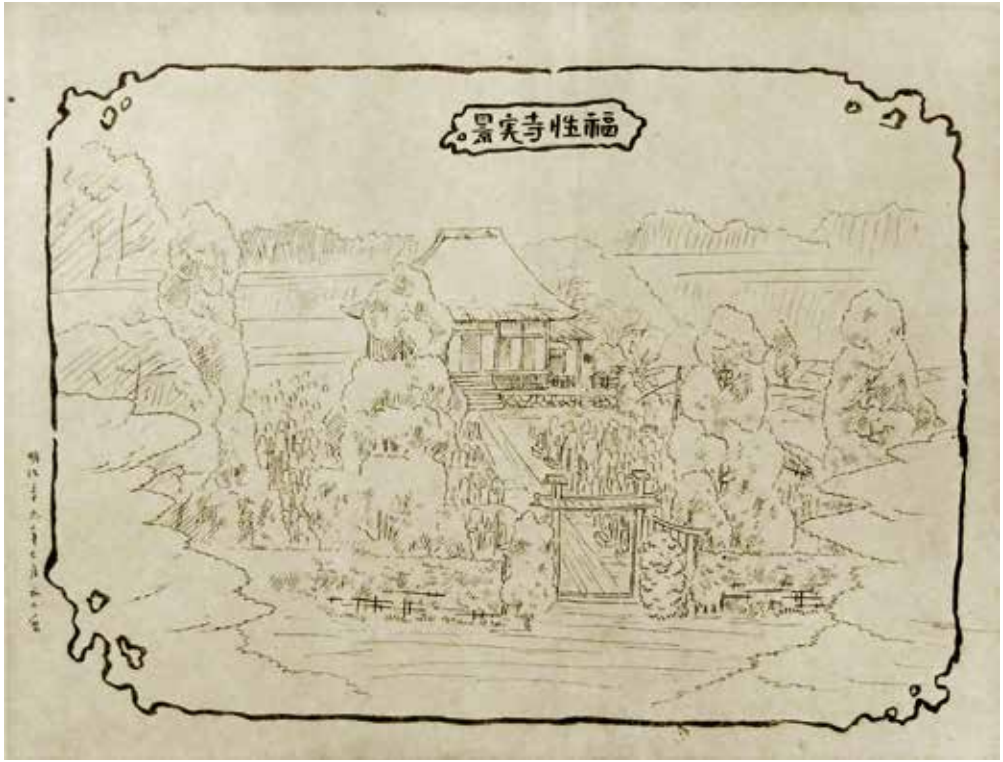
1834～6年（天保５～７年）
江戸名所図会　梶原塚 宝篋印塔など背の高いものは見えません

Kajiwarazuka in the Edomeishozue. Kajiwarazuka was connected with Masakage Kajiwara, who was the 4th generation descendant of Dōkan Ōta. The Edomeishozue (published twice in 1834 and 1836) describes that there were some stone statues and stone steps in the Kyōho period (1716-36), but they were swept into the Sumidagawa (Sumida river) in a flood. By the time the writer visited Kajiwarazuka, only a pine tree had remained. Based on the description carved on Hōkyōintō pagoda of Kajiwarazuka, it was rebuilt in 1825. Therefore, the writer of Edomeishozue must have visited Kajiwarazuka before that time. Edomeishozue was edited by three generations of the Saito family, a Nanushi (town head) from about 1789 to 1836. The tram stop “Kajiwara” was named after Kajiwarazuka, and the old name was Kajiwara Horinouchi village.



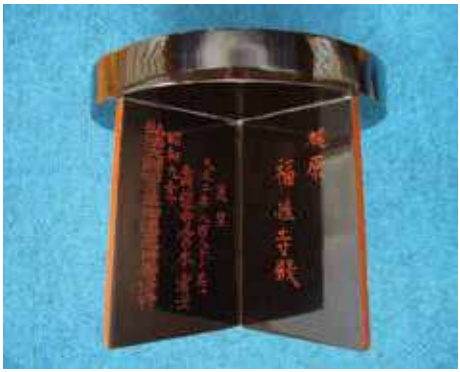
1834～6年（天保５～７年）
江戸名所図会　豊島西福寺と梶原塚
Kajiwarazuka and Saifukuji temple in the Edomeishozue.

1855年(安政2年)12月 武州豊島郡梶原堀之内村絵地図
梶原堀之内村 村役人惣代 名主石井忠三郎と名主の補佐役である組頭石井常七から幕府普請方役所に安政2年に提出された　1 福性寺 2 白山神社 3 梶原塚 4 鎌倉街道 5 神明社　現在、神明社はなくなっています　編者が一部改変追加
Old map around Fukushōji temple (1), dated 1855 of the Ansei era of the Edo period. 2: Hakusanjinja (Hakusan Shintō Shrine), 3: Original location of Kajiwarazuka, 4: Kamakura Kaidō (Kamakura highway), 5: Shinmeisha (Shinmei shrine).



1904年(明治37年)の福性寺の本堂
茅葺き屋根でした　関東大震災前に屋根を瓦葺きにしました
The oldest picture of the main hall of Fukushōji temple in 1872. The roof was thatched. This was a printed picture probably distributed at some opportunity. In a document from 1873, it was unclear whether the hall had been founded.

1900年（明治33年）頃
権田雷斧管長（1847～1934年）筆
の山号扁額
The plaque in the main hall of Fukushōji. Hakuōzan is the honorific mountain name prefixed to the temple's name. It was inscribed by Reverend Raifu Gonda (1847-1934), who transferred Shingon Esoteric Buddhism from Japan back to China in 1924, due to the obsolescence of Esoteric Buddhism in China in those days. There are followers of Shingon Buddhism among people in Hong Kong, Vietnam, Canada, etc., who are originally from China.



1913年（大正２年）
法類滝野川寿徳寺住職
宮木宥弌師作三宝
Sanpō, a small wooden offering stand made in 1913 by the Rev. Yūitsu Miyagi, the previous head priest of Jutokuji temple, a member of our dharma family.

1917年（大正６年）以前
藤本饒誉師
（1917年４月１日入寂）
常用経典
The oldest sutra of Fukushōji temple, originally used by Rev. Jōyo Fujimoto, who died in 1917, which was then succeeded by Rev. Shōryō Katōno, Rev. Shūyo Takubo, and myself in turn.

1920年（大正９年）代
中央周誉師
Rev. Shūyo Takubo and his friends when they were students (around 1920).

1920年（大正９年）代
草津温泉における托鉢　後列左から４人目周誉師
Rev. Shūyo Takubo and his priest colleagues on a path of begging for alms in the Kusatsu hot spring district (around 1920).

1921年（大正10年）以前
大正10年７月８日死亡
上東野照良師（周誉師の叔父）
Rev. Shōryō Katōno, the late head priest of Fukushōji temple, who died in 1921. He was an uncle of Rev. Shūyo Takubo.

1925年（大正14年）頃完成の本堂
1957年（昭和32年）頃撮影
関東大震災後から1962年までの福性寺本堂スクーターのナンバーは45454
The Main Hall of Fukushōji temple built around 1925 after the Great Kanto Earthquake, photographed in 1957.

1926年（大正15年）頃
雅子７歳 父秀雅師 叔母２人 一弟弘章師 二弟稔様と（三郷市彦倉延命院）
Ms. Masako Takubo's family at the Shichi-Go-San festival in 1926. Shichi-Go-San is a rite of passage for children when they are seven, five, and three years old.

1928～1931年（昭和３～６年）頃
３列目右から４番目周誉師（総本山長谷寺）
Teachers and colleagues of Rev. Shūyo Takubo at Hasedera Head Temple of the Buzan school of Shingon Buddhism.

1929年（昭和４年）10月８日　伝法灌頂
２列目右から２人目 周誉師（田端與楽寺）
The Denpōkanjō (one of the most important rituals in Shingon Esoteric Buddhism to transmit the Dharma from a master to a disciple) held at Yorakuji temple in Tabata in 1929, in which Rev. Shūyo Takubo participated as a disciple.

1932～1936年（昭和7～11年）頃
法類の淳誉師（中央）と周誉師（左）巣鴨真性寺にて
Rev. Shūyo Takubo and his colleagues at the garden of Shinshōji temple in 1930.

1931年（昭和６年）３月
大正大学卒業アルバムから
周誉師
A portrait of Rev. Shūyo Takubo, the former head priest of Fukushōji temple, on the occasion of his graduation from Taisho University.

1932～1936年（昭和7～11年）頃
法類の清水淳誉師（左）と星祐聖師（中央）
周誉師（右）
Rev. Junyo Shimizu, and fellow disciples, Rev. Yūsei Hoshi and Rev. Shūyo Takubo.

1932年（昭和７年）以降
大正大学聖語学研究室荻原雲来教授（中央）
周誉師（中央後ろ） 周誉師から左へ4人目 久野芳隆教授
Professor Rev. Unrai Ogiwara (center), the world famous scholar of Sanskrit and members of his department at Taisho University around 1932. The picture includes Rev. Shūyo Takubo (right behind Professor Ogiwara) and Professor Hōryū Kuno (fourth to the left of Rev. Shūyo Takubo).

1935年（昭和10年）頃
女学校の同級生峰岸様姉妹と（中央雅子）
Ms. Masako Takubo (front), formerly Masako Ishii, when at a girls' high school, with her friend, Ms. Kusuko Minegishi (right), and Ms. Minegishi's sister (left).

1935年（昭和10年）　荻原雲来教授
現在でもサンスクリット語学の泰斗として世界的に知られています
Professor Rev. Unrai Ogiwara, PhD (Feb. 2, 1869～Dec. 20, 1937), a professor of Sanskrit at Taisho University. He is still remembered as one of the world's most eminent Sanskrit scholars, and as an excellent mentor. He lectured to many students including Professor Rev. Hōryu Kuno and Rev. Shūyo Takubo.

1937年（昭和12年）頃
「雅子十九才の春」との裏書きあり
Ms. Masako Takubo at the age of 19.

1937年頃（昭和12年頃）
雅子
Ms. Masako Takubo with her hair done in the old Japanese style.

1939年（昭和14年）６月21日
悉曇講伝記念（５列目左周誉師 田端與楽寺）
Siddhaṃ Kōden (esoteric lecture of a script in Siddhaṃ, or old Sanskrit) by the Rev. Zenkyō Hiraoka, Grand Abbot and Master of the Buzan school of Shingon Buddhism, at Yorakuji temple.

1942～3年（昭和17～18年）頃
雅子二弟の浅水稔様
（大東亜戦争中）
巡洋艦「大淀」に勤務
Mr. Minoru Asamizu, a younger brother of Ms. Masako Takubo, during World War II.

1941年（昭和16年）頃
雅子と長女紀子
（福性寺庫裏）
Ms. Masako Takubo and her first daughter.

1940年（昭和15年）まで15年間福性寺の住職を務められました鳥居敬誉猊下です
後に真言宗豊山派管長 総本山長谷寺の化主を務めました
Rev. Keiyo Torii (Grand Abbot and Master of the Buzan school of Shingon Buddhism) who assumed the post of head priest around 1925 and remained so for 15 years until 1940.

Schema of the family photo drawn by Ms. Keiko Yoshikawa, the fourth daughter of Professor Kuno, in March, 2015.

1943年（昭和18年）冬
久野芳隆教授とご家族
四女吉川佳子様から頂きました
Professor Rev. Hōryū Kuno's family in Dec 1943. Professor Kuno was born on Oct 15, 1898 and died on Jan 5, 1944. He was a professor of Sanskrit at Taisho University and Taihoku (Taipei) Imperial University in Taiwan.

1944年（昭和19年）以前
久野芳隆台北帝国大学教授
（1889～1944年）寄贈の仏頭
1941年のインドシナ調査旅行で将来
A statue of the Buddha head donated by Professor Rev. Hōryu Kuno of the Taihoku (Taipei) Imperial University, in 1944. He was the head priest of Ryūkōin temple.

1944年（昭和19年）６月　家族４人で
周誉師旧満州より帰国中　北シ出発（６月15日）前
（福性寺旧客殿前）
The Takubo family in front of the old reception house in 1944.

1945年（昭和20年）3月10日東京大空襲後の航空写真　（米国公文書館所蔵空中写真）
堀船は福性寺と白山神社を除いてほぼ全焼しました
A bird’s eye view of the area around Fukushōji temple just after the Great Tokyo Air Raid by American bombers (Tokyo Daikūshū) on March 10, 1945. Meiji Avenue, Oji station, and Asukayama are recognizable.

1947年（昭和22年）頃
前例左右紀子、千穂子、後列右から弘章師
君子夫人（三郷市彦倉延命院虚空蔵堂横）
Rev. Kōshō Ishii (right) and his family at Enmeiin temple, Misato city, Saitama prefecture.

1948年（昭和23年）４月２日
周誉師伝法灌頂
The Denpōkanjō (Shingon Esoteric Buddhist ritual to transmit the Dharma, pouring the sacred water on the head of a disciple) held for Rev. Shūyo Takubo at Yorakuji temple, after which he was granted the rank of Ajari (Master of Shingon Esoteric Buddhism) in 1948.

1950年（昭和25年）４月　堀船小学校
Horifuna Elementary School in 1950, built right after the Great Tokyo Air Raid by American bombers (Tokyo Daikūshū), March 10, 1945.

1951年（昭和26年）頃
最前列右から２人目鳥居敬誉猊下４人目佐伯堅城師後列右から２人目周誉師
Priests of Shingon Esoteric Buddhism.

1952年６月（昭和27年）
田久保周誉著堀船郷土史　2012年９月復刻版発行
“Horifune Kyōdoshi”, a local history book written by Rev. Shūyo Takubo, published in 1952.

1954年（昭和29年）２月10日
真性寺法類会の皆様（伊東温泉松川館）
Group tour of the Shinshōji Hōruikai, the association of masters and disciples (Dharma family) of Shinshōji temples, at a spa-resort in Izu.

1955～1957年（昭和30～32年）頃　筑波山
後ろ右田口様（お檀家荒井家ご親戚）左雅子
Ms. Masako Takubo and her friends at Tsukubasan (Mt. Tsukuba).

1954年（昭和29年）10月
姉の日光修学旅行に同行、左から船平修先生
海誉 雅子 問矢福雄様ご兄弟（３等車 上野駅）
Horifuna Elementary School’s group trip to Nikkō in 1954.

1956年（昭和31年）５月
高野山参拝旅行
石井英四郎様（左）
Fukushōji temple's group tour to Koyasan Kongōbuji Head Temple in 1956.

1957年（昭和32年）３月
大東亜戦争殉難慰霊碑開眼供養（福性寺本堂前）
堀船地区の全ての戦病没者107柱のお名前があります
Eye Opening Ceremony held at the monument in Horifune, dedicated to soldiers who fell in World War II (Daitōa War, Great East Asia War, Asia Pacific War). The monument bears the names of all the fallen soldiers who were from Horifune.

1957年（昭和32年）３月新調
大東亜戦争の戦病死者全体のお位牌
施主は堀船地区遺族会
The mortuary tablet for soldiers from the Horifune area who fell in World War II. This tablet was donated by the association of the families of the war dead.

1957年（昭和32年）３月
周誉師と宮下石材店主（長野県）小宮家墓所にて
Rev. Shūyo Takubo at the cemetery of the Komiya family in 1957.

1957年（昭和32年）３月
大東亜戦争殉難慰霊碑開眼供養法要周誉師表白文
The prayer written by Rev. Shūyo Takubo at the Eye-opening ceremony for the monument to soldiers from Horifune who fell in World War II.

1957年（昭和32年）　福性寺旅行会高野山参拝旅行
Group tour to Koyasan Kongōbuji temple, founded by Kōbō Daishi in 816, led by members of Fukushōji temple in 1957.

1957年（昭和32年）６月５日　福性寺旅行会（川治温泉）
Group tour to Kawajionsen, Kawaji spa, held by Fukushōji temple in 1957.

1956年（昭和31年）11月
堀船中学校の先生方と（箱根）
Ms. Masako Takubo with her colleague from the Horifune Middle School PTA and teachers of Horifune Middle School.

1959年（昭和34年）元旦
本堂玄関
A neighbourhood child at the entrance to the main building of Fukushōji temple.

1959年（昭和34年）元旦
ブロック塀が完成
Main building of Fukushōji temple built around 1925 after the Great Kantō Earthquake, photographed when the concrete block wall was completed in 1959.

1959年（昭和34年）１月３日
母の伯父吉岡経蔵様82歳
Mr. Keizo Yoshioka, an uncle of Ms. Masako Takubo, photographed in 1959. He was a disabled ex-serviceman of the Russo-Japanese War (1904-5).

1959年（昭和34年）７月10日　堀船小学校神道式プール開き式
背中伊藤吉春校長
Shinto-style opening ceremony for the swimming pool at Horifuna Elementary School in 1959.

1960年（昭和35年）頃
ご法類 左から鳥居敬誉猊下 周誉師 清水教誉猊下 新井泰誉師
An Ajari (Acarya in Sanskrit, also transliterated as Ajariya, “model/example”, i.e. a great master who serves as an example to his disciples and teaches the Dharma), Rev. Kyōyo Shimizu and his disciples at Shinshōji temple Hōruikai, his Dharma family.

1960年（昭和35年）頃　ご法類旅行にて　清水教誉猊下（右）と周誉師
Ajari, a Buddhist master, Rev. Kyōyo Shimizu and his disciple Rev. Shūyo Takubo on a Dharma family tour in 1960. Rev. Kyōyo Shimizu was Grand Abbot and Master in the Buzan school of Shingon Buddhism.

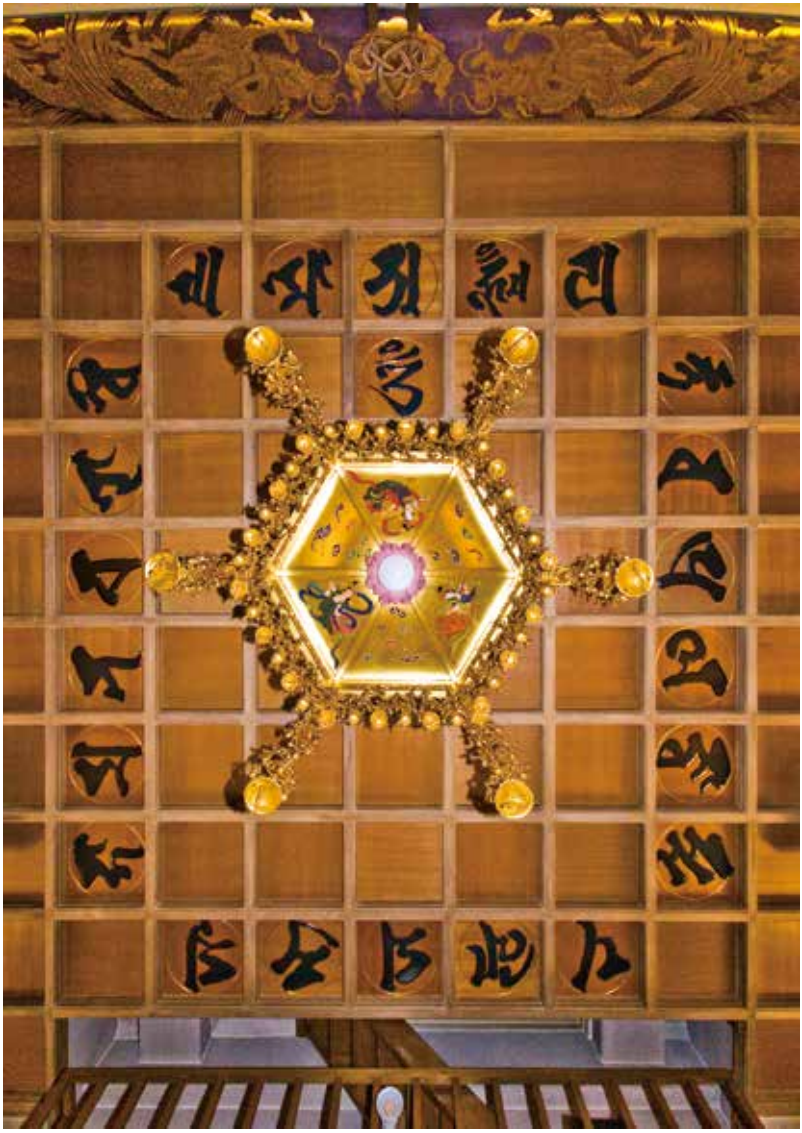
1960年（昭和35年）４月10日
堀船小学校勤務評定問題の時に発刊されました
A booklet by Mr. Masayuki Takagi published in 1960.

1960年（昭和35年）６月27日
PTAの役員と左から高木正之様
松村様　田久保　望月武様（諏訪湖）
Ms. Masako Takubo and members of the PTA of Horifuna Elementary School on a group tour to Suwako (Lake Suwa) in 1960.

1963年（昭和38年）頃
福性寺裏の荒川（隅田川）
Sumidagawa (Sumida River)
in 1963, when it was
considerably polluted.

1963年（昭和38年）８月頃
本堂屋根瓦寄付の立て札
Rev. Shūyo Takubo and Ms. Masako Takubo in
the summer of 1963.

1964年（昭和39年）年
11月３日
本堂落慶
（2009年９月23日
秋分彼岸会撮影）
Fukushōji temple's main
hall on the autumn equinox
holiday, Sept 23, 2009.
This hall was built in 1964.



1964年（昭和39年）年11月３日
本堂格天井 周誉師筆 萩原東邨様刻 梵字光明真言と中央人天蓋
（2013年12月撮影）
Coffered ceiling of Fukushōji temple, and Komyō Shingon, Light Mantra, written by Rev. Shūyo Takubo, carved by Mr. Touson Hagiwara.

1964年（昭和39年）11月３日
本堂落慶法要大導師 鳥居敬誉猊下表白文
The prayer by Rev. Keiyo Torii, Grand Abbot and Master of the Buzan school of Shingon Buddhism, written for the inauguration ceremony for the new main building of Fukushōji temple on Nov 3, 1964.

1964年（昭和39年）頃
庫裏の新築工事現場
（現在の庫裏）
檀徒総代石井英四郎様と
Mr. Eishirō Ishii and Rev. Shūyo Takubo. Mr. Ishii was responsible for building the living quarters of Fukushōji temple in 1964, serving as a representative of the temple's supporting members.

1964（昭和39年）年11月３日　本堂落慶法要
昭和38年８月まではコンクリートがむき出しでした
At the inauguration ceremony for the new main building of Fukushōji temple held on Nov 3, 1964.

1964年（昭和39年）　八角堂
お檀家堀江秀幸様撮影
（平成25年３月）
The main hall of Fukushōji temple photographed by a temple supporter, Mr. Hideyuki Horie, at Higan-e in Spring 2013.

1965年（昭和40年）頃
荒川と林立する煙突
Sumidagawa (Sumida river) in 1965, when there was marked water pollution. Many chimneys can be seen nearby.

1965年（昭和40年）頃
福性寺の六地蔵様と
近所の子供
The previous gate of Fukushōji temple with a neighborhood child. The Six Jizō bosatsu (Ksitigarbhas, one for each of the six realms, believed to rescue beings reborn there) can be seen.

1970年（昭和45年）
霧ヶ峰世界霊廟中観山同願院昭和寺
山崎良純師筆梵文般若心経
最後の国際学生ゼミナールのおりに
海誉が撮影
1991年（平成３年）７月撮影
Hannya Shingyo, Heart Sutra, in Sanskrit at Shōwaji temple, Kirigamine, Nagano prefecture, calligraphed by Rev. Ryōjun Yamazaki under the guidance of Professor Rev. Unrai Ogiwara, and revised by Rev. Shūyo Takubo.

1970年（昭和45年）春彼岸　石井英四郎様寄贈本堂内陣飛天
石井家先祖代々の為（2013年12月撮影）
Two sculptures of Hiten, Buddhist celestial maidens, at the mail hall of Fukushōji temple, donated by Mr. Eishirō Ishii in 1970. The maidens fly elegantly around the Buddha, offering praise by playing musical instruments.

1969年（昭和44年）６月
堀船中学校卒業生父母の会名簿
A booklet listing the membership of Horifuna Middle School PTA.

1972年（昭和47年）４月
周誉師文学博士学位受領祝賀会　左岩本様
Celebration in honor of Rev. Shūyo Takubo earning the degree of Doctor of Literature (a degree in Japan equivalent to a PhD) in April 1972.

1974年（昭和49年）６月
客殿落慶
Guest building of Fukushōji temple completed in 1974. This building was built based on the members' donations and the proceeds from sales of Fukushōji temple's land.

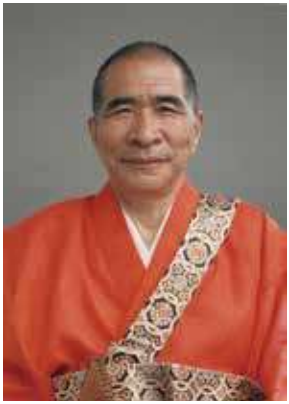
1973年（昭和48年）新調
お檀家全体のお位牌
The mortuary tablet for all the family supporters and members of Fukushōji temple, made in 1973.

1975年（昭和50年）頃
お檀家の高橋稲様（中央）と団参
A temple member, Ms. Ine Takahashi (center), her friend (right), and Ms. Masako Takubo (left) on a group tour to various temples.

1977年（昭和52年）１月
岩槻市慈恩寺
玄奘三蔵法師遺骨塔参拝
左から周誉師　曜子　雅子
The Takubo family, at Jionji temple, Iwatsuki city.

1976年（昭和51年）１月
高橋稲様ご寄付の
御影石橋完成
左に六地蔵様
The former gate of Fukushōji temple in 1976. The small bridge of granite was donated by Ms. Ine Takahashi.

1977年（昭和52年）12月
彦倉延命院庫裡上棟式
左周誉師 読経中石井秀誉師
Jōtōshiki (ridgepole-raising ceremony) for the living quarters at Enmeiin temple, Misato city, in Dec 1977. The head priest was, and still is, Rev. Shūyo Ishii.



1978年（昭和53年）5月15日
周誉師大僧正に昇任
Rev. Shūyo Takubo. He was installed as a priest of the highest order in the Buzan school of Shingon Buddhism on May 15, 1978.

1979年（昭和54年）４月29日　福性寺山門上棟式 総代様世話人様 雅子撮影
Jōtōshiki for the Fukushōji gate held on April 29, 1979. Attendees include Rev. Shūyo Takubo, Shunkō Hoshi, Kaiyo Takubo, three representatives of temple members and supporters (Mr. Yogorō Ishii, Mr. Takeo Komiya, Ms. Kachi Horie), and temple members.

1979年（昭和54年）表梵字裏書周誉和尚
2006年（平成18年）表お戒名お施主様名
雅子筆お塔婆
Stupas, wooden grave plaques, calligraphed by Rev. Shūyo Takubo and Ms. Masako Takubo.

1979年（昭和54年）10月６日
山門扁額
シリーダラニムカ
聖なる真言陀羅尼宗の寺
Plaque over the gate of Fukushōji: “Sacred Temple of Shingon Dharani Buddhism” calligraphed in Sanskrit by Rev. Shūyo Takubo, and engraved by Mr. Touson Hagiwara.

1979年（昭和54年）10月６日
山門完成
Upton教授夫妻と
（2011年８月撮影）
Fukushōji temple’s gate when Professor Melissa Upton visited in 2011. The gate was completed on Oct 6, 1979.

1979年（昭和54年）10月８日
周誉師密葬出棺時ご挨拶　石井與五郎様
Private funeral ceremony for Rev. Shūyo Takubo held by Rev. Kaiyo Takubo and his family in 1979.

1980年（昭和55年）
田久保周誉大僧正業績集（一周忌）
Compiled academic works of Rev. Shūyo Takubo, published in 1980.

1980年（昭和55年）8月1日　水屋の真言宗式地鎮法（鎮宅不動法）導師の星俊光師と工事関係者
左から2人目野沢工務店野沢君造様
右田久保曜子
Jichin-sai of Mizuya, a hut for worshippers. Jichin-sai refers to a Shinto or Buddhist ground-breaking ceremony. The Buddhist one is a prayer to the Buddhas and all the regional spirits, from whom the permission to build on the site is granted. This ceremony was held by Rev. Shunkou Hoshi on Aug 1, 1980.

1979年（昭和54年）11月23日
周誉師本葬儀
Formal funeral ceremony for Rev. Shūyo Takubo held by Fukushōji temple and temple members in 1979.

1981年（昭和56年）２月12日　白バラ会
伊豆熱川温泉にて
前列左から伊藤様（お檀家）
金子様 白石様（お檀家）
水野様 小林様
後列左から栄様 雅子
向山様 戸田様
塩野谷様（お檀家） 泰楽様
Shirobarakai women's club tour to Izu-Atagawaonsen (Izu-Atagawa spa) in 1981.

山門落慶の奉告法要（ご本尊様に謹んでお知らせする法要）後の記念写真
総代世話人様方
住職とその家族
After the ceremony to report the completion of the main gate to the main statue of Fukushōji temple, in front of the main hall on April, 1981.

1981年（昭和56年）5月2日
福性寺山門落慶
住職晋山披露パーティー
（東京グランドホテル）
堀船3丁目町会の皆様
At the party to commemorate the completion of the main gate and inauguration of the new head priest, Rev. Kaiyo Takubo, of Fukushōji temple, at Tokyo Grand Hotel on May 2, 1981.

1982年（昭和57年）４月11日　福性寺長谷寺参拝旅行
Group tour to Hasedara, the head temple, held by Fukushōji temple supporters and members in 1982.
At that time, the head priest of Fukushōji temple was Rev. Kaiyo Takubo.

1983年（昭和58年）11月５日　弘法大師千百五十年ご遠忌（巣鴨真性寺）
After the ceremony to commemorate the 1050th anniversary of Kōbō Daishi's Nyūjō (entering into his eternal meditation) held at Shinshōji temple in 1983. A great service to pay tribute to Nyūjō of the founder of Shingon Buddhism is performed every 50 years.

1984年（昭和59年）４月
麦の会会員名簿
A booklet containing a membership list of the Muginokai, a local women's club in Horifune.

1983年（昭和58年）１月
海誉長男圭誉次男周と（客殿前）
Ms. Masako Takubo and her two grandsons, Keiyo and Shū.

1983年（昭和58年）
11月15日
真言宗豊山派香港ご遠忌法要の
後ボロブドールにて
（11月11日～17日）
Ms. Masako Takubo in
Borobudur Temple Compound in
1983.

1985年（昭和60年）４月13日
延命院落慶式
雅子 左から周 良 圭誉（圭司）
Ms. Masako Takubo and her three
grandsons at the inauguration ceremony
of Enmeiin temple, Misato city, Saitama
prefecture, on April 13, 1985.

1985年（昭和60年）
８月29日～９月８日
ヨーロッパ旅行ベニス
伊澤様　高野様と
Ms. Masako Takubo and her friends in Venice in 1985.

元旦読経会における般若心経の音読
元旦読経会は1985年（昭和60年）に始まり総代石井與五郎様の発案でした
2016年（平成28年）元旦撮影

New Year’s Day service inaugurated by Fukushōji temple in 1985. At the service, all the participants chant the Hannya Shingyo (Heart Sutra) and Kōmyō Shingon (Light Mantra), as well as a western musical Buddhist hymn, Ochikai (“I swear”), and offer incense. The New Year’s Day service begins at 10 AM. This photo was taken on Jan 1, 2016.

1984年（昭和59年）５月１日　福性寺参拝旅行 高野山にて

Pilgrimage led by Fukushōji temple on May 1, 1984, to commemorate the 1050th anniversary of Kōbō Daishi's Nyūjō (entering into his eternal meditation) at Kōyasan Kongōbuji temple.

1989年（昭和64年）7月新盆供養法要　この年から新盆供養法要が始まりました
お盆飾りを説明しています　2015年（平成27年）7月12日撮影

Memorial service called Niibon (New Obon), also known as Hatsubon, the first Obon following the death of a family member in the past year, held on the first Sunday in July at Fukushōji temple. Obon is formally Urabon-e, in that period, ancestral spirits return to their home in this world. At Obon, a household starts to welcome all the ancestral spirits on July 13th and see them off on July 15th. Photographed on June 1, 2014.

1988年（昭和63年）６月14日　興教寺常明師と海誉
福性寺お檀家からお預かりした興教寺涅槃仏寄付金を住職常明師に手渡す（約40万円）
Rev. Kaiyo Takubo at Xingjiao Temple in Xi'an city, China, in 1988, with the head priest. Rev. Takubo offers Dana (a donation) from Fukushōji Temple members to the head priest of Xingjiao Temple.

1989年（平成元年）10月14日　福性寺西福寺清光寺合同中国参拝旅行
西安市 興教寺 玄奘三蔵法師遺骨塔
右から３人目新井豊誉師　右から８人目小松原俊誉師
Group tour to Chinese temples organized by three temples, Fukushōji, Saifukuji, and Seikōji, in July 1989. Photo taken at the pagoda enshrining the remains of Rev. Xuanzang (602-664) in Xingjiao Temple.

1991年（平成３年）
お檀家の福田きよ子様と
（最上霊場巡り）
Ms. Masako Takubo and her friend. Ms. Kiyoko Fukuda and Ms. Masako Takubo make a pilgrimage to all the 33 temples in the Mogami district.

1991年（平成３年）
納骨堂白宝殿完成
Hakuhōden, a building to house the ashes of the dead, at Fukushōji temple, built in 1991.

1991年（平成３年）５月25日　母の友人
左から小幡様 滝村様 川村様 戸田様
Ms. Masako Takubo and her friends.

1991年（平成３年）　仏教徒海外奨学基金設立
A poster for the Buddhist Overseas Scholarship founded in 1991, managed by 8 temples and interested lay persons. The scholarship secretary is now the head priest of Fukushōji temple.

1991年（平成３年）６月
お檀家関町喜春様寄贈肉筆胎蔵界大日如来（お父様の13回忌菩提の為）
Original drawing of Dainichinyorai (Mahavairocana of the Matrix Mandala) donated by a temple member, Mr. Yoshiharu Sekimachi, in 1991.

1991年（平成３年）10月６日
涅槃仏建立
周誉師十三回忌に建立
A statue depicting Nehanzō, the Buddha in Nirvana, Fukushōji temple. The eye opening ceremony was performed in 1991. This statue was donated by priests and interested members of the temple to commemorate the 13th memorial service of Rev. Shūyo Takubo (1906-79), the late head priest (1933-79).

1996年（平成８年）
河津桜見物旅行
Ms. Masako Takubo under a cherry tree in Kawazu, Shizuoka.

1994年（平成６年）４月
パスポート
Ms. Masako Takubo’s passport.

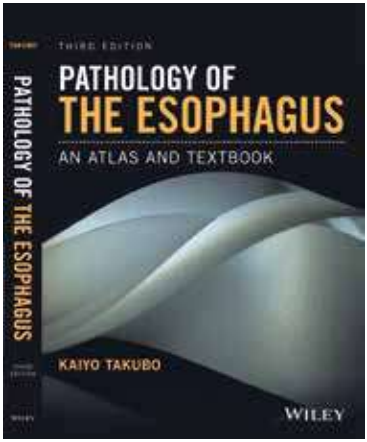
1995年（平成７年）頃
親友の左から泰楽様 塩野谷様（お檀家） 伊藤様（お檀家） 戸田様と
Ms. Masako Takubo, Fukushōji temple members, and her friends.

1996年（平成８年）５月24日
済南市興国寺
Tour to temples in China in 1996. Photo taken at
Jinan city (Sainan-shi).

1998年（平成10年）２月９日
香港旅行
お檀家（間矢様）や町会の皆様と
Tour to Hong Kong with temple members and their friends in 1998.

2000年（平成12年）頃
海老原様 小幡様と
Beside Nehanzō, a statue depicting the Buddha in a state of nirvana, Ms. Masako Takubo, her friend, Ms. Chiyoko Obata, and a temple member Ms. Aiko Ebihara in 2000.

2000年（平成12年）代
こだま旅行社主催の旅行で
Ms. Masako Takubo dancing at a party.



2000年（平成12年）12月
田久保海誉著　食道の病理学に関する教科書
第１版出版　第３版表紙（2017年）
Cover of *Pathology of the Esophagus*, 3rd ed. by Kaiyo Takubo, MD, PhD, published in 2017 by Wiley Japan, Tokyo. The first edition was published in 2000. The 2nd edition was published 2007 by Springer in Tokyo, Berlin, Heidelberg, and New York. The present publication was partly supported by Fukushōji temple.

2001年（平成13年）　福性寺主催中国団体参拝旅行（碑林）
Group tour to temples in China led by Fukushōji temple in 2001. At the Forest of Stone Steles Museum.

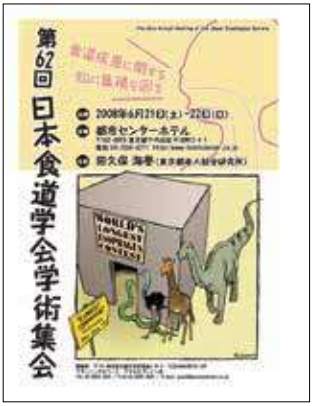
2003年（平成15年）５月
福性寺主催韓国団体参拝旅行
宮本宥慶師夫人と
At lunch on a group tour to temples in South Korea led by Fukushōji temple in 2003.

2003年（平成15年）年
５月10日
韓国の花祭り屋根瓦寄付裏書き
Donation for roof tiles to a temple in Korea by Ms. Masako Takubo on May 10, 2003. Donors are supposed to write their names, addresses, and/or supplication sentences on the backside of tiles.

2004年（平成16年）1月12日　真言宗式結婚式
式中に戒師は戒（仏教徒が守るべき自分を律する道徳規範）を授けます
Shingon Buddhist wedding ceremony at Fukushōji temple on Jan 12, 2004. The precepts master delivered Buddhist precepts to the couple at the ceremony.

2005年（平成17年）4月
麦の会会員名簿表紙
A booklet containing a membership list of the Muginokai, a regional women's club, in 2005.

2008年（平成20年）6月
第62回日本食道学会学術総会（田久保海誉会長）ポスター
Poster for the 62nd Annual Meeting of the Japan Esophageal Society held on July 21-22, 2008. At that time, the president of the society and chairman of the annual meeting was Kaiyo Takubo, MD, PhD. The participants comprised more than 1000 members. The annual meeting was partly supported by Fukushōji temple.



2008年（平成20年）６月23日
外国人医学者と
Five foreign doctors visited Fukushōji temple on June 23rd after the 62nd annual meeting of the Japan Esophageal Society held by Kaiyo Takubo, MD, PhD, on June 21-22, 2008.

2008年（平成20年）４月27日　雅子90歳誕生日会（池袋聘珍楼）
The birthday party for Ms. Masako Takubo to celebrate her 90th year of life, held on April 27, 2008.

2008年（平成20年）頃　麦の会解散式の前
Muginokai women's club party held in 2008, when there were about 100 members.

2009年（平成21年）
仏教徒海外奨学基金（1991年設立）
奨学生からお礼としての絵
A picture (2009) drawn by a Sri Lankan pupil, expressing his gratitude to the Buddhist Overseas Scholarship (1991) project, managed by 8 temples and interested lay persons.

2009年（平成21年）12月20日　福性寺忘年会（上野蓬莱閣）
Bōnenkai (end of year party) of Fukushōji temple at Hōraikaku, a Chinese restaurant, in Ueno, on December 20, 2009.

2010年（平成22年）９月12日
10時23分
雅子最後の日光旅行　曜子と（湯滝前）
Ms. Masako Takubo and Ms. Yoko Takubo gazing at the Yudaki waterfall at Nikkō on September 12, 2010.

2011年（平成23年）３月11日金曜日
東日本大震災で倒れた石碑の修理
A pillar at Fukushōji temple that fell down due to the Great East Japan Earthquake in 2011.

2011年（平成23年）６月
お檀家関町喜春様寄贈肉筆虚空蔵菩薩
Original drawing of Kokuzōbosatsu, Akasagarbha Bodhisattva. The scroll was donated by Mr. Yoshiharu Sekimachi in 2011.

2011年（平成23年）４月23日
雅子最後の施餓鬼会
Ms. Masako Takubo at the Segakie, a service for the benefit of suffering spirits, the largest ceremony at Fukushōji temple, held on April 23, 2011. It was the last time Ms. Masako Takubo could participate in this ceremony. Segakie is performed every April 23rd (previously July 23rd) and regularly the participants are about 100 members and 20 priests.

2011年（平成23年）10月13日　雅子告別式
Private funeral ceremony for Ms. Masako Takubo held on Nov 13, 2011.

2011年（平成23年）
10月13日
雅子告別式
医療者 地域向け葬儀
The six Buddhist priests reciting sutras at the main hall of Fukushōji temple. They were all very close to Ms. Masako Takubo when she was alive.

2011年（平成23年）10月22日
周誉和尚33回忌並びに法類先師供養　鳥居慎誉猊下
Rev. Shinyo Torii, Grand Abbot and Master of the Buzan school of Shingon Buddhism, at the 33rd year memorial service for Rev. Shūyo Takubo in 2011. About 140 participants attended the ceremony and dinner.

2011年（平成23年）
10月22日
周誉和尚33回忌清宴
並びに檀信徒懇親会
芹洋子氏
（椿山荘）
Dinner after the 33rd year memorial service for Rev. Shūyo Takubo. A famous singer, Ms. Yoko Seri, sang her popular songs.

2011年(平成23年)11月26日　雅子本葬儀

Many people waiting to offer incense at the formal funeral service and the 49th day memorial service for Ms. Masako Takubo on Nov 26, 2011.

2011年(平成23年)11月26日　本葬儀 四十九日忌

Main hall at the formal funeral ceremony and the 49th day memorial service for Ms. Masako Takubo.

2012年（平成24年）４月９日
法類の皆様と福性寺旧ご本寺恵命寺訪問
Rev. Shinyo Torii, Grand Abbot and Master of the Buzan school of Shingon Buddhism, and his disciples including Rev. Kaiyo Takubo visiting Emyōji temple in 2012.

2011年（平成23年）４月１日
鳥居慎誉猊下講演録
真性寺法類会の歴史がわかります
The texts of lectures delivered by Rev. Shinyo Torii (Grand Abbot and Master of the Buzan school of Shingon Buddhism) on the history of Shinshōji Hōruikai, Dharma family of Shinshōji temple, published in 2011.

2012年（平成24年）
9月24日
雅子納骨式
Ceremony for the interment of Ms Masako Takubo's ashes to the grave of the Takubo family.

2012年（平成24年）12月
スリランカの子供から
仏教徒海外奨学基金（1991年設立）のお礼として
A picture drawn by a Sri Lankan pupil to express her gratitude to the Buddhist Overseas Scholarship project, in 2012.

2012年（平成24年）５月　福性寺本堂内陣
前机 経机 灯篭 常夜灯など百年以上前に建立された仏具や什器が多いです
Interior of the main hall of Fukushōji temple. Many Buddhist artifacts date back more than 100 years.

2013年（平成25年）７月23日
蓮の花
マコト造園様が手入れをしています
Lotus flowers during the summer at Fukushōji temple. Makoto Zōen Ltd. takes care of the temple garden, including the lotus pots. Many people enjoy the lotus flowers.

2013年（平成25年）10月12日
第２回堀船郷土史を語る
講演会ポスター
田村重光様作成
Poster for a Conference on the local history of Horifune district held at Fukushōji temple in 2013. The head of the conference was Mr. Takeshi Horie. The poster was designed by Mr. Shigemitsu Tamura.

2013年（平成25年）10月12日　第２回堀船郷土史を語る講演会
会長堀江毅様　司会大室洋昭様
Conference on the local history of Horifune district in 2013 held at Fukushōji temple.

2014年（平成26年）６月９日　雲中菩薩
Statues of Unchū Kuyō Bosatsu, Bodhisattva, in Fukushōji temple main hall donated by an anonymous member. This Bodhisattva praises the Buddha and the Dharma by playing musical instruments and dancing elegantly in clouds. These statues share happiness with temple members.

2015年（平成27年）1月26日
第137回東京都健康長寿医療センター研究所老年学公開講座
The current head priest, Rev. Kaiyo Takubo, is also a medical researcher, specializing in telomeres and physiological aging. This picture shows him at an open seminar held by the Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology on Jan 26, 2015.

2015年（平成27年）4月 花祭り（釈尊降誕会）
The Flower Festival, a service celebrating the Buddha's Birthday. Although the Buddha's birth is celebrated on April 8th at many temples in Japan, Fukushōji temple cerebrates it on the first Sunday of April.

2015年（平成27年）5月6日
田久保海誉引退記念国際シンポジウム東京食道研究デー2015
国際シンポジウム参加の座長 演者 プログラム委員の集合写真です
内外から130名の参加者で行われました　この後京都奈良への遠足が行われました
Chairpersons, speakers, and program committee members of the International Symposium: Tokyo Esophageal Research Day 2015, to Commemorate the Retirement of Dr. Kaiyo Takubo on May 6 (Saturday), 2015, at Toshi Center Hotel, Tokyo. The present head priest is a pathologist also specializing in the esophagus.

2015年（平成27年）11月
休息スペース
寺の整備の一環として休息スペースを作りました
工事費はお檀家の安原義明様 宝勤明道居士霊位と伊藤リヨ様 永慈妙清信女霊位からのご寄付を主に当てました
小杉石材店（03-224-1483）が施行しました
Resting space. This open space was created using donations mainly from the late Mr. Yoshiaki Yasuhara and the late Ms. Riyo Ito, and was constructed by Kosugi Sekizaiten. In the near future, two more open resting spaces (one without a roof and one arbor with a roof) will be built in the graveyard.

毎年4月23日　大施餓鬼会　施餓鬼会は福性寺の最大の行事です
通常100人以上のお檀家と20人の僧侶の出席があります
左：施餓鬼会健康長寿講演会2016年（平成28年度）　右：施餓鬼会法要2015年（平成27年度）

Segaki-e, a service for the benefit of suffering spirits, the largest ceremony at Fukushōji temple. Since 2010, the service has been held on April 23rd (previously it was held on July 23rd), and annually draws more than 100 members and 20 priests as participants. Segaki-e of Fukushōji temple consists of lectures on human health and/or Buddhism by a medical doctor or a priest (left), followed by the Buddhist service (right). In the latter part of the service, the priests chant Buddhist hymns, Shichibongo, and recite the Rishukyō sutra. All participants recite the Hannya Shingyo (Heart Sutra) and Kōmyō Shingon (Light Mantra). They also recite a western musical Buddhist hymn, Ochikai (I swear), and offer incense. Left: Health lecture for the members by a medical doctor. Right: Buddhist service. Photographed on April 23, 2015.

2016年（平成28年）春の福性寺
A bird's eye view of the renewed Fukushōji temple on March 29, 2016.

大東亜戦争・太平洋戦争戦没者追悼会
10年ごとの秋分彼岸会には戦没者の追悼会を行っています　東京大衆歌謡楽団が昭和歌謡を歌いました
Memorial service for the soldiers who fell in World War II (Daitōa War, Great East Asia War, Asia Pacific War) on Sept. 24, 2016. A popular music band (Tokyo Taishūkayō Gakudan) sang songs that had been popular in the Shōwa period (World War II era).

本堂左横休息所
スペースは堀江傳三郎様みつ様のご寄付によります
工事費は福田きよ子様などのご寄付によりました
Resting space. This open space was created by donations from the late Mr. Denzaburō Horie, the late Ms. Mitsu Horie, and Ms. Kiyoko Fukuda and was constructed by Kosugi Sekizaiten. In the near future, one more resting space (arbor with a roof) will be built in the graveyard.

総代様の集合写真　平成29年2月7日撮影　福性寺檀信徒総代会
左から大郷道敏様 石井與一様 堀江恒太郎様 堀江裕子様
Four representatives of the temple's supporting members on Feb. 7, 2017.

初版あとがき

福性寺の歴史、父母の時代から現在までの福性寺と母の思いで集を作りたいとの私の希望により、本当にたくさんの皆様から文章や写真が集まりました。文章をお寄せ頂きました皆様に心からお礼を申し上げます。執筆頂きました皆様のご多幸をお祈り致します。

あとがきの附図のカラー写真は、空から見た福性寺です。少し古い写真ですが美しいです。モノクロ写真の古い本堂は昭和三十七年までありました。カラー写真の中では、福性寺の東側にキリンビールがあり、堀船周回ロードはまだありません。現在、お檀家の皆様のご協力により、墓地の通路が広く、庭木のスペースも増えて、さらに木が茂り以前より美しくなっています。

本書の写真の電子データ化は藤田喜弘様、泉山七生貴様、仲村賢一様、相田順子様、岸律子様にお世話になりました。また資料に関しましては、真性寺法類会の皆様、福性寺の総代様、お檀家の皆様にお世話になりました。北区立堀船中学校校長坂本純一先生、北区立堀船小学校校長川島瑞穂先生や両校の先生方にもご尽力頂きました。

また、連合町会の堀江毅様、大室洋昭様、田村重光様、伊澤栄子様にもお世話になりました。堀船郷土史復刻版に次いで印刷は社会福祉法人東京コロニーにお世話になりました。

心から感謝致します。

田久保海誉

1959年（昭和34年）頃　旧本堂と新設したブロック塀
山門の左に六地蔵様　二本の杉の木と今もある銀杏の木が見えます
The former main hall of Fukushōji temple built in 1925, photographed in 1959.
The Six Ksitigarbhas (one for each of the six realms) can be seen.

1998年（平成10年）頃の福性寺
A bird's eye view of the renewed Fukushōji temple in 1998.

Photograph album

Rev. Keiyo Takubo and Rev. Kenjō Hayashi. Japanese Buddhist priests are generally married, in contrast to only a minority of priests in South Korea or Tibet. This state of affairs evolved gradually and naturally in Japan.

My father, Rev. Shūyo Takubo, Doctor of Literature, PhD (1906-1979), is the former head priest of this temple. He was born in Narashino city, Chiba, as a farmer's son, and became a priest at the age of 14 in 1920. He studied Sanskrit, calligraphy of the Siddhaṃ, and Indian philosophy at university and in a postgraduate course, and published 8 books in his lifetime. He taught Siddhaṃ and Sanskrit at many schools and colleges. Before my father came to the temple, the previous head priests of Fukushōji since the Taishō period were the Rev. Shōryō Katōno and the Rev. Keiyo Torii.

After I pass from this world, my son, Rev. Keiyo Takubo, MD, PhD, a Buddhist priest and medical doctor, will succeed my position.

Head priest of Fukushōji temple
Rev. Kaiyo Takubo, MD, PhD

Fukushōji temple
tel +81-3-3911-7701
fax +81-3-3911-7702
email fukushoji.horifune@gmail.com
http://fukushoji-horifune.net/
3-10-16, Horifune, Kita-ku, Tokyo 114-0004, Japan

© Fukushōji temple 2017

Printed in Tokyo

Shūyo Takubo's inauguration of Daisōjō (the highest position of the priesthood).

Supporting members and followers of the temple

The Fukushōji temple has a few hundred families as its supporting members. Their gravestones are always located within the cemetery. The oldest family represented is now in its 18th generation. Each family usually visits the temple more than 4 times a year: New Year's Day, Ohigan-e (the spring and autumn equinoxes), and the Obon service (Urabon-e, July 13-15, in Tokyo). They also visit the temple on their family members' annual memorial days (Shōtsuki-meinichi) and their monthly memorial days (Tsuki-meinichi).

All funeral ceremonies (tsuya and sōgi) for the members are always performed by the priests of Fukushōji temple. At those services and on the anniversaries of their death, the priests, members, and followers always chant Hannya Shingyo, the Heart Sutra.

People who do not have gravestones within the temple cemetery but participate in the temple services, ceremonies, and events are categorized as followers (shinto).

Priests of Fukushōji temple

Priests didn't always live at Fukushōji temple in the Edo period (1603-1868), and no Buddhist priest died in the Meiji period (1868-1912). So, there are no tombstones of priests at Fukushōji temple founded in the Meiji period, but there are several tombstones dating from the Edo period. The Rev. Shōryō Katōno was the first head priest of Fukushōji after the Meiji Restoration (1868). He took his post around 1917 in the Taishō period (1912-1926), and died in 1921. The Rev. Keiyo Torii (Grand Abbot and Master of the Buzan school of Shingon Buddhism) because the head priest around 1925 and stayed for 15 years until 1940, after which the post was assumed by the Rev. Shūyo Takubo.

There are now three Buddhist priests at Fukushōji: Rev. Kaiyo Takubo,

The main statue

The eye opening ceremony to consecrate the present main statue, Dainichi Nyorai (Mahavairocana), of Fukushōji temple was performed in 1625, by infusing the spirit into it. Dainichi Nyorai embodies the inclusiveness of the universe based on its maternal compassion. Different from Gautama Buddha, a historical figure, Dainichi Nyorai is Dharmakāya, a metaphysical Buddha whose body is made from the Dharma itself. Vajrayana (Esoteric) Buddhist cosmology is filled with Buddhas and Bodhisattvas: Amida Nyorai (Amitabha Tathagata), Yakushi Nyorai (Bhaisajyaguru), Kannon Bosatsu (Avalokiteśvara), Jizō Bosatsu (Ksitigarbha Bodhisattva), and so on. These Buddhas and Bodhisattvas are transformed from Dainichi Nyorai like many children with different characteristics born from the same Mother, and yet supporting one another because each one is succeeding the Mother's DNA. In short, the statue of Dainichi Nyrai embodies Shingon Esoteric Buddhism.

Many temples in Tokyo had historic varieties of Buddhist statues similar to Fukushōji temple's, but most of them, especially in the old eastern part of Tokyo, were destroyed or burned down during the anti-Buddhist movement, Haibutsukishaku, in the beginning of the Meiji period (1868-1871), the Great Kanto Earthquake of 1923 (Kanto Daishinsai, Taisho period), and the Great Tokyo Air Raid by American bombers on March 10, 1945. The main statue of Fukushōji temple is one of the oldest in the eastern part of Tokyo. Most of the other Buddhist artifacts here were made 100 years ago or more. For example, books (Kakochō) that register individual deaths from the temple's supporting families (danka in Japanese) date back to 1655.

Buildings of Fukushōji temple

The main hall, called the Hondō, is a building to enshrine the Buddhist statues and to offer prayers and conduct services. The current main hall is a steel-framed reinforced concrete structure built in 1964. The construction of the main hall, reception hall, and main gate of the temple was funded by contributions from members (danka) and followers (shinto).

The main gate was a commemorative gift from all the members at Rev.

Kōbō Daishi

Kōbō Daishi (774-835 CE), also known as the Reverend Kūkai or Odaishi-sama, was the founder of our Buddhist sect in Japan, Shingon Esoteric Buddhism. He studied Esoteric Buddhism in China (during the Tang period) for about 2 years from 804 to 806, and then introduced it to Japan in the form of Shingon Esoteric Buddhism. The main doctrines of Shingon Buddhism are Sokushin Jōbutsu (becoming a Buddha in one's present life) and Mitsugonkokudo (realizing the secretly adorned ideal world of Dainichi Nyorai or Mahāvairocana, the universal Buddha whose body is made from the Dharma itself).

Kōbō Daishi founded many temples in Japan, including Kōyasan Kongōbuji in Wakayama and Tōji in Kyoto, which still remain to this day.

It is also now well known among the Japanese that Kōbō Daishi was an excellent calligrapher of Japanese letters and Chinese characters, an engineer who made reservoirs, wells and so on, and a founder of the first private school for the common people in Japan, Shugeishuchiin. His letter to Dengyo Daishi or Rev. Saichō, normally called "Fūshinjō", is now designated as a national treasure in Japan, and has been used as a copybook by many calligraphers and students.

Fukushōji temple

Fukushōji temple belongs to the Buzan school of Shingon Buddhism, normally called Buzan-ha. The head temple of Fukushōji is now Buzan Hasedara temple in Sakurai city, Nara prefecture. The Hasedera temple is known as the flower temple due to many beautiful flowers blooming all seasons, e.g. cherry, peony, and so on.

The exact date of the foundation of the present temple, Fukushōji, is unknown. However, there is a small stupa, or a flat and green symbolic gravestone (Itabi), that was erected in 1339, in the Nanbokuchō period. Therefore, it could be said that the present temple was founded more than 700 years ago.

Invitation to Fukushōji Temple

History of Fukushōji Temple in Japanese

The first and second editions of the History of Fukushōji Temple in Japanese were published in 2013 and 2014, respectively. As some non-Japanese individuals and friends may wish to read this description in English, I have added a short English explanation to the book, *Invitation to Fukushōji Temple*, along with captions for the photographs in English.

The English manuscript was read through and revised by Rev. Taijo Imanaka (Head priest, Seattle Koyasan, WA, USA) and Jessica Ludescher Imanaka, PhD (Associate Professor, Departments of Management and Philosophy, Seattle University, WA, USA).

Before Kōbō Daishi

Siddhārtha Gautama, also known as Shakyamuni, Gautama Buddha, or Oshaka-sama was born as a prince of one of the kingdoms in Lumbini, India, now in Nepal, about 2500 years ago (500 BCE). At the age of 29, he renounced the world and left his palace, although he had a wife and son. He attained enlightenment under a bodhi tree (Bo) in Bodh Gaya at the age of 35 and delivered his first dharma talk in Sarnath, known as Rokuyaon in Japanese (meaning "deer park"). It means he first taught the *Dharma* in Sarnath. For 45 years thereafter, the Buddha traveled and preached throughout the Indo-Gangetic and North Indian River Plains. He entered Nirvana under sal trees in Kushinagara at the age of 80. Many Buddhist scriptures (sutras) were written thereafter and Buddhism was established as a religion step by step. Buddhism came to China about 2000 years ago (67 CE).

Mahayana (The Great Vehicle), one of the two major traditions of Buddhism that was propagated throughout China and northern Asia, cultivated the lineages of Esoteric Buddhism, also known as Vajrayana. Mahayana Buddhism was officially introduced to Japan from the Korean peninsula in 538 CE.

Invitation to Fukushōji Temple

Head priest of Fukushōji temple
Rev. Kaiyo Takubo, MD, PhD

福性寺の歴史
父母の一生と父母の時代の福性寺
田久保雅子の思いで（第四版）
英文紹介　英文写真説明付き

発行日 平成二十七年四月二十三日
編　集　田久保海誉
発　行　宗教法人
真言宗豊山派　福性寺
〒114—0004
東京都北区堀船3—10—16
電話 03（3911）7701
FAX 03（3911）7702
http://fukushoji-horifune.net/
印刷所　社会福祉法人東京コロニー
コロニー印刷
〒165—0023
東京都中野区江原町2—6—7
電話 03（3953）3536
FAX 03（3951）9163
© Fukushōji temple 2017

History *of* Fukushōji Temple

Fukushōji temple in my parents' lifetimes
Memories of Masako Takubo
Short explanation of Fukushōji temple
with English captions for the photographs

(Fourth Edition)

Edited by Kaiyo Takubo, MD, PhD